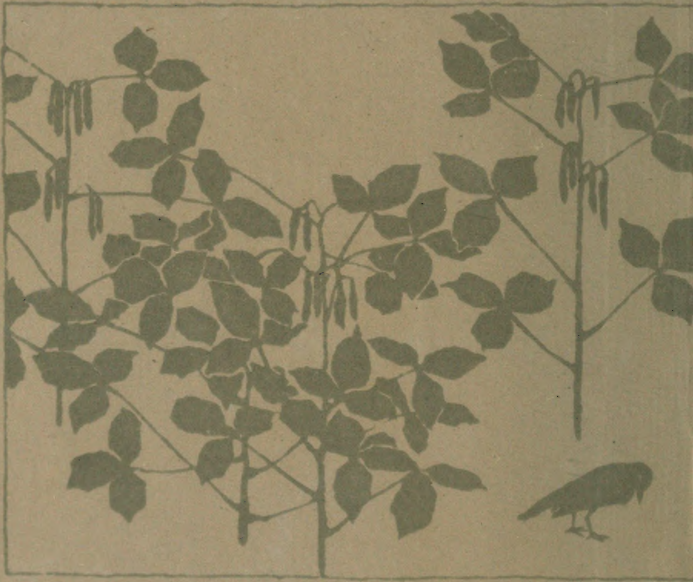
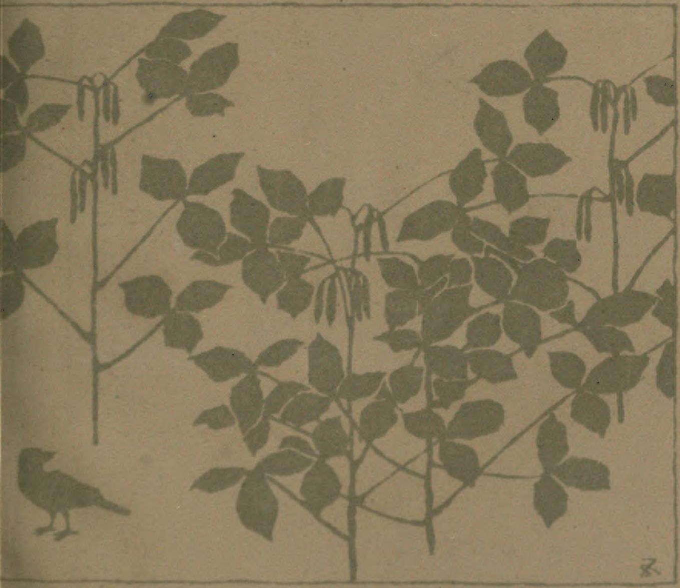




大正四年六月廿三日印刷
大正四年六月廿六日發行

有朋堂文庫（非賣品）
古今夷曲・萬載・德和歌

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

德和歌萬載集終

千金のかはぎぬは一狐腋にあらず、萬載のことばは一編の集につくさず、こゝに四方赤良花鳥になれて月雪にあかず。されば雅筵としてむかへざるはなく、はた酒樓として醉はざるもなし。赤良さいつ比、はじめて萬載狂歌集を選ぶ。たま〳〵選者のことにあづかりしより、江戸四里四方のすきびと赤良がえらびに應ぜんとて、もてあつまれる草稿五くるまにあまり、かつ千箱にみてり。赤良ふたゝび一帙のしふをえらぶ。醉中往々狂詠にふけりて、老のまさにいたらんことをしらず。赤良はたしてとこわか後萬ざいしふとなつぐ。赤良がえらびをけみするに、後のえらびはほとんどさきの選よりもくはし。あゝ千金のかはぎぬは一狐腋にあらず、萬載のことばは一編の集につくさず、赤良がえらび萬載よりしてなほ百萬載にいたらば、作者はいよ〳〵たくみなるべく、選者はますますくはしからん。ときに天明四年うづきのはじめ、あけら漢江しるす。

あまてらす神の教をそむかずば人の世の中富貴繁昌

すり鉢のはちの目にもろ〳〵のよごれをもこのすり小木にはらひ玉みそ

寄紙屑神祇　久壽根・兼滿

はらひ給ひきよめて給ふさいはいにあまくだりますかみ屑のかご

用ありともはやく起くる事なかれひまありとも

みだりにうごくことなかれ金は戀の山にすて玉

は酒のふちになぐべし

おのれやれ富貴になさで置くべきか貧乏神の勅ちよくをそむかば

これは貧くうの神人にかゝりてつげ給ひしことば

ならびに御歌となん

石淸水の放生會はうしやうゑの事を人のかたるを聞き侍りて　梁　仲　墨

いはし水みてきた樣やうにはなし鳥さり數はしらねど八まんもあろ

世中百首歌の中に　荒木田守武

とこやみのよし簀の岩戸ひき明けて面しろくもいづる辻君

寄生醉神祇　一節千杖

かくかゝんのんではくらす生醉のつみてふつみもなかとみの友

寄蛸神祇　濱邊黒人

やつ藤の御紋に似ても瑞籬の内へはいれぬ蛸の入道

寄刀神祇　加保茶元成

やはらぐる光も年をふるがたなとけみやさびし赤いはし水

寄幟神祇　紀躬鹿

あたらしく染めしのぼりの棹鹿を神のみまへにふりたてゝ見る

寄鍋神祇　雲樂齋

つねはうそをつくまの人も正直のかうべにかぶる鍋の數々

寄擂小木神祇　戶米人

ひとをどりうたの音頭をとり居前手をしめなはのよれつもつれつ

寄花神祇　　　奴ら藏人

朝な夕な櫻のちりにまじはりて掃除しながら花をみやつこ

寄玉瓜神祇　　　古瀬勝雄

瑞籬にはふや熊野のからす瓜神のみまへの鈴なりにして

寄僧神祇　　　小造千萬里

いたゞきにかみとゞまらせ給へとやしばらくそらぬ僧の月代

寄飯焚神祇　　　高羽子雄鳥

ゆふだすきかけてはたらくめしたきがあしたの米をきよめ給へや

寄傾城神祇　　　竹杖爲輕

うかれ女がまことをみすのかみ心とけてあふみの客人の宮

寄夜發神祇　　　奈間川野等人

此神に心のたけのちかひをばたがかけそめし桶川の里

小兒の宮まゐりの日に　くれ竹世艶

もとよりもちりにまじはる神ぢやとてあくたれものとなさせ給ふな

笠森稻荷團子　なます盛方

たくさんにつむかはらけの團子をばかさもりとこそいふべかりけれ

津の國すみよしの社にまうで侍りて松をみ侍りて　梅下武士

そのむかしきねがみうへの神の松たち臼ほどになりにけるかな

かものあふひのはを地紙の中にすきいれたる扇に　四方赤良

このかみのわけいかづちぞありがたきあふひでも猶あふぎてもなほ

社頭踊　津良河原

人丸社法樂に春のうた一日百首よみて奉りける はじめに

權宗匠梅堂

この神のぬさにもとらん筆つばなほうけぬさきにいざかきのもと

みそかに思ふ事の侍りければある神のみまへに 鈴をふりてせちにいのり侍るとて

身輕折輔 北尾政演

千早ぶる神のみすゞにすがりてもなるとならぬは音にきかまし

江戸高田寶泉寺の庭にあらたにふじの形をつく りて淺間の宮をあがめ侍りければ

紀有安

出來たてのふじのおほこは水無月のすばしり口にまるりてぞしる

むさしの國桶川の宿にいとふりたる社ありこの 頃たれいふとなく人まうでくる事おほしと聞き て

二歩只取

徳和歌後萬載集　巻第十五

神祇歌

賀茂　星屋光次

下上の賀茂はいづれかみおやぞと禰宜にたづねて糺べらなり

祇園會　藤滿丸

祇園會のみこしもひかる玉鉾の道しある代の祭するとき

祇園會のあくる日に　星屋光次

けふは又はきだめ山に蒲鉾のわけをすてたる祇園會の跡

江戸芝浦に鹿島の社海をむかひてたてるあり海上をまもらんとの事ゆゑなりと聞きて　濱邊黒人

海を守る神をいさめのひとをどりかしま浦にはなんなかりける

本庄押上村普賢にまうでて

舟も象となりて川より此寺へおし上村のふげんなるかも

寄早稲釋教　　内匠はしら

一つかみ早稲のみいれを手の内へ佛のくどくするす引なり

寄虱釋教　　良村安世

世をいとふ身にもしらみ、はすみ染の衣のたまご珠數つなぎなり

如是本末究竟等　　朱樂漢江

なく聲をぬえとはきけど尾を見てはしりかかしらかいかでわくべき

あけくれにつみかさねたる車引身をうしとてや願ふ念佛

無筆誦經　堂伴白主

つの文字もかく事なくてはんにや經よむのはうはのそらおぼえなり

隣家誦經　天保川成

やねとやね谷のとなりに聲はるはうぐひすならでほゝうほけ經

山寺連歌　腹から秋人

連歌してこの山寺におりはしや見わたす景のうら表よき

紫野のほとり酒うる家にやすらひて一休和尚の

事など思ひ出侍りて　世入道へまうし

又六が門ごくらくときくからにさかむに佛のいやたふとけれ

芝青松寺にて　星屋光次

青松寺萬年山の額みればちとせの松や十たび植ゑけん

引上げて讀誦の聲も高灯籠よは過ぐる頃ひとりきえ佛

御講參をみて　　わらべ友竹

はかまをばとりて御講へ參るなりねがひこんだる西のかたぎぬ

ある家に葡萄のよくなりたるを見にまかりしに

あるじ同行のよしかたられければ　　へつゝ東作

佛道にちかきぶどうのたなごころあはせてたのめ數珠の一ふさ

法師のうかれて歌舞妓役者の聲色をつかひしを

聞きてその法師にかはりてよめる　　山手白人

不行儀な出家と人はとがめなようたふもまふものりの聲色

僧の松をつくるを見て　　馬場金埒

墨染に思はぬ罪をつくり木の松に五かいをたもたせにけり

車力念佛　　北向左武喜

徳和歌後萬載集　卷第十四

釋教歌

子こもりの鹽引を見侍りて　山手白人

鹽引の一尺そんの御子にははらゝごらこそおはしましけれ

法華の心を　横道黒塗師

この經は無二やく無さんのわれらまで佛になるは一乘の事

達摩　棟上高見

とゝせにはひとゝせたらぬこゝのとせくがいももはや來年があけ　四方赤良

庭前のかしは餅にやねもしなんあしの一葉の船の小蒲團

高灯籠　算木有政

〈〻〻〻〻〈〻〻〻〻〻〻〈〻〻〻〻〈〻〻〻〻〻〻〈〻〻〻〻〻〻

木名十　渡海り花成

すぎしひのきみとぬるてをかざりかやめぐりあふちとまつがはかなし

鳥名十　笹鷹

かりのとき山からつどひいづるみはときしやさきのあやうからずや

鳥の名を十かくして戀の歌よめと人のいひければ籠の鳥になずらへてうかれめの心を　浮鷗

あだごいをしつるのもましこざるひはこうしにほされ猶うかり兒

魚名十　山手白人

こひしさはいかにますかとふくかぜのなさけきゝたいいなのさゝはら

廻文

ある人の放屁しけるをかたへの人わらふあまりに廻文の歌よめといひければ　加ほ茶元成

からまでもきこえしものはつの國のはしばの官のたかい關白(くわんぱく)

物名

はなをすり　はし鷹身寄

かきごしに梅が香かをる春風(はるかぜ)ははなをすりてや吹き通(かよ)ふらん

新吉原火えん玉屋のうかれ女しづはたが月見に

しとねのしきぞめせしときしきぞめしづはたく

わえんたまといへる文字をたていれ侍りて　手柄岡持

折(をり)をえてにしきそめなすしづはたの山にくわえん玉の光も

草名十　利茂

ひともじをあにらいもうとかよげたてせりあふひまにふきけしなしそ

菜菓名十　山手白人

ぎやうとくもせりたてよなすうたのくわいゆとりのないもおほね口豆

われそこにきかで居たるは何の耳ぞも

すゝはらひを見侍りて　鈍奈法師

かの家にすゝはくをのこしかなはきそ
かりつゝも君がきまさんすゝの上ばり

出立のことなるなりのすゝはきを
みる時にこそしらぬ翁にあふ心地すれ

混本歌

ある人に酒をふるまひけるにあたゝむるまもま
たでひやにて飲みければ　穿沙

いれ上戸かんをもまたずひやで飲むくせのわるさよ

折句歌

かきつばたといふ五文字を句の上に置きて　鵜柄仙口

年のくれ　たゞかけごひの　かほを見て　なきぬべらなり
後悔の　かへらぬながら　くりごとを　たゆる時なく
かくなはに　思ひみだれて　勘定の　たらぬがちなる
足引の　山した水の　にげかくれ　戸棚の中に
ひとり居て　あはれ〳〵と　なげきあまり　せんすべなみに
よこにねにけり

反歌

八重葎おほかる宿の冬がれもなどかけごひにさはらざりけん

旋頭歌

人の來たりてあない乞ひけれども從者の聞きつ
けざりければ　　　　　　　　　　　　　　　　翠　流
うちつけにおもてで人の物まうといふ

おく霜の　しろきはもちの　ことしろの　神田まではや
正月の　きぬくばりしつ　まつ竹も　いとなみたてゝ
間見するかも

反歌

光陰のやたらはやくもくる春に心そはく〳〵としのせき候

述懐　鈍奈法師

思ふこと　かなはねばこそ　うき世とは　かねて存じて
居りぬれど　やゝそろばんの　けたちがひ　二六時中に
かねほしと　まなくひまなく　ふじのねの　もえつくとはに
思へども　もつての外に　さぶろくの　ゆきや氷に
とぢられて　はたらくことも　かたをなみ　あしずりしつゝ
なにしかも　人をうらみん　さりながら　ふつまりなりし

せん念の　心ねしやかの　十夜まへ　うしろあはせに
ゐの子とて　くはれる重の　うちは同士　こなひこどもが
もちくばり　ねのこは三か　いちのさま　さま〳〵ひさぐ
魚の名の　えびす講には　直や高き　いやしきわざも
すみうりの　その日〳〵を　くれはとり　おもしろからずに
うりありき　雪にはいとど　黒き指　十し天一
ひとせの　めぐり暦を　かうがへて　みかどへさゝげ
たまみその　ひなもみやこも　一陽の　ふくづふくとの
あつものは　あたゝかみこの　きれ〳〵も　出あひがしらの
はちたゝき　世を瓢箪に　ぬらくらと　なまづましなる
茶せん髪　なでずやありけん　たらの魚　雪は文字の
つくりどり　驚かぬよの　すゝはらひ　あけがたかけて

よるべなき　かたわ車を　みせものに　する墨流し
いろ〳〵の　似顔にしきの　川いちに　たがこわいろや
うたかたの　きえてはともす　うば玉火　しだり櫻の
よし野丸　うらやましげし　人しげき　茶屋の床机に
ごじかたを　はなしうなぎや　はりがねの　みかけはひかる
玉くしげ　箱入にして　溫石の　石川島も
ちかく見ゆらん

反歌

見わたせばあは雪花火橋の月あたへ千萬兩國の景

冬の長うた　問屋酒船

ちはやぶる　神も出雲へ　ゆく秋は　きのふとすぎの
むらしぐれ　僧や法師の　けさよりば　ころも參加を

上手どもよりあつまれる　見物に　はめをはづして
こみ馬の　あとあしになる　やくしやまで　尻尾をふつて
はねきれば　鼻毛をのばし　とんぼうに　つられてぞ行く
いくたびか　秋田ときけど　見あかざりけり

此うた古今我集にみえたり

兩國橋のほとりにてよめる　　つむり光

鎗たえぬ　兩國ばしを　いくめぐり　めぐりてみれば
ふじの根も　おも白たへに　あは雪の　ふりに呼びこむ
前だれは　たれと契らん　いくよ餅　いまやつくばの
山うりは　うそさへつきの　くまの膏　あぶら蟲てふ
子もり子の　あまのみるめの　かるわざは　鶴の爲ひろひ
竹わたり　いく千代としを　ふるでくの　あやつり糸の

徳和歌後萬載集　巻第十三

雜體

短歌

ひととせ江府の狂言芝居市村竹之丞座に上方より秋田彦四郎といへる道外かたの下りて狂言をあてけると聞きて

笹　　　麿

雨芝居つむ蒸籠の　山たかき　木戸番の聲
やかましく貴賤群集の　とり沙汰は　いづれと心
さだめなき時雨ふりおく　あづまぢや　江戸風はいさ
しらぬひのつくすたはけの　かほみせに　よき評判と
えてに帆をあげてあてたる　ふきや町　市村竹の

萬載集にたゞ一首いりたる事をなげきて　加保茶元成

とく和歌をよまば集にももれまじを後萬載とはなりにけるかな

萬載集世にひろまりて後萬載集のもとめせちなればよろこびのあまりに　板元伊八

まんざいはわれらが家の大夫殿はらづつみうつとく和歌の集

ひまのないし

起出づるねみだれ髪の朝ぼらけときあげ櫛にたまるあかつき

夜明烏　大屁股臭

押柄に人の妻戸をあけがらすかゝあ〱と呼び渡るかな

雨ふりの日傘といふ事を　山手白人

ことわりや長柄もちならふりもせめさりとてはまたひがらかさとは

座鋪八景の中に時計晩鐘　白鯉館卯雲

たそがれに夜食もちやんとくひしまふ腹の時計や茶はぜんまい

時計大狂　銀杏みつかど

時計をばあてにはせねどあんまりなことにもよるとひるの間違

關放馬　畠あぜ道

板びさしもれて月毛のはなれ馬不破の關屋のあれにあれ行く

くみかはす銚子のさゝにからまりて醉をすゝめの時を江戸節

杜若のゑのつたなきを見侍りて　　大屋裏住

ぬす人にゆかりの色かこんな繪をかきつばたとはふといやつはし

巖にうみほうづきつけたるかたかきたるに　　朱樂漢江

沖津風うみほうづきをふくからに自然とあはのなるとこそきけ

阿那可師古わがすがたをゑがかしめて歌をこひけれは　　四方赤良

鏡にて見しりごしなるわがすがたお目にかゝるもひさしぶりなり

四方　　東菊麿

煩惱はみなみのあたと北面をすてゝあづまの富士見西行

曉　　田畑持麿　下毛栃木

夢にのみひろひしうそのかは財布うき世にかへす曉のかね

むら雨のやがてはるゝとしりながらやどる心やひさしかるらん

よしのの山の繪に　驪山人東阿

よしのわん雲のはし／＼かゝれるは自然と咲きし花漆かも

四方赤良

むかしだれかゝる狂歌のたねを蒔きてよしのの花もちりになしけん

金魚をかける扇に　權宗匠梅堂

きら／＼と天地金魚のひらめくはみてもすゞしきおせんする哉

虎をかきたる扇に　袋筒長

これも又扇のほねの竹にすむとらのゐなれば風やおこらん

何がし大守のもとにて江戸大夫河東が扇にかきてつかはしけるその扇の繪竹に雀になんありける

四方赤良

布ぶくろ垢落さんと湯あみして豆のから子もつかふなるべし

壽老人笛をふくかたかきたるに　唐衣橘洲

たをやめのあしたならねど壽老人ふくによりくる鹿笛の聲

韃靼人のかたかきたるに　四方赤良

中華とはいへども花は夏の夜のひとよにかはる罌粟坊主かな

太刀うばひとかいへる能狂言のさまを福王何が

しがゐがきしかたはらに　あけらかん江

つかのまに太刀やうばはれ太郎冠者さしづめおのが目釘ぬかれて

萬象亭のあるじ竹杖爲輕のもとめによりて藤花

かづきたる女をかきたる大津繪の扇に　一河齋（鈍通與三兵衛）

たれ人のゆかりの花のすがたぞや今も大津に年をふりそで

雨やどりの繪に　白鯉館卯雲

にはとりの宵鳴もほど過ぎし頃棒ちぎり木でせきに關守

范蠡遊五湖　阿那可師古

功名をとげしもぬけのから衣きまゝにあそぶ五湖のつり舟

米搗　臍穴主

晝間より夜をこめつきや歸るらん朧のかげを庭にのこして

車引　紀定麿

身代はまはりかねたる車引つらきうき世をおしわたれども

猿引　峯松風

三本のたらぬけものもおろかなるわれにましらの藝はもちけり

臼目切　大石小石躬陰

何してもひき臼藝のまにあひはめきり／＼とはかどらぬなり

布袋の湯あみする繪に　友垣古文

もう聞まであらじと思ひきりの木はことわりぞかし〳〵

四方赤良

鐘子期にわかれし時のおみくじは琴をかついで山や過ぎけん

陶淵明

世のうさを柳にやらでませがきのきくとひとしくかへんなんいざ

褒姒

おめかけの屋かたで風をきる頃は船のほゝゑむ花火見物

楊貴妃

空だきの沈香亭の全盛もあはれ馬嵬が原のひとつ屁

赤壁

文月の文もやかよふ神無月うらをかへして遊ぶ赤壁

函谷關

徳和歌後萬載集　卷第十二

雜歌下

老子　四方赤良

桃栗は三年柹は八年の中にすもゝは八十年の春

莊子

莊周も猫に追はれてうなされん蝴蝶となりし春の日の夢

列子

追風にのりゆく時は道中のくものあしよりはやき駕舁

唐堯

おふたりの娘にひとり聟養子土階三尺こぬか三合

伯牙　買夕 攝州神戸

かはらけの落つる所もかすかなるその日ぐらしの茶屋のあきなひ
花道つらねが木場のやどりを訪ひ侍りしに門に
二もとの松の立てるを見て　四方赤良
はるぐ〵とたづねてき場のがくれ家は杉にはあらぬ松たてる門
日ぐらしの里にて　口影土龍
今日はけふ明日はあすかの山ちかきその日ぐらしに遊ぶこそよき
題しらず　長々浪人
さぶらひのかゞみと人のいふなれば我もうらやにかゞみてぞすむ
花道つらね
おほけなく柿の素袍におほふかな我がたつ芝居みやうがあらせ給へや

りけるに橘大夫の舞ひければ　　四方赤良

蓮生の道ゆきがかりとりあへずうたふも舞ふもつはもの揃

返し　　橘大夫元家 九代目市村羽左衛門

はじめての蓮中さまに蓮生の道行きがかりさても迷惑

きさらぎの頃山道高彦とぶらひ來ませしかば　　澤邊あや子 芳澤菖蒲

ざれ歌に聞きつたふ名は高ひこの君もはじめてきさらぎの頃

返し　　山道高彦

諸人のひくや地藝もよし澤のあやめにはつのけんざん位なり

題しらず　　三方長のし

針ほどな事に棒つぐ足輕は重きやしきの武士の金鐵

四方赤良と共に日ぐらしの里にあそび侍りてか
ぱらけを谷へなげて興じ侍りける時　　一本鎗主

福徳の寶と思へのらむすこいつも親父にもらふ目の玉

わが持たる蓑龜を見る人多ければ　　風來山人

天が下名をふることのしるしには多くの人の來てはみの龜

ひとのすぎはひといへることを　　檜皮釘武

ほそくともかりのうき世をすぎ楊枝おく歯に物のかゝる苦はなし

雨の夜峯松風のもとにて　　讀人志禮多

源氏にはあらぬ雨夜の物語六十帖もこの四疊半

ある人淺草海苔をほそくたちてやき酒のさかな

にとていだしければ　　久壽根兼滿

たゞのりを短册なりにやかれしはむかしながらの山ざくら炭

東牛齋にて布留糸道のさみせんにあはせて誌仲

といへる翁源平つはもの揃蓮生道行の段をかた

[illegible]やんごとなき方に久しうてま見え侍りしにわが
老いさらぼへる様をあはれみ給ひてまことに麒
[illegible]麟も老いぬれば宣ひし時　　白鯉館卯雲
[illegible]
わたくしに麒麟の事はあらざりき駑馬におとるはわかいうちから
[illegible]大屋うら住のやどりちかければ日ごとにとひ侍
[illegible]りて[illegible]　　腹から秋人
たはれたる和歌のうら住ちかければあし間を見てはたづねこそすれ
[illegible]やはらの師にわぶることありてひたすらいひも
[illegible]のすれど心とけ侍らねばいかにやはらぐべきわ
びうたをと人のもとめに　　から衣橘洲
もの丶ふの心やはらもしらぬ身は手もなくかゞむ腰折の歌
[illegible]放蕩なる男子のもとへ　　拙堂法師

くれ竹ときけばこなたはほし合の空時宜なしにもらひ申さん

神無月の比ある人のもとへ美濃紙をこひにつかはすとて

ふる筆の笠はあれどもがみな月時雨をふせぐみのを賜はれ

何がしの大守下著にもろ人の狂歌をかゝしめて狂歌衣と名づけ給ひしにその衣のそびらに花信齋が筆して猿をかきたるを見て　四方赤良

誹諧の猿の小簑もこの頃は狂歌衣をほしげなりけり

雨のあしたすて子を見侍りて

子をすつるやぶしもわかぬくらき夜に涙の雨やしのをつき弓

雨夜百物語　出諏訪耳彦

ばけものの話はたつた一筋の燈心さへもけしからぬ雨

御細工のしてがよければ脇にさす太刀も一ふりある男舞

　　無法者ぬす人にあふといふ事を

無法者おのがやじりはきられたりとるにかひなき運のつき弓

　　ふとゐと河骨を生花にせんとて轡どめにいけか
　　ぬる人を見侍りて　寐小辨垂高

口ごはきふとゐはつなのくつはどめかう骨折つて居るもいけずき

　　米のあたへ貴き頃市のほとりを過ぎ侍りて　一本鎗主

帆をあげし米のあたへは高砂のこのうら店によくも住の江

　　菊畑にませ垣したるかたはらに下部のしよする
　　を見侍りて　紫山加理

牡丹なら名にめでしとも見ゆるさめ菊のまがきにしよはいかにぞ

　　文月六日人のもとより竹をおくらんとありしに　手柄岡持

邪許歌を聞きて　武士八十氏

力をも入れずして待つ手ぢかくのつちを動すきやり歌かな

居ねぶりする人を見て　野見秋足

居ねぶりの船こぎ出すうみづらはいく朝はやくおきつしら波

咄上手聞上手といふ諺を　山手白人

お上手のはなしすゝめもかひぞなき身は聞下手のしかも籠耳

傾城無筆　銀杏満門

思はずよ世にうかれ女の八文字その駒下駄もふみかゝぬとは

傾城博奕　竹杖すがる

ふせるのはよきめと思ふつぼざらをふりてあはざるはりのつよさよ

ある人主人の命にて能の太刀をつくりてあげしと聞きて　平秩東作

うば玉の夜を黒石になずらへてかけごの枕うちもこそぬれ

双陸(すごろく)にまけぬれば　加保茶元成

双六(すごろく)をうつの山べのうつゝにも夢にもひとつ勝たぬなりけり

みやこに侍りし頃烏石山人のもとにて阿野卿の御書あそばさるゝを見奉りて　世入道へまうし

水ぐきの御跡におそれ夏ながらぞつとするほどかんじ入りけり

夜業　勘定疎人

よなべかと問へどこたへもないぎかや口にたまりしうむのあいさつ

川向喧嘩　一升夢輔

はてしなき水かけ論の川むかひわたりもつかではらをたつ波

圍碁によせて喧嘩(けんくわ)の中なほりの心をよめる　唐衣橘洲

生死(いきしに)の論はむやくと打ちかへてなほる中手(なかて)の圍碁(ゐご)はむつまし

花よめごとくみよし野と思ひしにお目にかゝるはけふがおはつ瀬

狐嫁入　八十氏人

よるのとの嫁御はいつかこん〳〵とまてば甘露のひでり雨かな

京　間内則

かづく藻の花よめの顔ながめんと舅もそばへよるの殿さま

女房なき家はとりしまりなきなど人のいひければ　吾足齋瀧園

小ぎれいなすまひはならず女房がなければむさいくらしなりけり

生みたまのいはひの日碁をうつ人を見侍りて　仲吉子好

はぬる魚おさへて切つてふた親をいはふがかうのいき身たまかも

圍碁すきける人のもとにて黒くぬりてかけごある枕を出してねぶりをすゝめけるに　津無坊早耳

癪をやめる人に針うちてやるにつれなくもなほらねば　から衣橘洲

うち侘びて今はせんかたつくば山にひはりいしのまねはすれども

灸をすうる人を見侍りて　澤邊帆足

すゑやうとやうやく思ひきりもぐさこれがきかいで何としやうもん

癪病をうれへ侍りける時　四方赤良

思ひきやわがしやくせんのしやくならでわきしやうもんにこはるべしとは

夕立嫁入　阿久垂粕

夕立にあふ嫁入の行列はつぎ〳〵までもぬれの相伴

喜三二のなかだちにて妻をむかへければ　酒上不埒（戀川春町）

婚禮も作者の世話で出來ぬるはこれ草本のえにしなるらん

ある人の嫁にはじめてあひ侍りて　山手白人

孫の疱瘡を見侍りて　車屋義人

疱瘡をするがのふじの山たかくげふみづうみのはじめなりけり

連歌をこのめる人痢病をやみけるに　紀定麿

連歌師のさりきらひなくくひし物うちこしてより痢病とやなる

人のはやり風ひけると聞きて　問屋酒船

引風の邪鬼追ひはらふしやうきさんたゞ一服でげん宗の夢

風を引きて咳のいでければ　堂伴白主

水ばなのちるともよしやよしの川しがらみかけてせきとゞめなん

やまひののちしばらく酒をやめ侍りければ　峯松風

下戸となる我身ひとつをなげくなりふたつみつよついつかのみたや

盲人針治　勘定疎人

世のやみをさぐり〳〵て針たての心ほそくもうちくらすかや

徳和歌後萬載集　巻第十一

雑歌中

九十六になりける人によみてつかはしける　吾足齋濵園

おあしさへ達者(たつしや)でしかも錢百のとしにすこしも不足ござらぬ

浮腫をやめる時消息してとはれし人にこたへ侍る　手柄岡持

わがやまひとひ給はればすら〳〵と水もながるゝ心地こそすれ

目をやめる人をみ侍りて　便々館湖鯉鮒

うば玉のやみ目は空に知られねどかた〳〵はほしかた〳〵は雲

女子の疱瘡を見侍りて　篩藥中貫

はら〳〵と四乳(よつち)の様(やう)な疱瘡(ほうさう)はかせかけるほどさてもよくなる

鳶とんで天にいたりし油揚はときにとつての僧のめいわく

ほしなを見侍りて　　生儘成

いたづらにわが身は干葉の年をへてむかしの若菜今はこひしき

淺草の酒家うかむ瀨といへるたかどのにて鮑の貝の大なる盃にて酒すゝめければ

生醉とわらはゞわらへ味酒のみをすててこそうかむ瀨の貝

うかむ瀨のたかどのにて酒のみけるに人々庭におりたらて蹴鞠せしにまりのそれて川の中に落ちければ

多田人成

うかむ瀨にしづめるまりもすみだ川ありやなしやと船頭に問ふ

友だちひとりふたり目黑に詣でけるにそのともひとりは上戸ひとりは下戸になんありける折から雨ふりければ

泥道すべる

村雨のさめるもあれば醉ふもありこれやめぐろのふどうなるらん

鳶の油揚豆腐をさらひ行くをみ侍りて

富家來富有

たまはるは御所にも似たり言の葉の花もみもある枝がきのもと

澁柹をとりてあまほしにしけるが天氣あしくて不出來なるを人にすゝむるとて　古屋雨漏

あまほしにすれば天氣もかきくもるしぶ〳〵ながらあがり給へや

すみだ川のほとり牛島といふ所に中田屋といへる酒家ありみな人これを葛西太郎と呼ぶいけすの鯉に名あり　平秩東作

庖丁がとく牛島のあらひ鯉かいしく芦のはさへこぼれず

歌舞妓工　中村重助

川風に鬢そゝけたる人ばかりあらうて食ふは鯉のひやもの

四方赤良

ふたつもじ牛の御前のむかふ島太郎が鯉はいけの中田屋

牡丹餅をたなにあげはの蝶もこんかけしきなこは菜の花の色

むさしの國一の宮の池よりぬなはをとりておく
られける人に　かすく齋余丹坊

たべつけぬ生じゆんさいをみたらしやこれぞむさしの一のおみやげ

詩人嗜餅　竹杖爲輕

酒一斗のみにし人も物かはとかみこなしたる餅は太白

隣より黍團子をもらひて　丹青齋

下さるは日本一の黍團子ひとつついたるおともいたしした

智惠内子のもとへ大和柿にそへてよみてつかは
しける　吉野葛子

よみならふ歌のたねにとへたながら心ばかりをかきおくるなり

返し　智惠ないし

ごばん所へうつてかはつた進物をかうでかつをのさしみとも見よ

醬滓　　栗成笑

山にもる醬油のみこそかなしけれ秋はてぬればくふ人もなし

鮎の鮓をたうべて　　養父坂押躬

千金にかへじと思ふあゆの鮓これもかはせにのぼり下れば

奈良漬　　鵜柄仙口

ならづけはならにかぎらずいづくでもかすがあるからならづけといふ

米のあたへたふとき比　　瓢から酒

花よりは團子ちいさく見えにけり小米ざくらもあたへ千金

なりはひあしきとし粥の攝待するを見侍りて　　董菴退一（美濃）

貧民のうゑたる腹へほどこしのかゆい所へ手のとゞく慈悲

棚上牡餅丹餅　　雀酒盛

ぐそくびらきの日紀定麿來りければ　酒上不埒

五十歩も百歩も同じ足もとのよろりよろひと醉ひ給へかし

返し　紀定麿

むだ口は何のやくにもたゝかひをもつてたゝれぬほどに醉ひけり

人のもとへ酒さかなをおくるとて　可笑

初秋の風もふくらにおね酒の口にあはびのかひあらまほし

伊豫守何がしのもとにてはたしろといへる魚を味噌吸物にして出しければ　山手白人

これも又いよのゆげたの馳走とてとをはたしろのみそになりけり

生醉音樂　もとの木あみ

ひちりきの舌もまはらず大酒にうどのゝあしもたゝらぬ生醉

何がしのとのゐ所にかつをのさしみを送るとて　平生三里季保

菊印の酒を人のもとにおくるとて　猿萬里大夫

あくるたびどく〳〵〳〵と音あれど藥ときくの酒印かな

やごとなき方より月をゑがきし船のかたちしたる盃をたまはりければ　仲吉子よし

君は舟しんもろはくを引きうけてのまばや水にうかぶさかづき

題しらず　風前雲助 升見縣

一年は酒にひたりて過してきこの世はさめて夢にぞありける

雀酒盛　置石村路

もとよりも雀はさゝがすきなればゑさしの竿にさいつさゝれつ

久しくあはざりける山田氏にいなだといへる肴にて酒すゝむるとて　武士八十氏

今もつて酒はやまだのをろちなら出す肴もいなだ姫ぞや

老女懐舊　　　宿屋めし盛

いつのまにみどりの髪も雪つみて柳ごしさへかくかゞみぬる

紀定麿

思ひ出づる嫁入の時の丸綿も今はしらがの雪とふる婆

遣手婆懐舊　　　小川町住

俤のかはりて年もつもる身は名のみやりてのはなをとる婆

紀定麿

駒下駄にいさみしわれも今ははや遣手の婆のらちくちもなし

まらうどのまうけにさかな調じけるとき　　　大飯食人

水すまばまづ赤えひをあらふべしにごらば鮒の足をあらはん

盃の蒔繪を見侍りて　　　人世話成

さかづきのうらは蒔繪の鳥なればおさへる人もさす人もあり

昔よりわがすむところは水難の沙汰なかりしに天明三年文月の頃大水出でて家居もながれ侍りければ

嘯月齋鴉山

はなしにもきかぬ寐みゝに水入りて戸口に舟のかよるためしは

不破の月見んと約束せしもことしの水難にて無下になりけるがその日になりて友のさそひ來にければ

水難にしづむ心もつい月にうかれてふはと出かけこそすれ

武士貧乏

山手白人

貧すれば質におくので太刀かたなさすがは武士のうけつ流しつ

炭團うるもののまづしきを見て

大原久ちる

借錢をまろめかねてや炭團屋が身をけしずみの粉にはたらくらん

世にたつはくるしかりけり腰屏風まがりなりには折かゞめども

寄浴衣述懐　　糟句齋余丹坊

雑巾となるみざらしの古ゆかた又しぼられてくちやはてなん

春のはじめ何がしのもとをあるじとし侍りて　　さくらはね炭

こゝに一夜かしこに一夜笹鳴の身はうぐひすと飛びありくなる

題しらず　　引わり御膳

ふき自在ならぬ女子の身の上に男みやうがのあらせ給へや

四十にちかきとし前歯の一つ落ちはべりければ　　馬屋まや輔

青かりしあたまもいつか村紅葉ひとはちり行く身の秋ぞうき

世のいとなみのしげきによりてこのめるあそびも遠ざかりけるに　　加保茶元成

なみならぬ用事のたんとよせくれば釣にゆくまもあらいそがしや

塞翁がうまい事ならいつとても跡からうしが來ると思へや　四方赤良

老述懷

世の中の人には時の狂歌師とよばるゝ名こそをかしかりけれ　志月菴素庭

鐘撞述懷

老のみとなるこの瓜の今ははや婆でなければ齒にあはぬなり　眞竹深藪

鑓持述懷

ひとつづつつつくまにつくやためいきの身はすてがねとかねて思へど　問屋酒船

寄菊述懷

このまゝにいつまで年をふる鑓とわづかとり毛の身をかこつなり　山道高ひこ

寄屛風述懷

行秋とあすしら菊の露の身のうきは涙にひたし物なり　から衣橘洲

閑居燈　　銀杏滿門

世をすつる心もほそきともし火に物おもはする吉丁子かな

しのばずの池のほとりなる山田景富のやどりを
とひ侍りしに風景いはんかたなければ　　四方赤良

垣ごしにむかふが岡の景色をもわが物がほとしのばずの池　　手柄岡持

述懷

金なきと隙のなきとにかへてまし病ある身と苦勞ある身を　　加陪仲塗

とし〴〵に目もよわりゆきはもかくるふるのこぎりのひきてなき身は　　清水立登麿

われが身も三十にしてたつか弓やたけ心にまとふたゞ中　　嘯月齋鴉山 淡路神戸

苔埋古墳　　乜常持

年ふれば石のはだへもさぶきにや苔の衣(ころも)をくるみてぞ居る

辻番栽松　　へつゝ東作

辻番が下座(げざ)のかた手の作(つく)り松日に十(ど)かへりもはひつははせつ

題しらず　　傘勝守 尾張

なげてしるこのかはらけの音なきに麥のはたけの地にみつるとは

山家　　石部金吉

鐵炮のかくれずみなる山里にたま／＼人もねらひ來るなり

放屁百首歌の中に　　四方赤良

山ざとにしりごみしつゝ入りしよりうき世の事は屁とも思はず

山家獸　　いつも早秋

音づるゝ物は狸(たぬき)のはらづつみちつとも人のとはぬ山里

一谷　腮長馬貫

一しきりたゆみて又もあつもりの末は露けき月のくまがへ

狐渡諏訪湖といふ事を　内匠はしら

氷りてはゆきつきつねのおのづからすはうち連れてわたる湖水ぞ

常産阿馬

みな人は神のをしへをすはこそと氷はるかにわたる水うみ

名所博奕　智惠内子

かつ事はとほつあふみのまけばくちもとでもいなさ細江なるべし

名所生醉　堂作白主

白波のたつもよろ〳〵生醉の顔はあかしのうら千鳥足

庭苔　夕霧籬

人とはぬ庭もわが身もあかづきて苔むしけりなもののくさの庵

きさらぎ十日あまり二日四方赤良あけら漢江に
いざなはれてすみだ川に舟逍遙しけるに折しも
月おぼろに空のけしきもたゞならねば人々歌よ
みきようじけるついでに　銀杏滿門
船頭はなくとも舟は波の上をどうかこうかといさり火の影
樓臨三絃江といふことを　平秩東作
玉琴にをさめし國のためしをもひく三味線のほりの高殿
下總のくに小金原を過ぐるとて　今村寄樂齋
名にしおはゞかしてくれかしこがね原末になすのよ果は見えねど
八代にいたるとて火川といふ所にてひうち石ひ
らうて　横道黑塗師
ひのもとの肥後の火川のひうち石ひゞにひとふたひらふひと〴〵

徳和歌後萬載集　巻第十

雑歌上

いとよう空はれわたれる夕富士のねを見やりて
「白扇倒懸東海天」といへるからうたを思ひ出でて　朱楽漢江

白扇をさかさにかけし山はいまつまこがしたる煙たつなり

日ぐらしの里本行寺に物見塚とてこだかき所あり筑波山人のかきたるいしぶみ立てりこの寺の庭よりつくば山もよくはれわたりて見えければ　婆阿

物見塚むかしたづねてふみ見れば右と左につくば山人

隅田川　紀定麿

一ぱいに硯の海をひき出してすりながしたるすみ田川かな

まざ〳〵とうそばつかりをいひなさるしりもむすばぬ君が言の葉

寄酉戀　和歌も少々讀安

まちわびてさつそくはづすかけがねはとりのそらねもいらぬ閨の戸

寄戌戀

棒ならで今宵は君にあふ夜なりねせはしやせぬさあおきな丸

寄亥戀　園蝴蝶

ゐのしゝのふり向きがたき戀路かなたとへ命を牙にかけても

寄猫戀　すは子

垣ほよりすがたをちらとみけ猫のまたたび〳〵に思ひみだるゝ

つれなさよ風のたよりにいひよれどはりこのとらのかぶりのみして

寄卯戀　　三方長熨斗

つらさうさうさぎの耳のなが文をかきちらしてやきりよ命毛

寄辰戀　　藤葉奈丸

今ははやうき名もたつの天上にのぼりつめたるわが戀路かな

寄巳戀　　扇折風

くちなはの二筋となき心にてもつれあひたる戀とこそなれ

寄午戀　　三方長のし

夢にさへ君が心ははなれ馬うしを見し夜ぞ今は戀しき

寄未戀　　藤葉奈丸

ひつじにはあらねど君が玉章のくひさき紙はくひたくも有り

寄申戀　　ひまのないし

馬にのる身にも戀路はかちはだしとりもつ人を力草かな

寄猿戀　　加保茶元成

つれなさに思ひはなほもまさるなりひつかきおくる言の葉もがな

寄象戀　　内匠半四ら

つゝめども女の髪につながれて心のたけをみんなはく象

寄鯛戀　　門限面倒

色香にはあらはれねどもなまだひのちと御座つたと見ゆる日のうち

寄子戀　　和歌も少々讀安

椀箱にねずみの入りし心地してくるしき戀はねつかれもせず

寄丑戀　　藤葉な丸

わが戀はかの老人の牛ならでりんきの角をひけらかさるゝ

寄寅戀　　榎雨露住

今日よりや思ひまゐらせそろ〳〵とうきみの紙に戀の手習(てならひ)

峯松風

咲きそめし花のいろはも戀風にちりけもとからぞつとするすみ

車井多久類

いろはより手をとり初めてをしふれば紅葉ちりぬるお若衆(わかしゆ)の顔

寄蹴鞠戀

朝起つらき

あふ事もありや〳〵とまちけるにさら〳〵とんと君のそれまり

寄踊戀

海老船守

盆々とちぎるにむねも踊子(をどりこ)のあひみん事はけふあすばかり

寄花火戀

山道高彦

むすぶべき縁(えん)のつな火(び)の折を得てあふは雨夜の星くだりかも

寄馬戀

鎌倉遠則

をさふねのなみ〳〵ならぬかぢとりて人目の關をうちも越えなん

寄大工戀　絲瓜皮也

くる〳〵と卷きをさめたる墨壺のいともうれしき君が玉章

澤邊横行

墨つぼのいと一筋に思へどもうらむぞ君がまがりがねなる

寄仕立屋戀　猿萬里大夫

きぬ〴〵も立ちわかれぬふ目の針にいとしきみをばさしつもれかし

寄商人戀　便々館湖鯉鮒

思ひねにあはぬうらみを書出しのふみつけられて猶もこふらし

寄乞食戀　普栗釣方

日に千たび門にもたゝんわが戀路どうぞかなへて下さいやしやう

寄手習戀　常産阿馬

こい中もうす紫の藤の花さくといふさへきにかゝりつる

寄栗戀　はし鷹身寄

しぶ〳〵ないらへながらにうつぶくはまだうたぐりのき娘ぞかし

寄竹戀　大非武卿

此君とひとよ寐ぶしのさゞめ言思ひのたけもわりていはゞや

寄筍戀　よしのゝ葛子

人日をもいくへかつゝむ竹の子のふしのまに〳〵心こめつゝ

柳　すくなり

思ふたけのこるはなしのみじか夜にねほりはほりは深い戀中

寄武士戀　常産阿馬

弓とりのるるやくそくを引きつるははなれて後にあはじとや思ふ

寄鍛冶戀　皆人和良布

梅干のすいはみをくふならひとてたえぬ思ひのたねばかりなり

寄牡丹戀　　秋風女房

あひ思ふ二人が中もこく牡丹うしとはいはじいろ深見草

寄蓮戀　　人世話成

それとなく戀の糸ひく心ねをほりてきくのも蓮葉なりけり

寄百合戀　　丹青齋

ゆりおこしゆりおこしてもうつぶきて花の顔ばせみせぬ床の間

寄長薯蕷戀　　手柄岡持

あしびきの山に生ふてふ長いものながくもいもにあはでやゝまめや

寄眞桑瓜戀　　四方赤良

あはまくは瓜のはたけに寐もしなんとりつる履のうき名たつとも

寄藤戀　　槽句齋よたん坊

うすからず思ひあひたる中くみは菰かぶるとも心からくち

寄茶戀　大屋裏住

うき事をかたるは今かはつむかしのちむかしまで別義あらじな

寄燒飯戀　垢染衣紋

あはれともいふ人はなしあぶりこの身はやきいひにむねぞこがるゝ

寄冷食戀　大根太木

朝夕にちぎるとすれど似菩薩の一夜へだてばすゑかはるらし

寄牡丹餅戀　裏堀蟹子丸

牡丹餅の味も心もかはらじとちぎれどへだつ堺重箱

寄田樂豆腐戀　卜柳

やる文のかへしもせねば田樂のくしくむねをこがす我みそ

寄梅干戀　大原久知る

四天王ならねば戀の山入に忍ぶ心の鬼はおそろし

寄羽織紐戀　野見秋足

むすびおくちぎりはほそくうち過ぎてあはぬ羽織のひもたちにけり

寄俵戀　紀みじか

君にわれ思ひをこめのきれしより面やせにける化粧ごもかな

寄米戀　大飯食人

もろともに米つむまでとちぎりてし思ひますめのいねもやられず

寄酒戀　柳直成 上毛

とつくりとかたるあひだもなつの夜にはやさんずるのとりぞなくなる

寄醴戀　多田人成

あまざけのすくなるほどになれそめし二人が中はかたづくりかも

寄中汲酒戀　問屋酒船

寄雪踏戀　濱邊黑人

筆にさへかきたてられぬ燈心の戀にこがれて身もやせ男

寄下駄戀　眞竹深藪

あつ革なせつたのうらのかねごともふみたがへてはひぞるばかりに

下駄のはもたゝぬほどなりわかれ路の涙の雨のふりかよるには

寄十露盤戀　醫者小路匕彩

よしさらば命にかけてそろばんの玉きはるともあはざらめやは　紀定麿

君をのみ思ひまはるちせそろばんのたまさかにあふ中ぞわりなき　猩々變生

十露盤のたま〳〵よればはじかれてあはぬほど猶思ひかけ算　唐衣橘洲

寄赤本戀

たきもののひとりこがるゝ戀やせにたふれふせごぞ骨ばかりなる

寄椀戀

柿下手丸

末のかさかけてちぎれる中かさと親椀たちもかねてしる椀

寄鍋戀

忍岡虚路里

よし君がうそをつくまの鍋ならばわれとぢぶたとなりてあはなん

寄水桶戀

山手白人

水桶のもらさぬ中もたがきれてそこらうき名をながしもとかな

寄茶碗戀

柿下手丸

うちわりていはれぬたけのつゝ茶碗あけくれ物を思ひそめつけ

寄油皿戀

腮長馬貫

かさなりてくらき思ひをした皿にとかく油の君がまはり氣

寄灯心戀

雲樂齋

笠のひもむすぶの神をあてなればとけぬ契の末かけて待つ

寄扇戀　百足こがね

かはらじとちぎりをこめし要とて今宵あふぎの折もたがはず

寄團扇戀　大原ざこね

うたがひし胸のうちわのはれてよりはなれはせじと思ふ姫のり

寄小鼓戀　高山笑翁

うらはりのはなれぬ戀の中なれどあはねば心おきつゞみかな

山手白人

色ふかき思ひのしらべかけ初めてつゞみもつ手もしめつゆるめつ

寄三線戀　四方赤良

色糸のねをにむすぶのかみこまをかけてもうきは何のばちかは

寄薫物戀　ちゝのみ滿門

やう／＼と今宵の手管具足していまやと君を待ちうけの筒

寄車戀　　いつも早秋

くどいても人の心やうし車戀の重荷をつけつまはしつ

秋風女房

うきいのちしばしはよどの水車思ひをくみてめぐりきよかし

やはり棟梁

小車のひく手あまたの君ゆゑに戀の重荷をはこぶ身もうし

寄傘戀　　山手白人

ろく／＼にいらへだにせずからかさのさしもつれなき人心かな

四方赤良

傘のえにしはあれな年月をふるほねかひの手にわたるとも

寄笠戀　　澤邊帆足

ふさがりし胸の火ぶたもきれやらで涙の玉はうちにこもれり

寄刀戀　紀定麿

やつれては心ほそみのみだれ燒ひとりねたばのあはぬ夜ぞうき

書出田丸

君ゆゑに心もうはのそら鞘はさすが人目のしのぎがたなや

寄鞘戀　吾足齋灌園

身をいれてくどけどかたい後家鞘はたゞいつまでもあふ事ぞなき

寄鐔印戀　吳竹よつや

ちら〳〵と見しは思ひもますら男のもたせぶりなる鐔じるしかも

寄具足戀　婆阿

いつまでもいはで忍ぶの草ずりにもゆる思ひは胸のひをどし

腮かき金

うき人を見そめて年をふる筆の命毛かけてかきくどかばや

寄硯戀　　銀杏滿門

いは硯海よりふかく思ふぞよかほは赤間のせきのへだてに

寄硯箱戀　　吹売咽人

うき名のみ高島石のあひがたきねがひを神にかけ硯箱

寄弓戀　　見龍

手ぐすねをひけど人目の重籐ははなすまゆみもなきぞくるしき

寄鐵炮戀　　呉竹節躬

たまさかの音づれとてもうち絶えてうらみのたねが島とこそなれ

如水上毛

玉の緒もたゆる思ひのたねが島さがなき口に火ぶたなければ

紀躬鹿

いつ人の手に入聟をとるやらとたれも思ひをかくる子寶

寄玉戀　峯松風

思ひあふ中はかどなくまろ〳〵と小いさかひさへたまのことなり

寄錢戀　紀定麿

ひとすぢに思ひかさねしみとせんとつきつけいふはさしも恥かし

寄琴戀　腮かきかね

戀人に今日はそひ寐の枕糸みをひきしむることぞわりなき

寄碁戀　加保茶元成

きみとわが心はいづれたがひせんはねかへされて手もなかりけり

書出田丸

つながりし中を今さらきられては二世とかけ目もだめとこそなれ

寄筆戀　望月まん丸

ふみ見れば今宵こいとのうれしさにしのびて足をはこばしご哉

寄簾戀　　山手白人

簾越見かぢる猫にかしは木のえもんつくらふ前わたりかな

寄屛風戀　　糟句齊余丹坊

うき涙ふるき屛風の蝶つがひはなれ〴〵になるぞ悲しき

寄襖戀　　もとの木あみ

人心あさき敷居にせかれてはわれから紙もあけていはれず

山手白人

うちとけて誰とふすまか知らねどもいもが袂のひきておほさよ

寄寶戀　　四方赤良

箱入の娘のとしはいくつぞと隣の寶かぞへてや見ん

鶴簻女

ひとすぢにいなりともいへ戀の山のぼりそめしはけふが初午　子子孫彦

寄文月戀

はやあきもきたかと思ふ戀風にくりかへしみる君の文月(ふみづき)　七轉八興

寄路戀

わが緣のあつき夏毛の筆きれて心ばかりは通ふふみつき　袋町入隅

寄橋戀

ぬかるまいと思ひながらもふみこめば足のぬけぬか戀路(こひぢ)ならん　峯松風

寄樋竹戀

それとのみ言葉のはしはかけつれどいつかわたしが思ひはれなん　山手白人

寄階子戀

思ひあふ中はふしなき樋竹(ひだけ)のながくも軒の妻と見るべき　大事三味

徳和歌後萬載集　巻第九

戀歌下

寄雪戀　　童部友竹

とけ〳〵とつもる思ひを今宵しもいはまの雪のふるへ聲なり

寄稲妻戀　　朱樂かん江

しばらくも夜どこにしりをすゑざるはわが妻ならぬ稲妻ぞかし

寄雷戀　　呉竹世艶

稲妻のちらとみそめし君ゆゑに心もうはの空になる神

大石小石躬陰

なりさうで我つまならぬいな妻の光かゞやくよそのかみなり

寄初午戀　　普栗釣方

ればすゞろにむしかを思ひいでて　　婆阿

夢の中に夢をむすぶの神ぞともみよかしは手のうつゝなのよや

あざみをゑがきし扇のうらに書きつけて人のもとにつかはしける　　清水立登麿

なさけなき人の心は鬼あざみ言の葉末にもつやとげ針

淺草寺の庭にみめもあしからぬ葭簾張のなにはやてふ茶屋の女を見て歌よめと人のいひければ　　唐衣橘洲

なには屋の女はよしと夕時雨ふるともぬれてみたき笠松

約束をたがへず九十五もんまでかよひつめたる川越の戀

座頭戀　　夕霧籬

らうたしと見る目もかねてあらざればせめてうき名をたてゝきかなん

互聾戀　　鳥空音

忍びあふ中はたがひの耳と口きこえませぬと恨をやいふ

戀病服藥　　望月章甫

きくやいかにうはの空なる風藥まつ夜つもりし戀の病に

宵口舌　　書出田丸

もつれたる宵の口舌もみす紙をへいでとりたる閨のむつ言

みな月廿日あまり九日の夜何がしとかやいへる
家にあそび召して夜ひとよ酒のみけるにさりに
し世すみける人の俤にいとようかよひにみえけ

もの〻ふも人をこい口つかの間もわすれがたなの身ぞすかれぬる　ふし松嫁々

後家戀

もの〻ふのやたけ心のひかる〻はいもが柳のまゆみなりけり　から衣橘洲

奴僕戀

こと人を思ひにつくるつみ髮やなきつまぐしもさすがわすれて　雲樂齋

卜者戀

いつとなくよい中ぬきもあしざまにふみつけられてうき草履取　智惠内子

萬歲戀

待つ人にあはぬよつらきうらなひ者かん艮こんとふけわたる鐘　哭竹世莽氣

川越戀

とくわかきごまんざいしよの妻しあればはるぐ〵きぬる三河戀しき　小川町作

早乙女の笠の下ひもうちとけてあひみん秋をたのみかけ水

袋 筒 長

折々にうたもとぎれて早乙女のさゝやきあふは戀の植ゑつけ

秋 風 女 房

しづの女が思ひ山田にぬれそめて穗にあらはるゝ戀の若苗

園者戀　　　　から衣きつ洲

いかにせん象戯のこまとすてられてかこはるゝ身の末もつまらず

藤 満 丸

戀人のつげの小櫛も利休形さすが千家のかこひ物好

蓬萊山人歸橋

世の中をわたりに舟のかこはれはなみ〳〵ならぬ戀の深き瀬

武士戀　　　　武 士 八 十 氏

相性もよし野の川の水をさすいもせの山のなかうどぞうき　唐衣橘洲

あひ思ふ中をへだつる仲人はなかだちとこそいふべかりけれ　子子孫彦

むそび置くその仲人のさまたげをきくに心のなきねいり聟　鷹羽番

稚子戀

いとけなき心に思ふまゝごとの末は人目をかくれん坊かな　紀定麿

稚子の思ひつめたるひとつ身になどつけ紐をとかぬ君かな　大屋裏住

早乙女戀

早乙女の思ひかけ樋の水もれて今は歌にもうたはるゝ戀　平生重季保

けさはなほ君がとめきのうつり香に百雙ほどのわが思ひかな

片思

ちぎられぬ物とはいまぞしるこ餅一本箸のかた思ひにて

荏土方證

恨戀

九十九夜かよひしれんぼれよつこそれつきとしたるかた思なれ

手柄岡もち

旅戀

なさけありありと思ひてはまりしは葛のはかまのうらみなりけり

白鯉館卯雲

不自由な旅にしあれば椎の葉にめしもりあげてたのしみぞする

鄙野中道

被妨仲人戀

三味線もひかず調子もあはねどもひとよ旅寐の岡崎の君

四方赤良

めぐり來てあふ日の首尾もよしず張よそからさゝぬ水茶屋の中　手柄岡持

穴藏逢戀

穴ぐらを緣のはしごのおり〳〵はまへはだふれて水ももらさず　峯松風

遇不逢戀

忍びあふ中はたがひにあか土のふかくほれたる穴ぐらの隅　於保久旅人

別戀

うつり香の殘りて年をふる小袖今は身はどもあはできれぬる　四方赤良

夜發別戀

おさらばとそむけし顏をむき玉子きぬ〳〵糸のきるにきられず　吳竹よほけ

後影戀

又こんといひしなはての別霜君が顏にもまだら置きけり　手柄岡もち

これほどにまつといひたやかんざしのしやんと疊へたつたひと言

待不來戀　加陪仲ぬり

ときにして待つ夜は側に置巨燵ひともこねこの丸寐せよとや

寄虱待戀　丹青齋

思ひつめてかくばかりなる玉章に夜はしらみても猶またれける

逢戀　千枝有たけ

まれにあふ戀としりなば曉のとりもからすも寐わすれてくれ

深更逢戀　ちゝのみ滿門

宵の間はあたりとなりもこはめしのふけてと契る夜半の嬉しさ

茶屋逢戀　鎌倉遠則

藪入のたび〳〵茶屋であふ戀にのぼりつめたる箱ばしご哉

　　　　　　　　　　　　　腮長馬つら

垣のめも忍びて君がことの葉をへだてゝ壁の耳にのみ聞く

祈戀　濱邊黒人

ひきときのうらなく思ふ心よりあはせてたべと神せがむなり

四方赤良

かしは手のなるかならぬか一向に口をむすぶの神ぞつれなき

不逢戀　佐倉はね炭

待ちわびてはなをあかせる寒き夜は齒のねもあはぬ君ぞつれなき

千枝有竹

待つよりもわかるゝよりもかなしきはあはでぞかへる九十くよ〳〵

寄挑灯不逢戀　網破損はりがね

君にあふ手づるもきれてうき年をふる挑灯のはりあひもなし

待戀　棹鹿卷筆

徳和歌後萬載集　巻第八

戀歌上

初戀　　銀杏満門

こはぐゝも人のみる目をぬき足にふみ初めてけり戀の道芝

寄山初戀　　唐衣橘洲

くるしともいはで心に納太刀これやわけ入る戀のはつ山

忍戀　　加陪仲塗

うき涙しのぶに心ありの穴つゝみがきれて袖をもるやど

顯戀　　加保茶元成

わくらばに身はゞはあへど戀衣二度ときもせであらはれにけり

隔壁聞戀　　鶴羽重

池田氏にてむすめの子うまれ給ふを賀して　佐倉はね炭

三番叟なによりもつてやす／＼とよろこびありやことにじやうさま

劔術によする祝　もとの木網

あせ水をながしてならふ劔術のやくにもたゝぬ御代ぞめでたき

「夢のうき世今ぞいのちは月の舟眞帆にぞ西へのりの道かな」とよみ侍りしがふしぎに風なほりてつつがなくかへりけるよろこびに　紀定麿

災難にかゝる辭世の歌までもよみがへりたる君といはゝん

牛込所繁昌といふことを　遲蒔千種

牛込をうしとないひそほにほさく早稲田おくての道しある世に

龜井戸柳島に山里もとめし人をことぶきて　一富士二鷹

龜井戸に鶴のまふべき山ざとは所がらなる柳しま臺

やごとなき君のひとの家よりやしなひ君よびむかへ給へりける時松の島臺の足折れければ人々いみ給ふをいはひなほして　風來山人

あしといふ事はのこらずとりすてゝよき事ばかりのこる若松

家居を二間たてつゞけたる人を賀して　節藁仲貫

高砂のうらを一見せばやとて二けんましたる家のはりまち

吉奈の溫泉にて岩淵三度屋といへる家のおきなにあうて　へつゝ東作

あやかれや東方朔が九千歳手折りし桃の數も三度屋

神田祭みんとてよべより河岸高積がもとに酒のみしにあるじ明日のまらうどのまうけに強飯をあつらへおきしがいかゞしたりけん二所よりもて來りければ　四方赤良

せいろうをかさね〴〵のめでたさはいくらありてもあかの強飯

渡海里花成海の上にてはやてにあひ舟すでにくつがへりなんとしければ

寄諸祝　紀定麿

うたふ聲つれてこの屋にみちゆきはさしもめでたき次第なりけり

寄生酔祝　腹唐秋人

足もとはよろ〳〵づよもかぎりなくのほりてゆくや老のさか酔

髪置祝　四方赤良

ことしよりつむりにけしを置きそめて千代萬代の數とりにせん

袴著祝　千里亭白駒

かたなをもさすがに武士のたねぞとてかみしもつきをいはふ袴著

元服祝　無錢法師

元服をするがの富士の根ぞろへに雪のしらがの末いはふなり

婆阿五十の賀に酒によする祝といふことを　四方赤良

又もみん榮花の夢の五十年粟餅くはず酒をのみ〳〵

寄琴祝　名萬壽盛方

しらぶればふきじざいとぞうたふなるめでたきことの組の數々

寄三線祝　門限面倒

四海波しづがふせ屋もさみせんの調子くるはぬ御代にぞ有りける

寄袋祝　酒上不埒

しめくゝりよくをさまれる大君の御代は千秋ばん袋かな

寄手毬祝　垢しみ衣紋

君が代の數とりどりにたはれ子も袖かなぐりて手まりつくなり

寄松魚祝　名萬壽盛方

竹のはをかいしきにせし松の魚ひとふしごとに千代やこむらん

野見釿ごん墨かね　馬瑙

ひとふしをあたふかつをのいはひ歌はやしてゝうさよいさらに盛れ

四方赤良

かんな屑つきぬ言葉もあたらしくたてし柱のかぞいろはつけ

子子孫彦

木のたくみ墨さしに筆たて具より今日は疊を敷島の道

内匠はしらがもとにて柱によする祝といふ事を　四方赤良

飛騨たくみたてし柱のかず〳〵はよむともつきぬ三河萬歳

寄筍祝　望月章甫

たけの子のかはらぬ御代はめでたやとむき出して社いふべかりけれ

寄硯祝　夕霧籬

やはらぎし御代はかはらの硯石されば千とせをへるぞめでたき

寄刀祝　節松嫁々

いにしへのみだれやき刀もしら鞘にうちをさまれる御代ぞやす國

徳和歌後萬載集 巻第七

賀歌

寄都祝　　箭木有政

君が代は都のまちをとかへりの松原とほりつゞく千本

寄橋祝　　堂作白主

うけわたすなりもいく代をへの字にてやはり昔のまゝの繼橋

子子孫彦のもとにて新宅によする祝といふことを　　朱樂かん江

水縄もひづまぬ小石かはらぶきいはほとなりて動なき宿

紀定麿

萬代とことぶく龜のをがは町鶴のはしらをたてし新宅

孫をかふよりのたとえもはづかしくみはかにしげゐゑのこ草哉

雲樂齋いもうと身まかりけると聞きて　四方赤良

はかなしやあのよ十萬おくさまにならんとてしもおこし入れとは

辭世　白鯉館卯雲

食へばへるねぶればさむる世の中にちとめづらしく死ぬもなぐさみ

年ふべき松もひつぎにつかはるゝ身は四分板のはてぞはかなき

寄十露盤無常　坂上竹藪

とりべ野の烟とたてし算用は涙の玉のおきやまどへる

寄酒無常　績松ひで近

のまほしと思へど酒もなき跡はしるしの杉の樽ばかりなり

寄醴無常　濱邊黒人

きのふ見し人はひと夜にあま酒のあまりはかなとすゝりあげつゝ

寄鰻無常　七轉八興

立ちのぼるつひの烟の香に匂ふ此身は死出の旅ぅなぎかも

寄屁無常　紀定麿

すかしべのきえやすきこそあはれなれみはなき物と思ひながらも

祖父素翁のはかにまうで侍りて　平秩東作

あとまでも袖の涙のかわかぬはぬらせし膝のむくひなるらん

物ごとうときが好みてからやまとの文どもよみ
けるがみな月ばかりに身まかりければ　智恵内子

あつめつる窓の螢の影きえて涙や文のしみとなるらん

普栗釣方歌角力の勸進して東西にはしりめぐり
しがそのことなかばにして身まかりければ　四方赤良

歌ずまふ夢のうちわをあぐる間に西のかたやへ入りにけるかな

問屋酒船

死ぬるまで狂歌をしでの旅角力あとに言葉の花はふりけり

わかきやもめのほとけに茶を供するを見侍りて　柳直成上毛

後家たつるはなかもうすき茶せん髪あはれはよそにくみてこそしれ

寄松無常　道具屋長持

徳和歌後萬載集　巻第六

哀傷歌

ある人をいたみて　　横道黒塗師

花の根にちりしすがたのをしければ衣かへうき御經かたびら

竹杖すがるが父の思ひにて侍りけるときよみて

つかはしける　　あけら漢江

申すべきことのはもなしあしすだれあのよこのよのふじの別に

父の身まかりにける時　　竹杖爲輕

くりかへしくりかへしつゝなげくなり涙のたまの珠數の親粒

はゝの七めぐりの忌日になむあみだぶつのもじ

をかしらにおきてよめる歌の中にあ文字　　濱邉黒人

江のしまにまうづるとて袖のうらにて白髪貝を
もとめて　　圖南女

旅ごろも袖のうらかたまさしかれきたるかひあるもろ白髪貝

みのの國にまかりし時笠松といふ所にたびねして　　栗成笑

ふるさとをはる〲こゝにきてみればかくれみのぢや笠松のやど

寄餅羇旅　　檜皮釘武

むしやめばついてそのまゝやれぶとん柏にねたるあんなかの宿

箱根にて　　世入道へまうし

仙人（やまひと）になつたかしらぬ雲にのりはこね八里を歌でこすとは

大名旅行　　見付内住

關の戸も明くる横雲たな引きて一時早の馬やこすらん

はたかげんよい程がやの一里づか秋風すゞしかたびらの宿

長月の末あけがたに箱根山をこゆるとて　渡海里花也

山のはの錦につゝむ月の玉いろや箱根のふたのあけ方

旅宿炉　五足齋瀧園

さすが又遠州路とてはたごやに炉をきり釜をかけ川のやど

旅宿巨燵　橘實副

あしがらやくもれば富士のすそ寒く旅のこたつにあたら夜の月

油とうじねり方

くたびれて巨燵へふじの腰つきり足高山をさし出したり

つのくにあつもりそばの店にてかたへの人にさ

さやき侍り　駿山人東阿 播州三日月

よしつねはくはれぬそばのあつもりをくまがへ給へひらに平山

川留退屈　四方赤良

大井川かも川よりも川ごしのちんが心にまかせざる雨

春の末さやの中山を過ぐるとて　星屋光次

花ぬりのさやの中山さしてゆけば鐺にさはる岩つゝじ哉

傾城思故郷　澁川栗人

八朔に白むくをきるあつさには夕がほだなの下思ひ出す

夏の末輕井澤を過ぎ侍りしにいと寒かりければ　二歩只取

夏衣うす井峠にきてみればさむさながらも身は輕井澤

百餘里のふるさとをへだてゝ江戸の月を見侍りて　庭桃丸

もろともにあはれと思へお月さま國のなじみはおまへばかりぢや

一里塚秋風　内匠半心良

奴旅行　置石村路

鑓もちのふるともよしや草枕髭にやどかせはなの下陰

紺屋旅行　望月まん丸

旅衣そめて幾日になるみがた何とこんやのとまり定めん

海路　手柄岡持

帆ばしらのしの字もねせてとまり船かくてはおきにかゝる事なし

題しらず　唐來參和

日のあしの高なはへもうつきにけりならはぬ旅のうしのあゆみも

馬屋厩輔

足引のやまとめぐりの旅づかれ笈もおもけに瀬田ら大橋

木曾路にて　加倍仲ぬり

うきことをしるの匂ひもくさ枕くはずにおくや露の玉味噌

によそへて　　世入道へまうし

うつしゑの駒に姿のにたるかな瓢簞屋よりいづる此身は

とみにたびだち侍りし時友どちのもとへ　　酒上不埒

夢になりとしろしめしたかけふふじに旅をするがへかどでなすのを

羇旅歌

旅のうたとて　　古家雨漏

ふる郷へいそげばまはる道のべにいくたびとなくとくる笠紐

狂言師旅行　　於保久旅人

旅寐して起せば夢かうつぼ旅いそげど道は八里くりやき

盲人旅行　　峯松風

座頭の坊たのむは手ひき足まかせ旅の空へと思ひつく杖

千立室さみだれの比ふるさとにかへるあしたむ
まのはなむけすとて　馬場金博

雨もはやにぢりあがりにあがるなりお茶をたて場にしばし待合

いづの國あたみへゆあみにゆく人を送るとて　門限面倒

紀行（たびのき）の狂歌に詠みてきてたもれ伊豆のお山の言のはぐさを

かんつけの國いかほの湯あみにゆく人を送ると
てばる名の山の名もあれば　秩父根努類雄（よも）

人なかでしわい顔すな氣をはるなきんせんとうはとめ湯にしなさい

友とする人わづらひて遠き旅路におもむきける
をおくるとて　普栗釣方

花ぐもりかゝる病もはるの旅さなわづらひそ後は快晴

なにはの旅のやどりをいづるとてそのいへの名

徳和歌後萬載集　巻第五

離別歌

別　　臍穴主

せんたくの後(あと)は袷となるまでもまづひきときの引き別れぬる

北川ほくせん浪華にまかりける時　　へつゝ東作

なにはがたあしかろ〲といてもどれ友よぶ鶴のをりからもよし

竹下氏の餞(はなむけ)に　　濱邊黒人

たつてゆく足からとむる關もがなはこぶ思ひのたけの下道

もとの木阿み上つけの國にまかりける道すがら
思ひやり侍りて　　置石村路

行先(ゆくさき)も熊谷ざくらさきぬらし春のながめはふかやと思へば

節分　　もとの木網

あさくらや木の丸のみの山椒も福茶に年を名のる節分

除夜　　加陪仲塗

借錢は首たけつもる大晦日門の雪さへはらひかねたり

紀躬鹿

門ごとにあしたの春をまつかざりたつた一夜のことしなりけり

いかなりけるとしのくれにか　　四方赤良

金はありかけもはらうて置巨燵とろ〳〵ねいりつかんとしの夜

此うたある人のいはくよみ人しらずと

五十三になりける年のくれに　河原鬼守

としの關こすや驛路の鈴ならで我身ふりゆく五十三次　唐衣橘洲

武家歳暮

すゝとりて弓は袋にをさめたりせめくる老を何でふせがん　四方赤良

ものゝふも臆病風やたちぬらん大つごもりのかけとりの聲　峯松風

花街歳暮

かけ乞のたゆみもあらぬものゝふは勇氣をはるにのぶる返金

疊屋歳暮

鶯もかならずはやく來なんしと年のくれ〴〵梅がかね言　一升夢輔

疊屋がさしつまりたる年のくれふまねばならぬ床のかけぬひ

竹杖爲輕
光陰のあだ矢にとしはたつか弓月日をとむるせき弦もかな

無錢法師
としの矢はさうぶ刀のつかの間にはや破魔弓と引きかはりぬる

子子孫彦
たつた今年もこゆべきよし垣をこそぐりてまつ春のまぢかさ

四方赤良
すゝ掃ははやすぎの戸のあけたてにはしり加減もとしのくれ縁

多田人成
かぎりある年さへくれてゆくものをなどふるかけのとりに來れる

朱樂菅江
としはくれにき
立ちて見し柱暦もねころんでよめるばかりに年はくれにき

ふたつなきあさ草いちのにぎはひはまことに江戸のかざり物なり　紀定麿

はりつよく直段はひかぬ觀音の千の矢先や市のはま弓　無錢法師

隣家餅搗

垣一重こし粉をつけてたまはるは居ながら自由自在餅かな　四方赤良

歳暮

年波のよするひたひのしわみよりくるゝはいたくをしまれにけり　手柄岡持

此ものは花の春べといそぎ候お通しなされ年の關守　つむりの光

とりくんでまけじと思ふ角力さへ年の關にはかなはざりけり　白鯉館卯雲

鷹狩　銀杏満かと

ふる雪にどこからどこかはし鷹の目にみかり野のひろさ知られず

炭竈　加陪仲塗

眞黒な熊野の山にすみやきの手足もあらく生れつきの輪

五豐多他見

まつ白につもるそばから黒けぶり是こそほんの雪と炭がま

神樂　加陪仲ぬり

禰宜どもは寒さしのぎにかん酒の匂ひかぐらの舌つゞみうつ

煤掃　鈍奈法師

すゝはきは落葉の後にさても又ちりみだしたる庭の面かな

淺草市　津良河厚

かちぐりをまけたとよぶもことわりや淺草市のうらは六郷

土蔵雪　紀定麿

白雪のふるつゞらさへなき蔵はなんでもかでもつめたかりけり

猪牙舟雪　子子孫彦

苫かけて水のおもかぢとり梶とこぎゆく猪牙の跡のしら雪

堺町雪　あけらかん江

今朝見れば木ごとに花のさかひ町あら面白の雪のふり付

雪中鷺　銀杏滿門

ほそみぞはふりつむ雪にうづもれて鷺も泥鰌やふみなやむらん

雪中酒宴　もとの木網

盃の手もとへよるの雪の酒つもる〳〵といひながらのむ

雪をくふ人によみてつかはしける　平秩東作

ふみなんはおしきにもりてきこしめせあしだの歯になかけそ初雪

音すれば人もみつよついつとなく池のふるびをつけにくる鴨　勘定疎人

枝川に餌ひらふ鴨のあしの色はながれもあへぬ紅葉とや見ん　蓬萊歸橋

冬の歌とて

冬ごもる寒(かん)のうちとて霜ばしらたてゝ氷のいたもはるなり　膝本左愚留

霰

吹きちらす風もあられの音せしは屋根をこけらのそのはずみなり　勘定疎人

雪

雪見とはいつの世よりのたはけぞとそしるはいつのよのたはけぞや　馬屋まや輔

ひとむれの奥女中とも見ゆるかなつもる木ごとの綿帽子ゆき　四方あから

寒夜月　　馬屋まや輔

しん〳〵と寒き月下の門徒寺僧のたゝくは鳥のほねなり

千鳥　　臍穴ぬし

ゆきかへり友よびかはしなき上戸顔もあかしの浦千鳥足

冬の夜洲崎なる望汰欄にあそびけるに庭におり
たちて月をながめ侍るとて　　四方赤良

ほうだらになりて海邊をながむれば月影さむし宵の口鹽

空と海ぴつたりつきの中川のばら〳〵松にたつ千鳥かな

水鳥　　手柄をか持

つるぎ羽の劒お祓をふりたてし五十鈴の川のおしのふるまひ

奈良朝起

朝日さす人もなければとりもちのさほのかはらにねぶる水鳥

橋上霜　　　　　　　　　　　　　　鹽屋辛人

雪ならでしろきは霜のはし柱かへるもすごしゆくもうしみつ

普請小屋霜　　　　　　　　　　　　堪忍成丈

寒き夜は屛風をかりのふしん小屋明くれば門にたつ霜ばしら

氷　　　　　　　　　　　　　　　　臍穴主

かはづらのあつき氷と名にたちて身うごきならぬ借錢の淵

硯氷　　　　　　　　　　　　　　　紀定麿

筆をもてうちかゝまほし墨水のこほりて寒きはだか硯は

枝川氷　　　　　　　　　　　　　　へつゝ東作

さくら川枝も氷のはるまではとぢてひらかぬ波のはつ花

澤水氷厚　　　　　　　　　　　　　節松嫁々

澤水にかれたつあしのあかゞりもなくほどいたく氷るにけり

醫師食鰒　　から衣きつ洲

雪の日に千里もはしるとら鰒は竹のやぶ醫もくすりとやくふ

武士食鰒　　山道高彦

もとよりもいかものゝふの腹なれば鐵炮汁の玉はあたらず

芝居顏見世　　山手白人

評判ははげしかれとて顏みせにみな手をうつの山おろしかな

濱邊黑人

かほみせのその人よりもそは〳〵でとちめん棒の手うち連中

顏見せの朝の雜煮を　　もとの木網

三番叟鈴菜をいれて顏見せの雜煮の汁もたらりらゝりら

朝霜　　平秩東作

日のかげは小春もまじる朝の霜どちらが冬とふみわけてみん

夕ぐれに客も落葉とちりゆけば木末さびしく水茶屋の床

あたりちかき人のもとよりゐのこの餅をさめぬ

うちとておこせたりければ　津無坊早耳

重箱のなはぎのもとにふするの子さめぬうちとておこしけるかも

夷講　書出田丸

夷講げに商人の馳走とて客もまうけの席につくなり

大根地をいづるといふことを　其暫琴成

たがたねをこゝへこぼして大根のちをはなれてもかくそだちけん

河豚汁　山手白人

われがちにあらそうてくふふぐと汁もりかへのある命ならねど

雪中河豚　颿南西太

魚の名をむざとはなすなけふの雪に身をあたゝむる種か鳥ごや

徳和歌後萬載集 巻第四

冬歌

初冬　　　手柄岡もち

けふ神のおたちなればや風をあらみ空さやけくも木葉(このは)みだるゝ

花街時雨　　　唐來参和

冬がれてくるわにかよふ神無月しぐれも客もふりみふらずみ

問屋場時雨　　　子子孫彦

先(さき)ぶれの時雨(しぐれ)はれまの問屋場にうき雲助や跡にたゞよふ

落葉　　　置石村路

木がらしにちりぬるいろはふみちらしやまけふこえて冬は來にけり

水茶屋落葉　　　よしのゝ葛子

暮秋　山手白人

花すゝきほゝけし袖をふりはへてさらば〳〵と秋ぞくれ行く

唐來参和

よしさらば〳〵とわかれゆく秋をまねく薄やいとまごする

質屋九月盡　古瀬勝雄

秋ふけて露のたま〳〵おく質もこの月ぎりとなりにけるかな

新蕎麥　　　　　　　　　大飯食人

新そばの時分はよしとひきぬいてかたきうつこをはまれとぞきく

秋鰹　　　　　　　　　雀酒盛

折もよき秋のたゝきの烏帽子魚かま倉風にこしらへてみん

乞食見紅葉　　　　　　何多良方士

乞食小屋かどに立田の紅葉見てきのふもけふもあきたらぬはら

紅葉盗人といふ事を　　　　馬屋廐輔

しかられて跡しらなみのたつたがは顔も紅葉にかざす折枝

日陰紅葉　　　　　　　奈良花丸

あきはてし埒の日かげのもみぢばをいつそむるぞととへばあさつて

落栗　　　　　　　　　渡海里花成

ひらふ數ふどうのあるもことわりや毬はすなはちくりからとなる

吉原十三夜　堂伴白主

くる客は月の舟やど引きつれて足も空ゆく十三やぼり

駒迎　しらぬひのつくく法師

望月のこまは月毛もひくべきを關の淸水にかげ見ゆるなり

擣衣　澤邊横行

洗だくのひるならで夜もいとまなみ居ねぶりながら衣うつゝか

妾宅擣衣　峯松風

君ならでたれかきぬたの衣うつ槌にてかけの宿の淋しさ

隣家砧　紀定麿

となりなる砧もちかき壁ひとへかたつち落ちてうちやぶれたり

鮎　横道黑塗師

身より出すさび鮎ながら川下に落ちてかゝるはあなあはれやな

集鴨のさとに菊をもとめ侍りて　馬屋厩輔

すがゝきのすがもにそだつ禿菊けふつき出しのけいせいが窪

飾師愛菊　畠野あぜ道

かざりしの世話やきつけの菊の花今朝はめつきと色まさりける

菊花泛酒　銀杏滿門

一りんに千とせをちぎる花ぶさはよはひのぶるときくの盃

眞間の紅葉をたづねて　檜皮釘武

暮れなんと氣をもみぢばの友もあらばひとりのこらんあゝまゝのかは

十三夜月　あけら漢江

きく月の月見はもちの月ならず籬に花のさけや盃　檜皮釘武

どこぞへかちとおいてきて影さへもたらぬははなの下の長月

九月九日　八張棟梁

此酒をのむはそくさいえんめいがそのふる事ときくの盃

菊　横道黒塗師

我やどのきくの酒手のけふごとにいく代つもりて借錢の淵

山手白人

たがかたへもらはるゝやら鍬の上にひともとおける霜の白菊

前栽の菊見んとて人の來りければ　酒上不埒

をかしげにくるへる菊の花見んとたちよれる人のはらやかゝへん

巣鴨菊　味噌こしきぶ

さかりなるうはさをきくや祖父婆々も杖にすがもの花の見物

多田人成

水鳥のすがもに植ゑしひとかまへ菊のさしことと見ゆるませ垣

月前酒　　　　から衣橘洲

さすかげのあかきは酒のとがながら月にゆるしの色とこそ見れ

月前枝豆

枝まめのからもやまとも見る月に雲はいづくへはじきやりけん

月前芋　　　　ふし松嫁々

てる月の山ばかりかは里いものますのすみからすみのぼるかげ

　　　　　　　圖南女

今宵ぞとみがく光の桂男(かつらを)にいもがすがたは衣だにもきず

月前兎　　　　常産河馬

玉うさぎはねてなぐさめ十五夜はおのが毛ほども月にきずなし

月前駒迎　　　　望月あきよし

逢坂や月に名高き關角力けふの勝負は引きわけの駒

大工見月　飛塵馬蹄

手細工に窓を明くるはくもなくて月のすみうちすみよるべし

經師見月　川井物梁

ひとはけにかけ地のうらをうち見ればのりのかげんもよくつきの影

瞽者見月　から衣橘洲

すむ影を見る目なげくもせんなしとひとりまさぐる琵琶の半月

月前雁　大石小石みかけ

鴈がねの鍔もとまでも鳴きつれて落つるは月のさやかとぞみる

月前琴　から衣橘洲

松の風ふき自在なる月見かなはらうて雲はみなつくし琴

月前鼓　紀定麿

小つゞみのねながらかしらうちもたげ影もみつ地の月や詠めん

十六夜月　節松嫁々

かたぶけしきのふの酒の二日酔そらにいざよふ盃のかげ

立待月　秋風女房

望月とあいた一夜のたちまちにすこしかけてもかげのさやけさ

はづき廿一日の夜月を見侍りて　大事三味

そろばんのそろ〳〵かけし月かげをみやさん七の二十一日

兀山月　智恵内子

てら〳〵と月のかつら男さす影もはづかしげなる老(おい)のはげ山

三股月　天地玄黄

けんをうつ上手の手から水の月すむゆさんなの指のみつまた

芳野葛子

さかづきのさすてひく手に三味線のかはにうつれるかげをみつまた

十五夜月　朱樂菅江

天の原月すむ秋をまふたつにふりわけみればてうど仲麿

無錢法師

しら露の玉を今宵の十露盤に三五十五の月とこそおけ

其風 尾張

何千里てりわたるともけふの月ながめ盡さん目のとゞくだけ

十五夜くもりければ　銀杏滿門

大空に名高き月はありながらひとつ星さへみせぬ雨雲

望月の夜の空さだめなければ　四方赤良

千金の名だかき月の雲間よりせめて一二分もれ出でよかし

おなじ夜雨はれければ　鶴のかこ女

此頃のこほれかゝりし空も又くもなくこよひうまれ月影

花街鴈　浦邊干網

玉づさをかけてくるわにかりがねもおつるや多き人ぁしの中

陣中雁　海老船盛

つはものの氣ははり弓の陣中にしのびのつらをみだすかりがね

腹から秋人

一つらに雁は野陣をはりまがたしかまのかちを告げにきたより

霧　忍岡きよろり

風寒くやぶれ障子をはりかへてきり吹きかくる秋の夕暮

月　つむりの光

月見てもさらにかなしくなかりけり世界の人の秋と思へば

蓬萊歸橋

こよひこの月は世界の美人にて素顔か雲の化粧だにせず

夜なくはめづらしからず晝の野へ蟲のねごとを聞きにこそゆけ

四方赤良

鹿

秋の野の千ぐさはやんもしら露のふつて出でたる鈴蟲のこゑ

加階仲ぬり

秋の野になく棹鹿の角なればさいになりてもめやこひぬらん

千枝有竹

なく聲のほそうてながく聲ゆれば棹鹿とこそ人のいふらめ

さがみのくにの山中にしかの聲きかんと一夜とまりて

根岸法師

瀧の音にまぎれてしかときこえねどもしやあれでもあらうかの聲

鴈

柿下手丸

鴈がねのかた田にこそは落ちつらめいたく鳴きぬる夜半の聲かな

槿　　　　　　　　　　　裏堀蟹子丸

朝顔はまことに日々にしをるれど又ひゞ〳〵にあらたにぞさく

さんやの里のほとりにてかきねに朝がほの花さけるを見て　　四方赤良

たつた今わかれてきたの里ちかく目にちらつける朝顔の花

露　　　　　　　　　　　手柄岡持

ぬれぬさきこそいとひしがおき〳〵て末は流るゝ質草の露

　　　　　　　　　　　　柿下手丸

百草の葉ごとの上におく露は丸薬ほどの玉とこそ見れ

芋葉露　　　　　　　　　書出田丸

錢金はもたれぬものか芋の葉にたまれば落つる露の玉銀

蟲　　　　　　　　　　　白鯉館卯雲

窓下萩　ものゝふ八十氏

やがてもう彼岸もあくる引まどの下のを萩ぞあかぬ色なる

卜者見萩　秦久呂面

うらなひをおくの細道おしわけてめどきの萩の花をみやぎ野

薄　權宗匠梅堂

御らうじろいとすゝきとてをしへねどいろはにほまで出かしをるのを

吉原女郎花　臍穴ぬし

此さとにこがねの色とさきぬるをみなへしをりて床花にせん

葛　二歩只取

ものゝふのくずのはどはとあはせても臆病風やうらがへりぬる

苅萱　堂作白主

秋の野に風ふき出せば何事ををかしかるかやねたり起きたり

蓮飯　瓢から酒　酒上熟寝改

めしはみなくひつくしたる蓮葉(はちすは)にのこれる粒や露とあざむく

神田川にて靈棚を舟につみおくるを見侍りて　山道高彦

牛馬をやめて佛も西方の十萬坪へのりあひの舟

角力　おそ蒔ちたね

春ならで秋のちぐさの花ずまふさそはぬ風に羽織ちりめん

荻　加陪仲塗

秋風が音頭(おんど)あげたる伊勢をどり濱荻の葉はさゝらにぞなる

萩　五豐多他見

吹きまくるすそ野の風に仙人もおつるばかりの白はぎの花

もゝ草の中なる萩にみとれつゝいくせんにんも通をうしなふ

盂蘭盆　　腮垣金

うら盆にかんなかけとりせめくれば身はみそはぎの露ときえたり

山手白人

なかくにきたまならばとばかりにかけはたらるゝ盆のくりごと

橘貞風

あるやうになしても物のさびしうて何やらたらぬ玉まつり哉

内匠半四良

蓮のはに置きにし露の玉まつり世々の佛に水手向けばや

靈棚露滋　　あけら菅江

蓮葉(はちすは)に手向ける水はにごらねど野もせあざむく露の玉だな

盆踊　　出すは耳彦

手を出して立つたり居たりいそがしくするは給仕の盆踊かも

小川町住

七夕のけさのわかれのとめられれば天のかはせにはらもかへなん

天河洗濯　　根香來無器用

天のがは空色衣あらひあげおり姫のりをつけてほしけり

吉原草市　　やはり棟梁

けふこそはあはんと思ひし女郎花人にかはれて水くさの市

峯松風

櫻からはや草市と露の間にうつりし秋も花の色里

蓬萊歸橋

くつわやがくらきにかひしのこり荷を近所の人へうりの馬道

婆阿

數珠のたままつるしたくの草市に百八もんじけふやふみ月

青樓七夕　今出赤蕎

まれ人をこよひはどうぞほし合の空だのめなる天の川たけ

七夕絲　一升夢輔

七夕のいと口きらぬむつ言にくたかけ鳥のくりかへしなく

七夕別　遅蒔千種

舟をさにとはばや星のわかれには楫も機嫌もとりにくきかと

七夕後朝　あけら菅江

よべかりし硯をしばしとめ置きてほしやけさかく文月の空

婆阿

七夕のひとよねまきのあかつきをうらみてかへすかし小袖かな

多田人成

かさゝぎのあかつきかけてわたれるは宵にひきかへにくき口ばし

七夕

ひと夜をばもゝ夜とちぎるおり姫になぜお子たちが出來はなされぬ　楚　泉 尾張

七夕にねがひの糸のありたけをくりかへしつゝかけていのらん　絲瓜皮也

かさゝぎのはしは雲井のてうしよくかけわたしたる琴のかよひ路　湖　鯉鮒

今宵しも手向にせんと短冊をかくや娘も孫もひこほし　澤邊横行

星もさぞ今宵ひとよのあひびきをそこはかまとや待ちわぶるらん　銀杏滿門

おり姫の年は十六さゝげばたたれも女房にほし合の空　臍　穴　主

文月のけさや一筆しめし野にまゐらせそよと秋の初風

文月ついたち赤坂なる桐屋といへる家のあるじをはじめてとひ侍りて　朱樂かん江

秋もけふ小判のきりや一葉よりまづ落ちそめて藏にみつ次

風鈴告秋　から衣橘洲

風鈴の音はりんきの告げぐちかわがのきの妻に秋のかよふを　へつゝ東作

まづあきをしりふる軒の短冊もすこしは友となる風鈴かな　四方赤良

ふうりんのりんとひゞきし秋風は荻の上はの一文の錢

米春知秋　眞竹深藪

米つきはひの出入よりとる杵の臼の數にや秋をしるらん

徳和歌後萬載集　巻第三

秋歌

立秋　　大屋裏住

今朝(けさ)ひと葉ちりくる庭のかんな屑柳の枝をけづる秋かぜ

龍宮立秋　　紀おさ丸

さすしほに木葉(このは)がれいのちりくるは秋風たつの都にやふく

立秋風　　秋風女房

秋きぬと風がしらすや文月のふうじをきりの一葉ちらして

初秋[illegible]　　石部金吉

ひやゝかな風をまゐらせ候と秋のふうじめほどく文づき

腹から秋人

隅田川御祓　　もとの木網

中とみの祓をすだの夕こえてまつちのわをやくゞる川風

質屋御祓　　網破損はりかね

みな月もきるゝけふとて御祓川しちのかたしろ流れこそすれ

夏の日のあつさぞまさる土用干地赤の色ももゆるばかりに

眞桑瓜　　山道高彦

よいたねをたんとまくはの瓜づるにこがね花さき實のなる子村

まくは瓜と西瓜とひとつさらにもりたるを見侍りて　　四方赤良

砂村のえにしの瓜となるこ瓜ともにもらさぬ水菓子の中

姫瓜　　峯松風

夏くさの中にちぎれる姫瓜はいかなる人のおとしだねかも

御祓　　臍穴主

あたらしき染帷子の麻のはもけふのみそぎと人やとるらん

山川夏祓　　唐衣橘洲

山川に風のかけ乞それならではらへば夏のしがらみもなし

吉原納涼　山上猿成

青すだれかけてあつさもなかの町客と風とを待合の辻(つじ)

屋根船納涼　山手白人

千早振神田がはよりこぎ出てすゞむは天津兒屋根舟かな

三またの中洲四季菴を　圖南女

蚊もなかずあつさもなつの住みよさはすゞしき菴といふべかりける

澁團扇にかきたる市川團十郎といへるわざをぎの畫に　橘八衢

大汗をかきの素袍(すはう)のたもとにもしばらく風をやどしぬるかな

樹陰心太　峯松風

水鉢にすゞしくもりの下陰は人の目につくところてんみせ

土用干　紀定麿

大屋裏住

夕立の雲のうき浪たつと巳のふり日を三保のあまの釣舟

門限面倒

吉野丸てるに高尾は夕立の駒形のせをわけてふり行く

平生三里季保

夕立の雲もつき地は先はれてしのをつく田にかゝる親船

山手白人

蓮池夕立

夕立のにごりにしむはいや〳〵と蓮はかぶりをふる池の中

百足こがね

蟬

ぴつたりといだきしめつゝなく蟬は日々にかよへるきむすめのもと

四方赤良

別荘納涼

時ならずふり來りたるすゞしさはこれ水無月のしも屋敷かな

夕顔　　檜皮釘武

垣一重ちよとゆふ顔のはなれ家は五疊ばかりの住居なりけり　　帆南西太

山蛙が柴のあみ戸のあけくれに所がへする夕がほのはな

闢蚊遣火　　朱樂かん江

まれにくる蚊はたゞいてもふせぐべしいぶせあたかの闢の杉のは

夕立　　さくらのはね炭

夕立のはれゆく空のひとふりはくも切丸といふべかりける

闢夕立　　川井物梁

夕立の雨に追はれてにげ水の雲を霞が闢のたび人

船夕立　　四方赤良

船の帆のはらめる風に夕立の雲のはやめやふり出しけん

猿猴のとらんと水にのばしたるかた〱の手は短夜の月　京　間内則

きし女（美濃神戸）

ひとりねの蚊帳のうちへさよふけて桂男のいるは無遠慮

窓下撫子　遅蒔ちたね

そだてたる恩にあまへていたづらのした地窓よりのぞくなでしこ

鍾馗の畫をかけおける床のまに百合の花をいけたるをみはべりて　津無坊早耳

かけまくもしようきの姿おそれてや首うちたれし鬼百合の花

味噌こしといふものにほたるをいれたるを見侍りて　宿屋飯盛

螢とる數もひとふたみそこしによつゆもいつかむすびける哉

いしたりければ　　梅旭女　堺町泉屋

とひ來ます四方はひろまもなき比のさみだれ髪で筆をとりけり

返し　　四方赤良

入梅に旭もいまだいづみやを雨ふりはへてたづねこそすれ

梅干に鶯といふ事をよめと人のいひければ　　寶腹齋

口はすくなりてもなくか梅ぼしに皺のよるまで老の鶯

水鷄　　澁川栗人

うかうかとわなにかゝりて身をくひなたゝく戸口は禍のかど

曾我祭雨　　山手白人

曾我まつる五月の空は今も又かり場の露や雨とふるらん

夏月　　志月菴素庭

夕立のくまなくはれし月の輪にのどもと過ぎしあつさ忘するゝ

ちる花にうき世の名をばけし坊主からしてはたくあたまてん〳〵

五月五日　　書出田丸

けふよりはひものあやめをときそめてきたる丹後の薄袴かな

五月五日ある菴をとひ侍りしにあるじのひるね
してゐたりければ　　腹から秋人

蒲團きて晝寐にころり山椒味噌あんも節供は柏餅かな

端午の日普栗鈎方が四方赤良のわごのもとへは
らかけといふものおくるを見侍りて　　宿屋飯盛

みくすりにこれをしめじがはらかけとよもぎのせくをあつくいはふか

入梅の日雨ふりければ　　河原鬼守

けふからはさみだれん歌の發句とてまつ何山も雲にふし物

、五月雨の比四方赤良のとぶらひ給ひし折から朝

初がつをかふ氣はやみにあらねどもこれも子ゆゑに迷ふ雉子燒(きじやき)

よしの丶葛子

鰹走地

地をはしる聲をからしの初がつをうりものこらぬ足のはやさよ

夏の夜かつを調理するを見侍りて

むせん法師

まな箸につたふ雫(しづく)のすゞしさや月もさしみの夏の夜がつを

筍出隣

銀杏滿門

よばずともかきねをこして這出づる隣やたけの子ぼんなうなる

早苗

海老船弓

日よりよくうれしさなへをとりどりにうたふ田植のおほんたからか

罌粟花

便々館湖鯉鮒

むしけなくそだち次第のけし坊主花のちりけに灸もするぬる

清水立登[illegible]

船出せしみなとを跡にほとゝぎす帆を十分にかけてなく聲

兩國橋郭公　　濱邊黒人

ほとゝぎす富士とつくばの天秤に兩國ばしをかけたかとなく

紀躬鹿

兩國のはしとはしとのほとゝぎす今ひと聲をむさしにてなけ

みつまたの四季菴にて郭公を聞きて　　四方赤良

ほとゝぎす鳴くやひとふたみつまたと聞くたびごとに珍しき菴

旅宿郭公　　つむりの光

夏の夜のみじかき夜著に足引の山ほとゝぎすきく旅の宿

初鰹　　讀人志禮多

われ一とまつさきかけて食ひぬるは人にかつをのさしみなりけり

馬屋厩輔

きばさみをほとゝぎすまし夏木立かりすかしてもきかんとぞ思ふ　菊賀三味

三さがりあひの手ひいて郭公いま一聲の二上りをまつ　もとの木あみ

郭公多

ほとゝぎす山田のはらにあまるほどあまりたくさんすぎのむら立　智恵内子

郭公ひるともいはず夜なきするみどりこやまのかしましき聲　馬場金埒

ほとゝぎすなくねもちやうど八せんのはじめ終の空にふるほど　小川町住

船聞郭公

ふた聲ときかでぞ沖をはしり船なごりをしさの山郭公　佐倉はね炭

夏もまだ若武者とこそ見えにけれ卯花縅よろふ袖がき　菊賀三味

世のひとのひく袖がきに咲きながらちると思へばみるもうのはな　子子孫彦

旅路卯花

月雪のみたてもあまりしらくじしらけていはくあれはうの花　四方赤良

たび人も笠ぬぎて見よ花の名の卯のとき雨にぬるゝ垣根を　加保茶元成

郭公

一聲の初音も高きほとゝぎす是ぞてつぺんかけねなしなる　つむりの光

一日に八千八聲うけあうて山ほとゝぎすあはぬとぞなく　星屋光次

徳和歌後萬載集　巻第二

夏歌

更衣　橘鈴成

さげ帯をみるにつけてもおたふくの衣かへうき尻にぞ有りける

京間内則

世の中にたえて青葉のなかりせば衣がへをや何とせんにん

馬夫更衣　佐倉はね炭

ふる布子(ぬのこ)わたはぬけども馬かたの袖にのこれる春のはな歌

青樓新樹　子子孫彦

青樓の君のかぶろの名にしおふ若葉やみどりしけりこそすれ

卯花　坂上竹藪

玉章（たまづさ）に思ひのたけの長き日もけふばかりとやつかひきり紙

坂上竹藪

ふりもぎりにげゆく春のこれよりはすがらん袖もなつ衣かな

相性は金生水と思はるゝ水にうつりし山吹のいろ　子子孫彦

雨後藤

春雨にぬれて夜風や引きつらんはなより落つる藤の玉水　橘貞風

杉の木末に藤の花のかゝれるを見侍りて

天狗でもすみなん杉の梢とてまとひし藤のはな高くみゆ　澁川栗人

小手鞠といへる花をいけし見せにてあきものの

帳くりかへし算用し侍るとて

そろばんの玉にもかへぬ帳面に又百かした小手まりの花　腹から秋人

暮春

くれゆくといへばどうやらよけれどもなんにもくれずにげて行く春　鶯摺江

三月盡　柿下手丸

白魚　山手白人

春は又たれもたづぬる隅田川しら魚に子はありやなしやと

尾久白魚　逸咀英

いつか日の長くなるとはしら魚のせたけものびてゆく春の尾久

井蛙　へつゝ東作

身を守るかくれどころはこゝこそとちゐを古井に蛙なくなり

苗代　柿下手丸

苗代を田ごとの畔にかきあげて作大將の水のかけひき

杜若　紀定麿

うつくしきかほやが沼の杜若あやめの花をひしぎこそすれ

款冬　白鯉館卯雲

倏成の乘りあげられし身ぶるひに馬の露そふ井出の山吹

下戸曲水　　睦元さぐる

盃をながしてはくむ山川のおもしろ酒や下戸の曲水

雛祭　　遅蒔千種

花がめに桃や椿をさしまぜて都のにせのひな祭かな

桃　　志月菴素庭

そろばんの位ちがうて三千年になるてふ桃の三年にさく

汐干　　四方赤良

かりがねをかへしもあへずさくらがり汐干がりとてかりつくしけり

出がはりの男女の汐干がりするを見侍りて　　浦邊干網

出がはりのかはりをおきつしほひ潟貝ふむ跡もにごさずに行け

桂川若鮎　　内匠ばしら

うつくしさ手にもとられず若鮎のすきとほり行くびんかつら川

花盗人　　澤邊帆足

とがむれば七重の膝を八重にをり手をつき山の花の盗人

　　節藁仲貫

あやしさに花をる事やとがめなんそのぬす人のをさをとらへて

惜花　　とはうも内子

友だちもいまちと待つてくれあひのかねのなるまでみよし野の花

寄花出替　　文屋安雄

お屋形のさがりみすてゝいそぐらんよめいるさきの聟のはな見に

遊絲　　加陪仲塗

春の日は須磨も明石も蝦夷錦うら一めんにあそぶ糸かな

曲水宴　　馬屋厩輔

曲水の宴にひかれて三日月もともにながるゝ盃のかげ

聾者見花　　紀定麿

つんぼうはおのれが耳のとほ山にかすめる花の香はきこえまじ

乞食見花　　加保茶元成

くれなゐと乞食も花をみるけふはつくな〳〵よ入相のかね

相應内所

こつじきのつゞれさすてふ袖も又はなの錦をけふはきてみる

後家愛花　　峯松風

櫻木をめづるばかりの後室の身も花よめといはれたりしが

花下忘歸　　ふしまつのかゝ

よしや又うちは野となれ山櫻ちらずばねにもかへらざらなん

ひとり草庵の花を見侍りて　　業寂僧都

罪なくて配所の月やいかならんみやこの花を錢（ぜに）なくてみる

もとの木あみ

容はみなさいた櫻につながれてひかれくるわの春の駒下駄　竹杖爲輕

鐘樓櫻

つけば散るつかねばすまの山寺のさくらにめでておそき入相　山道高彦

裏店花

わび住は物ほしげなる鉢の木を下からのぞく花のうら店　節松嫁々

二階見花

二階からをりてかざさん櫻花めのしたにのみ見るは口をし

盲人見花

木のもとに杖をつく〴〵座頭の坊花のながめはあかぬとぞみる

啞子見花

花の香をしみて口をうごかせどつんぼうほどもきかぬ春風　紀躬鹿

見侍りて　さかづき米人

七重八重こゝの家にも櫻花かしこの山のあまり物かも

東叡山花　朝がよひ紀廸

中堂のこなたにたてるひともとは慈眼大師の御さくら花

飛鳥御殿山上野の花を一首によめる　から衣橘洲

花ざかりあすかとせん手ごてん山中に忍ぶが岡目八もく

吉原花　遊女玉つる

九重を一重ちらせし八重櫻けふこの里に匂ひぬるかな

濱邊黑人

西行のおめにかけたき普賢象はなの中よりはでな道中

内匠ばしら

身あがりの客のくるわにまちかねて遲櫻なる花のねすがた

越路(こしぢ)にはいつきさらぎとまつ文の返事を今ぞもてかへる鴈

雲雀　　紀野暮輔

足引の山鳥の尾のながき日にせいくらべしてたつ雲雀(ひばり)哉

虻　　栗成笑

山蜂のすがたに似れどぶん〱となのるにつけてあぶなげもなし

花　　から衣橘洲

山姫のねまき姿か花の香をしめしあしたの雲の腰帯(こしおび)

朱樂かん江

散らうかとみな人あんじわづらへば花にも風は百病の長

同　　逸咀英

さく花を何にたとへん飛鳥山きのふの雲はけふ雪とふる

飛鳥山のふもとなる人の家に櫻のさかりなるを

新宅の壁もまだひぬ長の日にたらり〳〵とふすまはるさめ

出茂吉成

やうつりのかゆい所へ手紙どもかきあつめつゝかべをはるさめ

糟句齋よたん坊

經師屋春雨

やくそくの口よりも紙をはるさめにへらをつかひてのばす經師屋

秦久呂面

春雨鼓

とり上げてうちしめりたる春雨に今宵つゞみのねごころもよし

酒上不埒

歸雁

うちすてゝ年をこしぢのかりがねはやよひかぎりにかへすべらなり

加保茶元成

年ごとに來てはかせいでかへれるは越路にたんとかり金やある

於保久旅人

あづさ弓やしきのすみのいなりをもまつるや初のうまや別當
橘みさえ
千早振かみやしきから初うまの口をひかせてよるのとのさま
酒上ふらち
西行忌
とぶらふも他生のゐんゐ上人にふじの煙のそらなきはせじ
腹から秋人
道のべの柳ひと枝もちづきの手向にせんと折りてきさらぎ
もとの木網
菜花
きさらぎもすぎ菜まじりに菜花のさきてはくはぬ口なしの色
山手白人
五十首歌よみける中に春雨
はるさめの日數かさねてふるがるたうちつけにこそさびしかりけれ
忍岡きよろり
新宅春雨

とり捨てし野べの日かげもたけ火繩もえてみじかき春の若草

早蕨　柿下手丸

寒からぬ野邊の春風そよ〳〵と吹きたてられてもゆる早蕨

猫戀　常産阿馬

うば玉のよる〳〵おのが妻ごひにいつしか聲をからすねこ哉

銀杏滿門

野ら猫のおのが妻こふ聲たかく軒端の草のしのばでやなく

初午　問屋酒船

やれ太鼓はるきさらぎの午の日のみやは子供がうけもちの神

初午生醉　節松嫁々

初午やしるしの杉を神垣にまがいてをれるさかきげんかな

屋鋪初午　もとの木あみ

柳

しら露は柳の糸のむすび玉風より外にとく人もなし　山手白人

青柳はきりかぶろより生ひたちて若木の枝を長くさげ髪　加陪仲塗

青柳のみどりの髪をすきおろす櫛は銀むね三日月のかげ　檜皮釘武

はるの日内匠ばしらのもとにて刀わきざしのものによそへて春のうたよみける中に柄糸を　あけら菅江

雨ふりて地までかたなの片手まきほぐれぬ春の柳屋の糸

軒に鳶凧のかゝりたるを見て　垢染衣紋

さゝがにの糸のよるべの風をいたみ思はぬ軒にやぶる鳶凧　常産阿馬

若草

を見侍りて　　四方赤良

六道のやみにまよはぬ梅のはな色をも見るめかをもかぐはな

竹藪梅　　峯松風

青々としげりし中にこの梅のはなはくれなゐ藪はくれ竹

あけらかん江

ひら〳〵と藪からほつえつき出すは竹やり梅の花にやあるらん

銀杏みつかと

藪ふかくおされし梅がかせ枝もげに竹のねのはるは忘れず

大原久知位

辻番梅

つじ番の梅のつぼみもつく棒は先みんなみへさすまたの枝

はるのうたとて　　能とろ

青柳はうら〳〵にしだれつゝ〳〵と梅のすばえ出でゐる

はつ春にあがつためしの多ければ一座は除目おどろかしけり

はるの日麥飯をたうべて　　銀杏満門

麥めしの鉢のうらさへかすむほどくひつくしてや腹もはるの日

殘雪　　やはり棟梁

雪とともに殘りし去年の借錢もまだきえやらぬかけ乞の帳

餘寒埋火　　遲蒔千種

春ながらさむさに花のかじけ咲をりて火桶にいけ田炭かな

春巨燵　　山手白人

ひとたびはたゝみし蒲團またかけてわかれの霜の置きごたつ哉

梅　　横道黒塗師（肥後永崎一見）

山人のぬの子のかたにつけてさへ匂ひにけらし梅ばちの紋

青山六道の辻といへる所にて梅のはなの咲ける

るにあるじのけふは子日なり小松ひきてあそばんとてとゞむるに

讀人しらず

きのふからよそにねの日のまつなればけふはひと先うちへひかまし

七種

於保曾禮長良

七くさをはやす庖丁かな火箸にほんの鳥のわたるまな板

若菜

手柄岡持

鏡汁のつまともなさめ山鳥のおろぬきそむるけふの若菜は

酒上不埒

野べにまだ薺ものびかねし鶯菜つめどかすかなねにこそありけれ

門松とりたる跡を見侍りて

馬場金埒

七くさもはやすぎたてる門ならでしるしばかりの松のふたもと

初春大食の人をみて

賀茂季鷹

油杜氏ねり方

みやうがあらせ玉の緒琴を千代までとひくやはつねの松のみどり子

相應內所

みどりなる松をねのひにひく琴は千代よろづ代も天下太平

むつきなぬかの夜四方赤良あけらかん江加保茶もとなり蔦から丸などとぶらひ來ませしに雪さへふり出でければ

棟上高見

蝶とび千鳥とふれる淡雪のこよひはとまれ七くさのはに

おなじ夜あすは子日なればとて亥日小松といふ題にて

朱樂漢江

亥日からもはやねよとの刻限をきけば小松をひけよつの頃

五明樓にあそべるあしたつとめてかへらんとす

山家鶯　山手白人

そりや春がきた山里のかくれ家(が)に御慶とつぐる鶯の聲

菜畠鶯　梓弓八中

うぐひすのこゑもたか菜をおろぬきて畠(はたけ)をあつちこちにとびなく

鳥屋鶯　ちゑ内子

まづ徳をとり屋のみせの鶯は高いかひてにありつき日星

子日雪　銀杏滿門

老が身もかしらの雪をふりたてて孫やこまつにひかれてぞ出る

子日琴　四方赤良

この子日(ねのひ)いづれに心ひかれまし松は十八ことは十三

朝寐晝起

峯の松ことのねのひにひく歌も聲をはるべや風のふき組

櫻飴　山道高彦

雪とちり雲とながむる花なれば櫻あめともなりぬべらなり

霞　石部金吉

一越の調子をはるのうらゝかに山のかみんもかすむ鸞鏡

加陪仲塗

みよしのの山の葛のこのりにして霞の衣あらひはりせり

小川町霞　智恵内子

さほ姫の霞の衣ぬひたてにかゝるしつけのをがはまち哉

鶯　手がら岡持

しら雪はきえさうなるか鶯の聲をはるべにならふ法華經

佐倉はね炭

さゝの戸をおこしに來なく鶯にしのゝめさませ藪の一聲

伊勢元日　から衣橘洲

ふるとしははらひきよめて手拍子をうちとに目だつ春の神風

卯のとしのはじめに　峯松風

うの毛にてついたるほどもきずなきは君が八千代の玉のはる哉

花道列爾

おそろしきとらの年の尾ふみこえて光のどけき玉の卯の春

はるのはじめうつし給の書きぞめすとて　糟句齋余丹坊

あら玉のとしく弟子をとりあつめ寶をえしか家のかきぞめ

町屋早春　圖南女

元日はまだ春霞たちこめてふつかに見せをあけぼのの空

寶引　屋立綿純

寶引にだいく＼どころにぎはしく手をしめ縄は親へゆづりは

大屋裏住
あけそむる年の要の扇うりよぶ一こゑに春は來にけり

腹から秋人
春來ては野も青土佐の初霞ひとはげひくや山の腰ばり

宿屋飯盛
かけごひの夜あけにおもき革財布かつぎし肩もはるは來にけり

名満壽盛方
鳥がなくあづま男の先ぶれは春たちかへる花の江戸入

北川ほくせん
よる波にわけ入るしどのあまならでとりえてうれしあら玉の年

内匠はしら
もゝとせになりても人は松の下くゞるときはのみどり心ぞ

手柄岡持

久かたの空錠なれや天の戸をあけたつ春のかぎりなければ

酒上不埒

きのふこそ煠はとりしかいつのまに葉竹そよぎて門松ぞたつ

もとの木網

又ひとつ年はよるとも玉手箱あけてうれしき今朝のはつ春

智恵内子

通りますと岩戸の關のこなたより春へふみ出すけさの日の足

濱邊黒人

面箱のふたあけぼのの鳥とび三番叟から春はえい〳〵

竹杖爲輕

きのふまで年はせはしくはしりしが明けて日あしものどかなる春

徳和歌後萬載集　巻第一

春歌

ふるとしに春たちける日よめる　　紀春長

初はると歳暮をいはふ門かざりわか松もありくれ竹もあり

立春　　朱樂漢江

佐保姫のきたる霞のうちかけはけさしも春のたちおろしなり

山手白人

につこりと山もわらうてけさは又きげんよし野の春は來にけり

元日　　白鯉館卯雲

一夜あけて桃太郎月のどけしな霞たなびく鬼が島山

しもとのよゝとよろけ、なよくせのなくてやまず、ふたゝびのえらびをはじめて、しもの句を聞きてかみをとひ、かみの句をうけてしもをたづぬるやうになりて、ふつか醉のあとをひき、すゞりぶたの殘りをあらすべきはしのひまく\、春つばき、夏はえのきに秋ひさぎ、冬ひいらぎにおなじき歌をはじめて、はなむけたびだち、くやみよろこび、れんぼれゝちの色々、めつたやたらのくさぐ\、氣のよい佛のかほをなで、せつない時の神たゝきにいたるまで、部をとりまきをたばねて、森の木のはの數々に、心のたけ帚はきあつむるよし、みろく十年辰のとし、きのふとたつたる春のはじめこれをひろむ。名づけて德和歌後萬載集とやらかす事しかり。

すはらやのたのみごとをうけあひていらい、たはれ歌をえらぶこと、をとゝしのくれのせはしき比よりはじめて、夏の日のながきことしにをはれり。いはゆる古今後撰夷曲の集のみにあらず、堀川百首になずらへてよみつらねたるためし、をかしといひ馬鹿といひ、その名おほくきこゆれど、この比のやうにはやりて、髭くひそらすともがらまで、たはれたる名をつき侍ることは、なほまれなり。口あひのかしこきもの、さかもりの席などにのぞみて、地口まじりのかたことを、御祝儀にのべたるなん、ひと通りはありける。しかるにわがきみもさかえてましんます、まんざいしふをえらびしよりこのかた、一とせばかりの春秋、四方の赤、のみかけ山のむらがらす、あけら館、まるの字のごとくまとゐあへり、落栗の落ちこぼれをひらひ、はなたちばなの香をかぎ出し侍りき。濱邊の肴市さらににぎはひ、都下の歌角力またさかりなり。たゞ遠慮會釋のむかし人すくなく、會しづかによりあひしおもかげをしたふのみにあらず、また杓子定規の、いま世のはやり人ぞやめきの志まつのはを知らしめむため、ことさらにかきちらすものならし。赤良さかづきの數つもり、あ

あめあきらけきよつのとしむつき

山手白人誌

るにしもあらず、かしの木の角もの、されどもいよ〳〵かたく、仕出しの澁うちは、見かけよりいよ〳〵高きたぐひならん。張物をはる林のはな、敷きのしにあきの木のはのいろいろに品かはりて、興あるふしおもひすて難くと、いらざる肘をはりまがた、しかまのかちはだしにてひろひあつめたる數は、千うたにあまれり。しかはあれども、蜑の藻鹽はくめども盡きず、切りおとしの札は掲ぐるにもれ、秋のこの葉はひろへどもしげく、大門の切手も燈籠の夜はあらたむるにいとまなきたぐひ、わきて空とぶ鳥のもくあみをもれ、水にすむ魚の鈎をのがれて、四方にたよらず、丸のののよすがなき歌はしらざる所なり。かれこれえりもとめて、難波江のあしかりしふしには筆を加へ、山の井の淺き心にはひいたりをやとひ、四方山人ふたゝびこれを書いつけて、徳和歌後萬載集と名づけ、予にも序せよとよぶ。いなびも興なしと、はゞかりの咳拂ひにははゞかりを忘れて、筆をふるふも、此ふみの千世かけて住吉の松眞木にふすほるとも、玉津島の波よけ杙にかゝりとゞまれとおもふ事しかり。

德和歌後萬載集序

さきにえらべる萬載狂歌集は、古きを拾ひ新しきを加へて、書いつけけるなり。そのふみ世にひろごりてのち、月にまし日にそひて、すき人多く出できにけり。烏がなくあづま歌、今やさかんに行はれなれりければ、むしろ織る翁も夷曲のさまをさぐり、犬うつわらべも此鄙ぶりをもとめて、芻蕘のものもよみ、雉兎のものもまねぶ。いつちくたつちく太左衛門どのの乙娘も、濱のきさごのかずまへをかしく、によう〳〵烏のなかぬ日はあれども、たはれうたの噂たゆる事なし。かくばかり時めくことは、さき徒士のふりにし昔もきかず。さればはこやの山は指物屋のわたし細工とおもひ、みどりの洞とは十九文見せの箱のうちかとおぼえたる、久かたの糖賣、あらがねの土こね、千はやぶる紙屑買、ぬば玉の夜蕎麥うり、手枕の赤坂奴、いそのかみふるかね買をいはず、花のお江戸に生れとうまれ、來りときたる人ごとに、言葉の花木ごとに咲きて、終にむだの山をなし、心ざしの露は草葉よりつもりて、笑ひの海をなす。げにや狂したるさまながら、いづもやみくも八重垣のへだてあ

萬載狂歌集 終

ならの葉の名におふ宮の古ことならで、松のはのときはの蔭にさへづる萬歳をもて名とせるこそ、かゝるたのしき御代に腹をつゞみうつたはれをのともが、ちりうせぬ言の葉なりけれ。この巻のおくに、其ことわり書きてよとこはるゝを、ゆづる葉のゆづりなむもなかなかなればとて、橘のやちまたがのぶる事しかり。

夫德若五萬載稱君茂榮而在焉。尉殿三番叟祝我等千秋將侍。故鳴鼓之謠每年之福大夫而振鈴之舞今日之御祈禱也。新玉年始探李少君之玉不可得。古鉄店端選日無借之錢不可入。裏白之紙屑籠隨拾隨滿。神馬之藻鹽草以書以集。皆忘串柹之本。盡遊擣栗之下。發口謳歌繁於五葉之松。湧臍笑語甚於大福之茶。蓋七百餘首爲卷十七。爲類十二。一曰春。二曰夏。三曰秋。四曰冬。五曰離別。六曰羇旅。七曰哀傷。八曰賀。九曰戀。十曰雜。十一曰釋敎。十二曰神祇。板行已成卷數維新。虎狼漏殿之雨不濕寸紙。風吹勿吹之風不散一枚。長不乘柳原筵。幸免爲淺草紙。隨武藏野之末廣。遍於四里四方。因筑波山之御蔭。滿于八百八町。誠目出度候哉。萬載々々萬々載云爾。

時天明三年歳次癸卯　四方山人等序

玉つしまみがく人丸住吉の名もおもしろき和歌の三神

大黑のをしへを守る人ならばつちもたからも手のうちにあり　星定つぐ

福祿壽

福祿壽みとせがうちに南極の星を守らば長者なるらん　星直つぐ

題しらず

心をばまことの道にいれおきていのらば猶も神や守らん　大經師文しろ

惠比壽

神の德いはゞなにたゞ西のみや東に南まうで北々　長つぐ

いのりてはさらに晝夜もわかゑびす千たびもよたびあきなひの神　かね女

和歌三神

住吉と明石と和歌の浦波に願をかけてみつの御神　ぬい女

めをみゝにかへす〴〵もうつ釘のつんぼうほども猶きかぬなり

かく書きてまたはりけるにいかにしふねきのろひ人なりとも思ひよわりなんとおもふにそれより三日四日も過ぎし頃わらをもて人のかたちをつくりつゝれいの釘あまた所にうちてやしろのまへにたておきけるを見侍りて　もとの木あみ

いなり山きかぬいのりにうつ釘もぬかにゆかりのわらの人がた

かゝることたびごとにきゝけるゆゑにやそののちはせざりけるとなん

福神里通　紀定丸

人目をばいつも頭巾にかくれ里數のこがねをまかきやらの神

大黒　地口有武

居あり神木とて大きなる木のあるにあらしはげしき夜いかなるもののしたるにやあらん白き紙に人の目を書きてそれがたゞ中へ大きなる釘をうちいれたり見るにおそろしさむねもとゞろきてかゝるさかしらしきわざをして人をのろふことのあさましさよとてかの釘をとりすつる時みやつこのよめる

小鍋のみさうづ

目を書きてのろはゞはなの穴二つみゝでなければきくこともなし

とかきてかの木におしはりておきけるに又の夜れいのものの來りてみけるにやまた耳をかきて釘をうちけるにこたびもまたとりすてしと聞きて

ちゑのないし

まうで侍りて欄干によりて海邊を眺望し侍りしに社僧の心ありてたばこ盆を出し侍りしかば　から衣橘洲

たばこ盆出してかすがの宮柱ふとまゐりしもえんのはしゐ歟

村社笛太鼓

笛たいこはやしの中の神祭とつぱ日よりをいのる一むら　卯雲

競馬

埒もない見物事に引きかへて競馬は何ものりょしさ　くさやのもろあぢ

今はとて汗をみたらし加茂の宮あぶみあやぶみのりくらべ馬

神主遁世　から衣橘洲

神主も世を中臣のはらひすて今はあたまのかみとゞまらず

むさしの國江戸麻布しら山といへるに稲荷の宮

御代なれや古がけまでも酉のとしいかな家にも御はらひが有り

これは寶永二年酉の閏四月いせ參宮ぬけまゐり多き時にある人のよめるとなんかたりつたへたる

三めぐり稻荷社奉納に夏神祇　から衣橘洲

ほとゝぎす田をみめぐりの神かけて雨のふる句をふり出てやなく

四方赤良

みめぐりに早苗とりゐの乙女子がかさぎぞ夏のしるしなりけり

寄米舂神祇　もとのもくあみ

立臼に米つきよみの神なればまゝになるのもきねがならはし

むさしの國目黑大鳥明神にて　四方赤良

此神にぬさをも鳥の名にしおはゞさぞ大きなるかごありぬべし

むさしの國三田といふ里の三笠山といへる社に

萬載狂歌集　卷第十七

神祇歌

世の中百首の歌の中に　　荒木田守武
世の中にふとかるべきは宮柱ほそかるべきは心なりけり

むさしの國神田の社にて神酒德利をふり見て　　六位大酒官地黃坊樽次
當世は神もいつはる世なりけりかんだといへどひや酒もなし

神祇　　未得
おはらひの箱をはりぬる神わざにそくいをおしのひまもなげなり

百首歌合の中に　　平郡實柹
神もさぞ聞きて心地やよかるらんみこときねとるよかぐらの音

讀人しらず

日光のやしやびしやくといへる木に慈悲心とい
へる鳥のとまり居る晝に　　卯雲

内心の如夜叉びしやくもをれぬべしこの慈悲心の聲を聞きなば

可信佛道といふことを　　伊田可竹

あふぐべしのりのをしへのなかりせば座禪衾もつゞられましや

おしろをつくるとてのりをおすを見侍りて　　蛙面房

もとよりも米の菩薩と思しめしをしへののりをときのべ給ふ

放屁百首歌の中に　　四方赤良

おろかなる人はぶつとも放屁ともしらではかなき世をやへひらん

大津繪の鬼を見て　　あけら菅江

南無阿彌陀ふつとさとりし發心に鬼もさつそく滅無量罪

むさしの國羅漢寺にあらたに右繞三匝の堂をたてゝ百の觀音さつたを安置せしがその堂ののぼりはしさゞえに似たれば人みな榮螺堂とよび侍りしを　四方赤良

觀音に魚鑑もあればなまぐさき榮螺堂とはいはしにた鍋木魚　山田僧都

うろくづもつみをのこらずたゞかれて佛のまへにうかみいでたり

旦那寺より佛餉こひにおこしけるがあまりに大きなればその袋にかきつけ侍りける　大根太木

すくなしとみよの佛やみますらん後生のためにしやうつむれば

ある法師の説經するを聞きて　讀人しらず

らう竹のすぐな教にやにもなくのみこみやすきのりの一ふし

てうまの貝ふく比あつき日をしのぎつゝ沼田の
　みだのみまへにぬかづきて　澤邊帆足
日を背負て重きあし間をゆく沼田くたびれし身に南無あみだ笠
　善光寺如來開帳の時朝參りの人を見て　婆阿
挑灯の數は田ごとの月ふけてあけやしなのの開帳の庭
　眞乳山歡喜天にまうで侍りて　あけら菅江
わに口をならせばまつち山彥にこたへてひゞくくわんくぎ天
　大山參喧嘩　算木有政
はやり男が氣も石尊のつかみ合ひ中を直してはや納太刀
　文月十三日新吉原にまかりけるにあまたあそび
　どもの朝日の如來にまうづるを見侍りて　文莫女
うかれめのつみもあさ日のかげ賴む二世の願にみせの苦はなし

その中は有無をはなれし布ぶくろ子煩惱こそ卽菩提なれ

山手白人

本來は一物もなき布ぶくろあけぬうちこそ寶なりけれ

題しらず

橘貞風

まん中にきつとすわらせ給ふのが行基ぼさつの御作なるべし

未得

淸水にまゐりの人は觀音の堂といふより馬とゞめ哉

むさしの國目黑の不動尊にて

貸本人和流

この瀧のながれの身とて不動尊ふたりかぶろのせたかこんがら

西國札所四番の觀世音にまうで侍りて

内匠半四郎

九重の守の緣起くり返し又まきのをの寺の寶物

江戸六阿彌陀に一日のうちにまうではべらんと

世を救ふ御名(みな)をなのりて法(のり)の舟ともにさしゆくあみの衣手

自畫の像に　讀人しらず

目は見えず腰はかゞまる齒はかける南無あみどうふたべるばかりぞ

題しらず　拙堂法師

ほくろくと同じ火宅の人心(ひとごころ)氣をいるもありほうずるもあり

から衣橘洲

ほとけもとわしの山よりいでし故か今の法師のつめの長さよ

百丈禪師の畫に　卯雲

七條や九條の袈裟の和尙をも直下に見なす百丈禪師

布袋　花道つらね

經山寺(きんざんじ)みそか知らずのたのしみは本來くうてねたりおきたり

から衣橘洲

萬載狂歌集　巻第十六

釋教歌

授戒し侍りし比ある人の來りて汝が釋門に入りしもまたれいの狂言にてまことの道をしたふにはあらじなどあざみ侍りければ名取川の狂言を思ひいでて答へ侍りける

祝阿彌

かゝる時すくはせ給へ名とり川今よりあみに入りし身なれば

すぐせのえにし深かりける人にや誓の海に歸入してしきりに宗門の沙彌戒をうけたもたん事をねがひし人の需に應じ祝阿彌といへる法號をさづけて長く師資の契をむすび侍りければ

師の坊

寶舟のうた　讀人しらず

ながきよの十のねぶりのみなめざめ波のりふねの音のよきかな

ある人のいはくこの歌全浙兵制附錄日本風土記に
見えたり日本の琴譜なりと

摘草によせて廻文歌よめと人のいひければ　もとの木あみ

むらしばでみつゝつみ草名はしらじ花さくみつゝつみてはしらん

の心をよめと人のいひければ　　四方赤良

おとに聞きめにみいりよきでき秋はたみも豊にいちがさかえた

物名

りうたん　　あけらかん江

こと草はかるたとみれど小六月七八九十きりうたんかも

木名五　　へつゝ東作

かさもなし（梨）ぼくり（栗）もも（桃）たぬひとり身のつらさよ時雨とくは（桑）れねかし（樫）

紀定丸

きり（桐）もなくしぐるゝころもみじ（楓）かき日これで天氣にあすなら（檜）うかや（柏）

木名十　　濱邊黑人

見よかし（樫）とち（橡）ぎり（桐）しひ（檜）ぐれ（榑）まつ（松）さかや（柏）をどりくり（栗）出せしひ（椎）てさはら（椹）じ

廻文歌

旋頭歌

一の谷にて　　岩手宗也

平家武者さびたる小手のてつかいが峯をおとすは
　九郎判官殿なりけり〳〵

寄謠祝　　から衣橘洲

よい時にあふむ小町やその玉だれのかゝる世に
　すむやうれしきすむぞうれしき

折句歌

小幡何がしの和歌の會にいくよもちの出でけれ
ばそれを句の上におきて　　藤本由己

い。かい事く。はるゝ物ぢやよ。い風味も。のもいはずにち。ぎり〳〵て
おめでたいといふ五文字を句の上におきて農業

長き日を　のめぐりまはる　さはうなぎ　さんしやう魚の
つけやきに　やまめのなます　やまのいも　ほりしひ茸を
かきあつめ　酒は目に見ぬ　鬼ころし　あるは熊坂諸白の
名さへおそろし　長範が　かけつぼざらに　ごす茶わん
むさゝび聲や　ねずなきに　まじるたぬきの　はらつゞみ
うたふもまふも　さわがしき　いたちみめよし　むらをさの
はこいりむすめ　山の神　そゝなかしざを　とり出して
ならすひなぶり　ぶりしやりと　はねまはらぬも　世の中よ
やほこそなけれ　思ひいる　山のおくにも　しかあれば
すみよかりけり　炭よかれと　いはうて三度　めぐるさかづき

反歌

醉ひしなば櫻にうづめわがからのくつるやこゝも小野のすみがま

世の人をくそのごとくに見くだして屁つぴり儒者と身はなりにけり

伊豆の國天城といへる山中にて花を見てよめる　へつゝ東作

やまとには　いさまだ知らず　もろこしの　とらふす野べの
けしきをも　かくやと思ひ　いづのうみ　なみのたつみや
むまひつじ　さるのこのみと　なりいでし　大しまみやけ
あけくれに　見ればこそあれ　おそろしき　くますむ山の
あなたふと　みことかしこみ　おほがみの　はこふみわけて
たゞひとり　すみのかまどの　夕けぶり　心ほそさを
もろともに　あはれと思へ　さくらあめ　あまぎのたけに
つもるゆき　はるもきつねの　尾さきより　かのこまだらに
消えぬれば　きこりのしづも　あさぎぬの　いとまありげに
まかり出て　花見じらみの　うはばひに　うさぎの耳の

きなんしに　まみえんことは　かたいとや　口三味線の
天たゝん　天とだまらず　鳶とんで　魚さへふちに
をどり子の　舟行はまた　夢にだも　見ぬ世の人の
友ばかり　もとより貧に　なりひさご　水ものまれぬ
顔淵が　かひしおかべの　からうたや　みそじひともじ
ひとよりも　思ひあがれど　わづかなる　禮儀三百
店がりの　晦日のやみを　いかんせん　あはれ富貴の
もとめられば　馬の鞭とり　屁もかごと　孔子もいはれし
ためしあり　とてもはやらぬ　道しばの　露のかごとを
たなへあげ　いかだにのりて　あら海の　そこともなしに
うかれ出でん　佐渡の金山　どこにあらんかも

反歌

ありきつゝ　ものをほち〳〵　かぶるにくさよ

子を思ふ心のやみにねずみめはまよはねばこそよるありくらめ

反歌

此うた榻鴫暁筆に見えたり

儒者述懐　　　読み人しらず

きんまくや　土はかせの身の　はかなさは　あしたに道を
聞きはつり　夕に死ぬも　可なりなど　いひつゝ後世も
ねがはれず　しののたうまく　しのにのみ　人しらぬ氣を
はるの野に　あさるきゞすの　けん〳〵を　色にかへよと
はぢしめて　となりのむすが　袖をだに　ひくにひかれず
けつけきも　きるにきられぬ　内弟子の　わかしゆの顔の
むさくろし　ましてやよそに　みつぶとん　おやすみなんし

萬載狂歌集 巻第十五

雜體

短歌

鼠物語のおくに　讀み人しらず

ねずみめが　心はやみに　あらねばや　くるゝをまちて
むばたまの　夜にだになれば　くらけれど　みちもまよはず
はしりいでて　よろづの物を　あづさ弓　ひきもてありく
うたてさは　いふばかりこそ　なかりけれ　さりと思へば
子を思ふ　みちにやまよふ　みちもなし　かきねをくゞり
あらがねの　つちのなかへも　ほりいりて　巣をつくりては
子をそだて　また久かたの　空にゆき　けたうつばりを

五色　節藁中貫

青漆の重(ぢう)に赤飯つめさせて胡麻鹽づつみ黄菊一えだ

星屋光次

青豆や黒豆あづきうるみせの葛やきなこもみな一つ升(ます)

題しらず　壽德

大つゞみ大こばんとう番がしらひものかんぶつとうしからかみ

萬載集をえらび給ふと聞きて　紀野暮輔

わが歌も萬載集にもしいらばまことにめでたうさふらひにけり

萬載集の板なりける時　板元伊八

小法師の筆に硯の池のはた山のさくらは板もとの株

題しらず　　坂東五十夢

わきざしのつばきもちまで手をかけて生酔かすてらようかんにする

虱百首歌の中に　　もとの木あみ

筒いづついつも虱はあり原やはひにけらしなちと見ざるまに

四方　　星屋光次

彌陀たのみ薬師もたのみ猶も又無垢世界にて千とせたもたむ

塵毛あた多

南枝よりひらくる梅の春くれば匂ひ北野と西陣の沙汰

五行　　富士鷹なす

金に花さかす相撲の土俵入勝負は火水見ては木になる

星屋光次

金のなる木のおふる土もたぬ身は火に入り水に入りてかせがん

さはる事ありてことわり申遣はすとて　樋口關月

無遠慮に男はどうもゆかれまじ和泉式部のお開帳には

ある人のもとへ碁うちにまかりけるにかねての

やくそくたがへて留守なりければ　小祐

碁をうちに居るべき筈をけふよそへゆくはりくつにたがいせん哉

ある人三番叟のけいこし侍りしにには かに雨の

ふりければ　から衣橘洲

三番叟ふるはすゞしき雨ながらもとの天氣にお直り候へ

灸をすうるとて　子子孫彦

ちりけよりけんぺき七九十一のきゝうな飛脚は三里一つ時

京祇園の百合女がかける杜若の爲に　讀み人しれ多

京染の姫ゆりなれど赤からで江戸紫のかきつばたかな

きなふ家ありある日旅僧の來りて鼻けぬきをか
はんとて手にとりこれはよくくふかと問ふにあ
るじ本來空なりとこたへければ

くうならばたゞくれなゐのはな毛拔やなぎがみせはみどりなりけり

といひてかのけぬきをもちて出でゆきぬるよし
を聞きてそのあるじにかはりて　卯雲

あの坊主ちやんが一物ないと見えくれなゐけぬきみどりにぞする

狂歌袋を製してかけ侍るとて　もとの木あみ

はぢあへずわれもかはづのうた袋はしらのつらへかくる水引

つけ木をかりの枝折にして

あと先に心つけ木を枝折(しをり)にて硫黄の花のことのはも見ん

和泉式部の寺に開帳ありける比さそはれけれど

しけれどたゞ一つある傘をはや人にかしければ　秋山玉山

かる人にこれは一本させましたされば二本はもたぬ傘とて

返し　樋口關月

さしつけて御無心まうす傘のほね折ぞんになるぞかなしき

かづさの國山の邊の郡のあるみてらに赤人の像

ありと聞きていきて見けるにその像閻魔王のか

たちし給ふあまりに興さめてその夜同じくとも

なひ侍りける廣澤翁のもとに申遣はしける　東里

赤人の借錢すます折なれやのこすすがたのえんま顔なる

廣澤翁返しはなくてその歌のかたはらに抹香抹

香とかいつけ侍りしよし自筆の書に見えたり

むさしの國芝のはまべに柳屋とて小刀鏰などあ

足駄の歯入　　　　　　　　　　　　　　　四方赤良

世わたりのやすきもよしや難波江のあしだのひとは入るゝばかりは

明和九年卯月の比浪花より來りてかつをぶしあきなふ人にかはりて人のもとへよみてつかはしける　　　　　　　　　　　　　　　　久　敬

かりねせし宿はあしびの烟にて何かなにはの一ふしもなし

家のかまちにてかしらをうちて　　　　　　　大屋裏住

此家はたとへのふしの火ぅち箱かまちでぅつて目から火が出る

ある方のこしかけにやすみゐける下部のねいりて陰嚢のあらはに見えけるに　　　　　　　　樋口關月

きん玉よぬしはたれとも知らねどもぶらりといでし下がへの妻

樋口關月にはか雨にあひて傘かりにとて人おこ

天下一大事のものをぬすまれて日々にをしさのます鏡哉

ふるき骨もてつくれる扇に　石部金吉

かんりやくに千早ふるほねもちひしはかみ屋もきかぬためしなり平

晴天傘　から衣橘洲

下駄の音もかんらからかさ玉ほこのみちかへ日和さすがはづかし

甲斐の國鏡中條といふ所にて菊の花ゑがきたる

扇をひろひて　亭々

よい事をきくにつけても末ひろく思ふ心のかゞみ中條

題しらず　兎十

京草履大阪あしだ江戸へ來ててりふり町の中のわるさよ

[illegible]　紀のうら人

ゆるむともよもやぬけじのかは鼻緒かしばのあしだあらんかぎりは

ひいふつとすいはの征矢の高なりはぶるさかんなる響なりけり

猿引　　讀人しらず

たらぬ毛の三筋の糸に引あはせ人にまさるの藝をするかも

梓みこ　　山手白人

よりもこぬ梓の弓をひきいれて百一升は高ゐほし哉

題しらず　　壽德

おもてには伏羲神農かざれども内は張介ひんな薮醫者

仙道不用　　山岡元隣

古語にいはく命ながければはぢ多しよくまなびても何かせん術

世の中百首歌の中に　　荒木田守武

とらにのりかたわれ舟にのれるとも人の口はにのるな世の中

ある人鏡をぬすまれしと聞きて　　藤滿丸

ある人品川に遊びて痳病をうれへけるを聞きて　四方赤良

行きやらでとまるえきろの鈴口のえんにふれてやりんとなるらん

花道のつらねのもとにて神竝周全といへるくす

しにあひ侍りしが狂歌の名をこひ侍りけるに折

ふし雨しきりにふりけるを見て風早のふり出し

とやよぶべきとあるじのたはぶれければ　四方赤良

風早のふり出す雨のをやみなくはやるは君が福の神竝

返し　風早ふり出し

雨ふりて地かたまる名もあらたまるよい風早のふつき萬福

儒者逢雨　腹可良秋人

肱をまげてまくつて走る俄雨傘さす人も其中にあり

屁ひりの弓術　竹杖すがる

ある人遺精を月に六七度づつゆめみて心地あしければあるくすしのすゝめにて熊膽丸日ごとに三たびづつ服すれどしるしなしといふを聞きて　栗山

すゝめられくまのゐ三度まゐれどもまだめぐらぬかいせい七たび

　鴈がさをうれふる人のもとへ　さくらのはね炭

春過ぎてとこよにつきし鴈がさもゝはや藥にあきや來ぬらん

　齒をいたみてうちふしけるにある老女のまめやかに柳のやうじに梅若とかきてくはへよとすゝめければをかしけれどさすがにもだしがたくそのごとくせしにはやいたみのやはらぎたらんな

　どせはしくたづねければ　樋口闕月

梅若とかきし柳のしるしにてげにつかのまはいたみわするゝ

今はたゞぬかんと思ひきり〳〵すなく〳〵露のおく歯かゝへて

病にふしゐける比玉川といふ所より友だちの來てとひければ

四交

ねてゐればおいしいものもあげられずたま〳〵川のお客なれども

世の中しはぶきやみいたうはやりけるにその比世にならびなきすまひに谷風梶之助といふありこの比の風つよければとてみな人谷風といひければ

あけら菅江

水ばなのたれかはせきをせかざらん關はもとよりつよき谷風

としごろそひ侍りけるめのいたくわづらひける折ふし鷄の宵に鳴きければ

白駒

にはとりのそらねにあらぬよひなきは病と福をとつけこうしよう

てん〳〵をうちしあたまも赤本のむかし〳〵となりにける哉

題しらず　柏　筵

生きて居て心の駒をせむるかなのりうりばこと花うりばこと

此歌世にしる者稀なり此集をあめる折から花道のつらねが物がたりをきゝて書きくはへ侍り

いやな物といへる心を　讀人しらず

直になき國の奉行と蠅のみ蚊癩瘡佞人どれもいやなり

此うたある人のいはく秋の道場にすめる音あれのよめるなりと

發斑といふものをやみて　から衣橘洲

顔も手もかのこまだらになり平のうたてやてうどふじ三里まで

歯をなやめる時　蓑庵鬼守

とし比劍弓鎗の術にあそぶといへどもいまだ眞
理を得るとしもなければ　吉田氏

弓断なくやりてみるほど奥ふかしいつあきらむる事やあり劍

百首歌の中に懷舊　如竹

祖父祖母すくみかどんでつぶやくはみなこしかたの物語かな

歌あはせの中に　布留田造

形見こそ今はあだなれなき親のゆづりおかれし貧乏の神

平郡實柿

いにしへの酒友だちをかぞふれば十人のしうは九人ないそん

油煙齋

祖父は山へしばしがほどに身は老いてむかし〳〵のはなし戀しき

臍穴主

前の世に無間の蛭もくはぬ身の此世はかねにせめられにけり

風來山人

かゝる時何とせんりのこま物屋伯樂もなし小づかひもなし

きねや仙女

から猫のみすぢの糸につながれて何の因果にばちあたる身ぞ

玉簾小龜

面影のかはらで酒のつのれかし終には下戸の赤くなるとも

壽角

顏による波の音かは耳もなり齒もこゆるぎのいそぢすぐれば

四方赤良

いたづらに過ぐる月日もおもしろし花見てばかりくらされぬ世は

寄刀述懷

早稻田の翁

さすが又のがれがたなのふるみにはやきばもしろく翁さびたり

わが年もほどとき過ぎぬさらばとてつぺんかけてそりこぼつなり

とし頃のほいとげてまろきかしらになりけるにも好物の味は猶わすれがたくて　へつゝ東作

黒髪をおろし大根のりの道佛のそばや近づきぬらん

かしらおろし侍りて名をあらたむるとて　婆阿

むすぼれし婆阿のすさみの麻糸もうむの二つをはなれやはする

四十には二とせたらざりけるとしかしらおろし侍るとて　菲[illegible][illegible]歩

紅葉さへちりて立田に名をのこす我名のこらじ人もをしまじ

相撲取遁世　腹可良秋人

わけて猶淋しき庵のすまひとりもみや浮世の塵はつかまじ

述懐　紀野暮輔

借錢の山にすむ身のしづけさは二季より外にとふ人もなし　臍穴主

こもりくのこたつに足をふみこみてふとんの山に身はのがれつゝ

山家三味線　面楫似足

なか〳〵に山の奥こそ眞柴垣うき世をとんとのきの松風

青山にかくれし口ずさみに　懶翁

さゝがにの糸のしらべも音高く雲井にひゞく山彦の聲

かしらおろし侍りし時　山岡明阿

百が味噌二百が薪二朱が米一分自慢の年のくれ哉

すみだ川のほとりなるある山寺にてかしらおろし侍りける時ほとゝぎすのなくを聞きて　もとの木あみ

けふからはころり坊主になりひさご人にかゝりて世をわたらばや

萬載狂歌集　巻第十四

雜歌下

題しらず　　讀人しらず

あぶみにも鞍にもならず燒捨てようようなき人のまがりこんじやう

此うたある人のいはく山崎宗鑑がなりと

讀人しらず

何となく人にことばをかけ茶碗おしぬぐひつゝ茶をものませよ

此うたある人のいはく利休居士がなりと

百首歌の中に山家　　讀人しらず

杣の代わりたつる家はあのくたら三百ばかり入りにけるかな

大根太木

田舍興　　花道つらね 五代目市川三升

たのしみは春の櫻に秋の月夫婦中よく三度くふめし

代物のうら見わたせば一もんの新中納言波にたゞよふ

ねつきといふはいかい師宗匠のひろめに發句と
きぬをおこすべきに發句ばかり來りしかば　百　菴

ねつきどのしたからよめばきつねどのほつ句ばかしてきぬはこん〳〵

山家鶴　梅　旭

山里はゆたかな梅のりん和靖人も仙人鶴も千年

春章が俳優のにづらの畫を見て　菊の聲色

あめつちの臺屋がかける花鳥にいざ聲色をそへて見せばや

みづから家の内を掃除し侍りて　萬の千里

われもけふ自身に口をたゝきばきおひげの塵はとりあきもせず

さかもりの席にて　俵の小づち大黒屋庄大

盃をさすがいなにはあくまよりうき世のちりをまづはらひけり

富本豐前大夫が弟子豐みつ豐ぎく豐ぎに豐松と
いへる四人のいらつめの名をたていれて　地口有武
豐みつが淨瑠璃きくも國の花はまゝつ風の音はざゝんざ
春秋音樂　針口いたき
春秋もその時々をゐてんらく花はちいるら月はてゐるら
商人彈琴　竹杖すがる
いとまなみ二十五桁(けた)の玉ごとにねもたかぐとはじく爪おと
題しらず　風來山人
この調子きいてくれねば三味線のちりてつとんとひいてしまふぞ
時計を見て　觀流齋原富
跡へとはかへらぬ時計一分づつきざむこのみを見るも物ずき
四文錢　讀人しらず

別莊にふと蓮見にまかりけるにゆくりなきある
じまうけにれいの醉ひ侍りて　あけら菅江
もてなしは露をたまちの水うまや濁にしまぬさらさはちすば
返し　雪級
にごりにはしまぬ蓮見の御馳走も何がな露を玉のさかづき
酢吸の三聖　中臺翁
子はあまく親仁の口はにがけれど女郎ばかりはするとのみこむ
放蕩なるはかせの壁にかいつけける
三兩の質も仁義も色にかへ師ののたまくにこまる門人
新吉原ふしみ町の茶屋玉屋がもとにてふくろく
壽の畫を見侍りて　へつゝ東作
御存じのあたま勿論このやどはしりの長いもふくの神なり

ある人にながいもをやくそくし置きけるが程へてたよりなければ　　卯雲

やくそくのぬらりくらりとながいもはやうなぎになりぬべらなり

そばをふるまはれけるに　　坂上竹藪

あなにえやうましをとめのよいお子と手をうちたべる深大寺そば

波きり不動の堂のまへなるそば屋にてそばをたうべて　　酒上ふらち

うちよする客にそばやのいとまなみきりし手ぎはのふとうこそあれ

まらうどのあるじまうけし侍りし比四方赤良のもとに申遣しける　　祝阿彌

この時はかならず君をまつの宿ゑうて子の日はとにもかくにも

文月十二日の朝あけがたに雪級あるじの田町の

鹽からを一筒われにくれ竹のよゝのねざさの肴にやせん

とのゐのかはり番に人をおこしてもおきかね侍

りければ目ざましにとてあめおこし米など出し

おかれけるに

かはらんとおこし米でもおきぬ時あめんぼうをやくらはしてみん　五風

茶めしをたきて人をとゞむるとて

なら茶とはあし久保思ひ給ふなよ君をうかしてはなしたきまゝ　樋口闘月

宇治の川邊をゆくにことなう腹のへりければ

むかしはるび今はわが帶のび候夫は梶原これは杉はら

鴨の涼のころ御手洗川の邊に納涼して鯉屋助六

が生簀の鯉を料理させて

こひよしと御手洗川にせし味噌煮けふは生簀もへりにける哉

はつざけに赤ゑひまぎれひらめかす尾ひれやはらをたちの魚うり

ある人のもとにて大盃にて酒たうべて　　算木有政

いたゞくや三合四合七合と段々のぼるふじのさかづき

四方赤良がもとに酒肴をおくるとて　　けい少ならん

酒一つあげはのてうしひら〳〵と君があたりにとんだお肴

題しらず　　へつゝ東作

富貴とはこれを菜漬に米のめし酒もことたる小樽ひと樽

しなのものをめしつかひけるにことに大食なりければ　　もとの木あみ

しなのもの大めしくらふそのはらをはゞき木ならばあんじもやせん

水戸より鹽からを竹の筒にいれて賜はりければ　　藤本由己

しるこもちをひさぎけるに　隅田中汲
尻もちはあしこしつよきいづみまへ人もしるこは安井とぞいふ

酒百藥長　から衣橘洲
百藥の長どうけたる藥酒のんでゆら〳〵ゆらぐ玉の緒

大工酒盛　三疊たゝ見
酒のみて足もよろ〳〵まがりかねさす盃のみつ四つめ錐

さかもりなかばにもちをくへと人のいひければ　青陽
酒のみがこれもちくへとしひられてもみぢしながらたいらげにけり

酒もうつはにより侍るとて茶わんを出しこれにてとありければ
ありあひのちひさく見えし茶碗より盃ばかりよきものはなし

肴賣生醉　酒上ふらち

義經もとがしある身のあたかにて勸進帳をつくり山伏
竹の林よりとらの出づる畫に　ト養
よをこめて竹のふしとや出でつらんわれと時知るとらの一てん
田鼠うづらになりかゝりたる畫に　卯雲
ちょつくわいちい〳〵くわいとなくならん田鼠うづらになりかゝる時
肖柏老人の讃　四方赤良
一日に一巻づつの古今集花のもとにて傳授しやうはく
兩國橋のほとりなる淡雪豆腐をくひて　靜觀房
兩國の橋から富士の山かけてあは雪しろく見えわたるかな
芝きり通し長井町のしるこもちをくひて　讀人しらず
長井町とほくの人もみな知りてなみ〳〵もりの餅のよき哉
中村屋和泉橋出店に安井といへる暖簾をかけて

榮花なるろせいが夢をおこせとのつかひにあはのいひわけぞなき　一文字白根

墨繪松

さら〳〵と書きおろしたるすみの江の外にたぐひもあられ松原　から衣きつ洲

たけくまやくまどる松の一筆に上手の手ぎはみきといはまし

西行法師の畫に

ゆく水にうつる一樹のかげ法師これぞ他生のゑんる上人　頑賢 信州

辨慶の讃

長刀をつきに名高きむさし坊いくさより出ていくさにぞ入る　讀人しらず

猿猴の畫に

木末から猿が三疋三下りそのあひの手はてとててとてと　蛙面房

安宅の畫に

あれはてし頼朝卿の古御所のあたりは今もはたけ山なる
人々ともなひて茶辨當もたせすみだ川木母寺へ
ゆきて[illegible]

茶辨當あつくば水をうめ若の寺とて今もかどわかしゆく

自畫の像に　三千風

女房なし若衆はおかずこしもとゝ思ふかゆみにとゞくまごの手

河太郎の畫に　讀人しらず

世の人のおのれと水におぼれてはとがを汝にあびせるぞうき

兼好法師の像に　もとの木あみ

かきたてゝみぬ世の人をともしびの影とならびの岡のつれ〴〵

蘆生の夢のかたかきたる畫をかりて久しくかへ
さでおきけるをとりにおこしければ

深川の洲崎に鹽濱の出來たる時　讀人しらず

深川は江戸よりちかの浦なれば見にゆくとてもみちのくはなし

歌合の中に松　平郡實柹

にはかなる雨をふせぎしから笠は大松だけやとつてかつぎし

百首歌の中に竹　如竹

竹の子はをしやお汁のみがはりにすつかりときる藪の仲光

歌合の中に　平郡實柹

あとさきへいきや出づらんしづのめがしりはつたてゝふく火吹竹

歌合の中に關

大雪にゆきゝをふさぐしなのぢは是ぞ日本のかんこくの關

かまくらにて賴朝御所の跡を見れば今は畑となりければ　樋口關月

すみだ川こぎゆく舟の名をとはゞ梅若丸といふべかりけり

十二栗圃

見わたせばすみだ川原のうす煙たつた今戸を明けがたの空

あけらかん江

名におはぬ東のはての都鳥しろきは雪とすみだ川哉

淺茅原

輕少ならん

池の名の鏡のいへはふたもみもこれはあさぢが原とこそ見れ

あけら菅江

露をけさかれればあさぢがはら〳〵とちるや鏡が池の水かね

すみだ川のけしきをゑがきてふたまきとし兩岸

一覽と名づけ侍るとて

鶴岡蘆水

兩國のきしによる波よるひるや舟のかよひ路一日わからん

つゝたゝば天にのぼらうふんのばす足高山やふじのねすがた　讀人しらず

おふじさん雲の衣をぬがしやんせ雪のはだへが見たうござんす　樋口關月

東路にふじと名高きお山こそゆききの人のみとれぬはなし　蓑庵鬼守

むかしたれたごに一ぱいくみし鹽をやきてやふじの山となしけん　盤齋法師

矢瀨にて辨慶石を見て

やせ法師辨慶石にせいひくしみこし入道くらべさせばや　輕少ならん

待乳山

よそになびく瓦の煙たつつるつまだ來ぬ人をまつち山姫　古せかつほ

隅田川

萬載狂歌集　巻第十三

雑歌上

歌合の中に暁　　平郡實柹

ねざめしてくびのまはりやうちまたをなづればゆびにあかつきの空

臍穴主

窓の戸をおしあけ方の目はさめて姿は床に横雲の空

歌合の中に山　　布留田造

たかもゝのふじのねぶとは一夜にや雲の上まではれわたるらん

東歩八十五首の中に富士　　知眞

眞門にたけゆき長のきぬをきて雲の帯する富士太郎殿

信海翁

寄煎茶不逢戀　藤本山己

しのぶれど色には出ばなせんじ茶のあはでたつ名や釜の口おし

佐々木梶原先陣あらそひによせて待戀の心をよめと人のいひければ　卯雲

ふんどしがとけ候といふ聲はわれに夜這のふたりあるかも

阿房宮の賦のことばによせて里通ひの心をよめと人のいひければ　志水つばくら

客人は蜀山兀とはげあたま三百餘里を三枚の鬆箍

寄茶摘戀　　　　　　　　　　ちゑの内子

つゝめどもいつかほいろに出でぬるはあだし茶つみの極ぞそり哉

寄汗戀　　　　　　　　　　かくれん坊目隱

かしてやりし汗手拭をかへす時べにつきしより思ひそめてき

濱邊黑人

われからとはぢらふ汗は下にのみもゆる思ひのゆげにやあるらん

寄花火戀　　　　　　　　　から衣橘洲

物思へば川の花火も我身よりぽんと出でたる玉やとぞ見る

寄松餝戀　　　　　　　　　　川長

かはらじと心のたけをしめかざりけふあふことをまつのうれしさ

寄松誓戀　　　　　　　　　　卯雲

姫松の姥となるまでかはらじなわれにふぐりのあらんかぎりは

寄舞樂戀　へつゝ東作

君をわれゐてんらくとも思はざるむかしの身こそごしやうらくなれ

寄樂人戀　濱邊黒人

君ゆゑにけふの試樂ものらくらと還城樂のへびつかふなり

寄大工戀

たてまへに札をいれても落ちぬ君は枕に塵のつもりちがひか

寄土細工戀　一文字白根

いつしかに君が心のうちくもりちぎりしこともうそのかはらけ

寄川越戀　もとの木あみ

九十川くよ〳〵物を思はせてなどあふ事のかた車なる

寄米春戀

ちぎりうすみ待つにこぬかと思ふ間につきしらけたる有明の空

寄孟子戀　　　　　　　　　　　　馬　　　　跡

ほつそりと高いがせいはぜんなりとむかしの人もまうし候

寄山伏戀　　　　　　　　　　から衣橘洲

せめかけてとう／＼いのりふせにけりいざ下紐をときん鈴かけ

寄歌人戀　　　　　　　　　　へつゝ東作

いとはるゝ身はうらめしき鏡山いさといふにもかほのくろぬし

寄儒者戀

あつめつる螢にこがれ雪にきえ思ひにしみの家となる文

寄鍛冶戀　　　　　　　　　　大原久知爲

かはらじとたがひにきたへあひづちの末はふいごのふうふとぞなる

寄節季候戀　　　　　　　　　佐倉はね炭

せつき師走しげき人目のせきぞろをしのびて今宵ござれ／＼や

こゝろにははりもちながらあふときは口にみつある君ぞわびしき

おなじうた合の中に寄芋蟲戀

うらめしな君もわれにやならひけんふわ〳〵としてつれなかりけり

おなじ歌合の中に寄蚕戀

心にはとびたつばかりなげけどもわがくふほども君はかひなき

ある人のいはくこのうた合は長嘯子なりと

寄仁王戀　一文字白根

一應できかずにわうの返事まであともうんともいはぬ君かな

寄達磨戀　紀のつかぬ

手枕(てまくら)にまつ間だるまのうきふしはとちめんぺきとおきあがるかな

寄幽靈戀　樋口關月

よしやすがたきえずはありとも何かせん腰より下のなき身なるもの

君が名もわが名も棒にふるがつほあたりの人の口にかゝりて　讀人しらず

寄鰻鱺戀

かくまでの心さしみをもちがつほさのみは人もつらからしみそ　四方赤良

寄飼鳥戀

あなうなぎいづくの山のいもとせをさかれて後に身をこがすとは　一文字白根

寄虱戀

思ふ戀手をかへ品をかひ鳥の一羽にはこのうちゝにせまりて　藪本醫止成

寄百足戀

かくとだにしのぶ思ひを人しらみこぼるゝものは涙なりけり　筑波根岑依

十五番蟲歌合の中に寄蜂戀

つばきはきしてつれもなき君ながらむかでの足の百夜(もゝよ)かよはん　讀人しらず

きゆるまで思ひいれてもあふ事は猶かた炭のいけるかひなし

寄紙入戀　遊女たが袖

わすれんとかねていのりしかみ入のなどさら〳〵に人の戀しき

寄酒戀　紀定丸

胸はいたみ袖はいけだとなりにけりまたあふ事も涙もろはく

寄鮓戀　卯雲

蓼の葉もちよつとちぎりし一夜鮓ひるは人目のあればつけ〳〵

寄豆腐戀　藤本由己

名にしおふおかべのまくず葛たまりかけて思ひをすり生姜哉

寄菓子戀　卯雲

行平の賞翫ありし松風を屑なりともと思ふひとり寐

寄鰹戀　から衣橘洲

くよ〳〵と戀に心もむすこべやこし巾著のふら〳〵とやむ

寄十露盤戀　　　　　　　　　　物事明輔

龜井算ひく手あまたになりぬれば身をいくつにやわりてあふべき

寄煙草戀　　　　　　　　　　山手白人

こまかけて身をきりきざむ思ひあれどいひ出ん言のはたばこもなし

寄煙草盆戀　　　　　　　　　　へうゝ東作

引寄するたばこぼんなうの犬なれや君があたりをたちもはなれぬ

寄煙管戀

物思へばほそりにけらし雁首の長らうべくもなき命とて

寄灰吹戀　　　　　　　　　　四方あから

灰吹の青かりしより見そめこし心のたけをうちはたかばや

寄火入戀

くみてしれ人をつるべの綱手縄（つなでなは）あはんとすれば引きたがふ身を

寄數珠戀　祝　河　彌

君輪珠數はなれまいにちくりごとにふたりねぶつの數をかさねん

寄碁戀　樋　口　關　月

生死（いきとし）を相碁とちぎる中手（なかて）さへ人目のせきにたちきられつゝ

寄鯨尺戀　小　川　ト　仙

わが戀はくぢらとなりてものさしにつもる思ひのたけを知らせん

寄米俵戀　紀　定　丸

ちらとみし君に思ひをこめ俵（たはら）大黑ならばふみやつけまし

寄摺鉢戀　山　手　白　人

土性の備前すり鉢中のよいつまは木性でさぞ御さんしやう

寄巾著戀　算　木　有　政

よそながら木末の色をみるばかりいつかとこゆのちぎりこめなん

寄鬼燈戀

秦久呂つら

ほゝづきのちぎらでひとりねふきよりいとゞ思ひのたねとこそなれ

加保茶元成

いつのまにか色づきそめしほゝづきを人のちぎらんことをしぞ思ふ

寄鎧戀

樋口關月

わたがみのひきあはせをもいのらまし袖に思ひを忍ぶ草ずり

寄刀戀

由縁齋

こしもとに手をかくるかとつかの間もいもが心につるぎたえせぬ

寄扇戀

大井無作登

秋はてゝ君にあふぎのつてもなしほね折ぞんと人やいふらん

寄釣瓶戀

あふ事のならぬなすびときくもうしみな約束(やくそく)はあだ花にして

寄大根戀　から衣橘洲

うきたびに袖しぼり汁からうじてしのぶ心をねりま大根

さくらん坊

色白のむつちりはだに青葉ならさこそはうれしからみ大根

寄芋戀　關叟

よそへふく風にかぶりをふる畑のいもが心の露もなびかぬ

寄柹戀　恒子

人目をばしのびもあへず色づきて心かよはす御所がきのもと

藤滿丸

枝たれていろにいづればいたづらに思ひのたねとなるやしぶかき

寄柚子戀

萬載狂歌集　卷第十二

戀歌下

寄雷戀　　山手白人

みそめつる人は十九かはたゝかみなり平さまか光源氏か

寄疊戀　　呉竹

なまぬるい野郎疊といはゞいへあの女なら尻にしかれん

寄柱戀　　大竹のむさと

わが戀ははなれ〴〵の二はしら木に竹つぎてそひぶしもなし

寄竹子戀　　讀人しらず

地にあらば君が草履とならばやといのる心のたけの子のかは

寄茄子戀　　讀人しらず

袷にかける女てがらかいたづらにうごくといふはあゝおはづかし

新吉原大びしやのうかれめきさかたがもとにかよび侍りしに折あしくまらうどありとてつれなくかへれといひしかばなさけなきと思ひしが歸る道すがらうかれめの心をくみて

大の鈍金無（蓬萊山人歸橋）

わるきをりかへんなんしのひとことはとめらるゝにもまさる嬉しさ

ある人古かね買の戀といふことをよめといひければ

あけら菅江

袖の上になみだは雨とふるかねを高くかうてはあはぬ夜ぞうき

けるにとかう娘のもてなしければ　　　芦　　葉

するがやのふじな客にも盃のあいさうはよきでんがくや姫

かの娘玉子のふはく〳〵もて來りて酒のめといひ

けれは　　　奥　　政

ちぎりこそあれし板屋のゑにしをばむすびたまごのふはく〳〵の關

又かのむすめふきのたうをやきてすゝめければ　　　晩　　秋

霞にはちゐまさりたる春風やふきのたうにもたゝぬ小娘

ある人の婚禮の夜に雷のしければ　　　栗　　柴

かひぞへが心も空になるかみやこよひ陰陽はつげきの聲

人々女まじりにさぐり題とりて歌よみける時　　　月　夜　釜　主

よるなれどよぎなき會のくらまぎれ探りだいたらうたがはれなん

白壁がゐがける女を見侍りて　　　山　岡　明　河

うたびくにくどけばさすが落髪のなごりゆかしきびんざさら哉

男色　四方赤良

女郎花なまめきたてる前よりもうしろめたしや藤ばかま腰

ひえの山にて掃部卿といふ所化ある兒に心をか

よはしいとむつまじき中なりしを此ちご何事や

らんにて下山させられければ　藤本由己

足引の山におかれぬしだらにてなが〳〵し夜をひとりかもねん

歌舞妓役者山下金作におくる　本阿彌柳夫

本阿彌も高しろ物とめきゝせんこがね作りのたちすがたには

たえず涙の　あけら菅江

そろばんのかけてあはぬもわりなしやたえず涙の玉ちがひして

高田なるするがやといへる茶みせにて田樂くひ

身あがりのまつに思ひたをたきましてにくら椎柴こるばかりなり

ある人新吉原えび屋の遊女えびらのもとにかよ

ふと聞きて　　　　　　　　　　　　　四方赤良

えび屋なるえびらの梅の枝をりて盆と暮とに二度のかけとり

けころばしといへるうかれめやうのものを見て　滋野瑞龍軒

ふちならでせにかはりゆくけころばし二すぢかけて戀ひ渡らなん

新吉原にてひけ四つまへに江戸町のほとりを過

ぎて　　　　　　　　　　　　　　　　葉十

顏はかし手は黑がきの三味せんをてんつるてんのふり袖でひく

題しらず　　　　　　　　　　　　　　早鞆和布刈

おいらんにさうい ひんすよすぎんすよ醉ひなんしたらたゞおきんせん

歌比丘尼　　　　　　　　　　　　　　から衣橘洲

出替戀　古世勝雄

ぬかみそのくさきもあらぬ竹のよのはしたと末をちぎる出かはり　紀定丸

つゝめども色に出かはりする味噌のこき戀なかもいつかあさつき

題しらず　臍穴主

ひとりねにわれはふとんの柏餅かはいといふてさすりてもなし　橘貞風

戀といふやまひはしやくの蟲なれや君にあいたやあひたしとなく

けいせいあさま山を忍がきてこれに狂歌せよと人のこひ侍りければ　藤本由己

夜目遠目けぶりの中にみえさんすむかしはふか田今あさま山

傾城待間夫　もとのもくあみ

藝子忍戀　　黑染こもん

さみせんの音色もそれとしら糸のそまぬ藝子を戀しのび駒　　丹青洞

人目しのぶ藝子の袖のふりあはせころびあふとはこれをいふべき　　朱友達

躍子勸酒

をどり子のあひの手しほにとりざかなちよつとおさへてなげる盃　　橘貞風

裏店二枕

うらにすむ身もさび釘のくされ緣まくらふたつにうちつけた中　　茶屋町末廣

下女夏瘦

面やせし下女が二布は蕎麥切の色にやつれてあらふ夏川　　志月菴素庭

馬上見初戀

はねられん馬の尻目に見そめてもよめ遠乘の笠の内から

無筆戀　濱邊黒人

いかにせん心のたけを一字でもにじくる事のならぬ無筆は

雅貞

かな釘のをればかりだにかきもせば君にうちこむ身とはしらせん

和文

筆にては棒もひかれぬくやしさよ戀の重荷はかつぎながらに

見文恨戀　空二

うらみあれや返した文を三輪の山とはぬしるしの杉原の紙

隔壁聞戀　峯松風

ほとゝぎす鶯よりも聞きたきはこがるゝ壁に耳よりの聲

臨期變約戀　唐衣橘洲

いまさらに雲の下帶ひきしめて月のさはりの空ごとぞうき

いぎたなく目をすり鉢の音聞きておきわかれたる床のなき味噌　　臍穴ぬし

歌合の中に不遇戀

わが戀はひきおひのある代官の胸算用をするごとくなり　　平郡實柿

まち針はたてながらこそくちにけれ身せばの小袖まへあはじとや　　四方赤良

百首歌の中に旅戀

我もせじ留主の間をたしなめといひてわかれし妻ぞ戀しき　　貞德

片思

君がふくほうづきなりの提灯に身をつりがねのかたおもひかな　　未得

そこ心くみてしらんとたちよればはねつるべなるかたおもひかな　　臍穴主

四方赤良

たゞみ算おきてまつ夜はいたづらにあふみ表のうらかたぞうき

逢戀　　未得

だきつきてこよひはわれをしめころせあふにかへんといひし命ぞ

四方赤良

煩惱の犬もありけば朧夜のぼう〳〵眉にあふぞうれしき

別戀　　へつゝ東作

そしてまたおまへいつきなさるの尻あかつきばかりうき物はなし

四方あから

おさらばといひしことばが耳のそこに殘り多さよあかつきの空

歌あはせの中に後朝戀　　布留田造

あひみては布施ないい經にあらなくに何と淚をけさおとすらん

萬載狂歌集　巻第十一

戀歌上

題しらず　　讀人しらず

戀といふそのみなかみをたづぬればばりくそ穴のふたつなりけり

ある人のいはく此うたは一休和尚のうたなりと

歌合の中に初戀　　平郡實柹

種ふせてうゑし茄子(なすび)の二葉より心ひとつにちぎる初(はつ)なり

忍戀　　臍穴主

わが戀は袖やたもとをおしあてゝ忍ぶとすれど腹に出(で)にけり

待戀　　大根太木

まつよはは雪踏(せった)のかねのかねてよりふみかよひけるうらの細道

ある國のかみの壽藏のつかをきづかせ給ひつるを賀し奉りて

へつゝ東作

鶴のはし千とせもみまくほりうゝるうなゐ松江の君がことぶき

人の昇進のいはひにいなだといへる魚をつかはすとて

から衣きつ洲

いなだまでなりあがりたるわかなごの出世はみえた御奉公鰤

喜鵲群翥

茶屋町末廣

一羽二羽三羽さう影松ばやし軒端にきはふよい鳥とび

松に鶴の畫に

松良

松がねをほりて琥珀の出づるまで長きためしの鶴のくちばし

東作かしらおろしける時十德を贈るとて

三井嘉栗

十德は千代のかための文字の關そでもゆたかに通して下され

寄枕繪祝

あけら菅江

床もはやをさまりてよいきみが代はもういく千代といはふ枕繪

髪置を賀して

内匠半四郎

なでそむる髪をおきなとなるまでにさあらば鈴をふれや千歳

何がし八十の賀に

あけら菅江

くめや〳〵醉ふかしらがのことぶきの容もよろ〳〵養老の瀧

何がしの母百一歳の賀に

から衣橘洲

いやがうへになほいやそぢのその餘計たんとならずばちとせでもへよ

賀のうたとて

橘貞風

めづらしや冬瓜の花のそれならで人のよはひも百ひとつとは

かぎりなき御隱居樣にけふよりはひかれまうして千代やへんてつ

寄臺所祝　から衣橘洲

臺所どんとなるは瀧の水いでいる客もたえずとうたり

寄餅祝　よみ人しらず

いくうすかつきぬよはひは千とせふる鶴の子もちにちぎりてぞくふ

寄鎗祝　峯松風

さて長い事かな君がおもちやりゆるがぬ御代の石突にして

寄船饅頭祝　無錢法師

千年の鶴見はおろか萬代も永久橋にちぎるまんぢう

寄碇祝　手柄岡持　喜三二

はんゑいやはんゑいやとて碇綱をうごかぬ御代のためしにぞひく

酒上ふらち　戀川春町

千とせ丸とかぎれる船も碇づなのながきためしに萬代やへん

事を[illegible]　智恵内子

六十(むそ)とせにひとゝせあまるひとつ松これから先(さき)のよはひいく代ぞ

烏　曉

千年と申すはおどけ松の春本卦(ほんけ)がへりを十かへりの花

六十になりけるとし松契多春といふことを　杵　庵

琥(こ)珀(はく)にもなるべき松のやにおやぢねばりくていく春やへん

松久緣　一文字白根

よろづ代をせなかにせたら老松のみどりも久しかれいなるらめ

寄諸祝　塩屋から人

盃をさむる手にも高砂のまづ壽ふくをぞいたゞいてのむ

寄鍋眞木祝　もとのもくあみ

鍋のしりかけどもつきぬすみの江の松の落葉はめでたき木なり

萬載狂歌集　巻第十

賀歌

無一草のおくにかきつけける　　志道軒

とゝんとんとんと逢坂關が原うちをさめたるよろづ代のこゑ

歌合の中に祝　　布留田造

先以て御機嫌のよき君が代をおそれながらも祝ふめでたさ

寄民祝　　未得

活計にはらのふくるゝ世にあへば天下たいへをこく土萬民

めでた百首歌の中に　　四方赤良

あいた口戸ざさぬ御代のめでたさをおほめ申すもはゞかりの關

四方赤良の父自得翁六十一の賀に寄松祝といふ

藤田あかしといへる狂言師をいたみて　から衣橘洲

やるまいぞやるまい物をたれかあるとらへてくれよ死出の山人

ある人十あまり七とせの忌に寄蕎麥懷舊といふ事を　古せ勝雄

思ひ出づる涙に袖をしぼり汁しるしの石の苔のむし蕎麥

無常　由縁齋

つひにゆく道とはかねてなり平のなりひらのとてけふもくらしつ

百首歌の中に　如竹

立法をつかふ樣こそなかりけれとかくしないでかなはざる身は

人生變化の心を　山岡元隣

あすか川とえたりかしこく世をなげく涙もつひにあだし野の露

妻うせし心くらゝに寶生はひとりむしやくしや物思ふらん　卯雲

文麗子をいたみて

君まさでたれが筆をやたのむべきわがかなしさは絹にもかゝれず

大根太木が一周忌に寄柏餅懐舊といふことをひ

とびとよみ侍りけるに　四方赤良

ひきうすのひとまはりにもなりにけり過ぎし昔のなつかしは餅

おなじ日門に虚無僧のきたりしをよびいれて尺

八をふかせけると聞きて　蛙面房

虚空までひゞく手向やこも僧の南無あみ笠でふける一曲

妻のいたみに　へつゝ東作

吹くからに山の神さへしなぬれば無常の風を嵐といふらん

老いぬればおなじことこそいはれけれおぢゝいとしやおばゝいとしや

來　示

あなきたな今はみなみのひがしれて西より外ににげ所なし

古梅園道惠

燈明の油煙はおほしゆきて又みだの御國のすみつくりせん

年ごろ圍碁をこのみけるが心地しぬべくおぼえければ

加藤道喜

碁であらば思案工夫もあるべきが死ぬる道には手一つもなし

母におくれけるをさなきものを見侍りて

もとのもくあみ

とゝの目はなきあかせどもはゞきゞの消ゆるあはよもしらぬうなゐ子

柳生くらの介みまかりけるとき

藤本由己

世に一手人のかたれぬ所あり無常の風の太刀さきをみよ

寶生九郎が妻をうしなひしと聞きて

樋口關月

んに見えたり

兄由縁齋貞柳が書きおける置土產といへる集の
はじめに　紀海音

しるしらぬ人を狂歌に笑はせしその返報にないてたまはれ

辭世　柏筵

つひにゆく道とはかねて芝ゐびのばからせ給へ極樂のます

柏筵がおきつき所芝のみてらにあればなるべし

柏筵をいたみて　讀人しらず

しばらくととめてみたれどつがもないかはいのものや死での山道

このうたある人のいはく晉子其角がなりと

辭世　慶紀逸

この年にはじめてお日にかゝるとはみだにむかひて申しわけなし

萬載狂歌集　巻第九

哀傷歌

辭世　　近松門左衛門

それ辭世さるほどさてもそののちにのこる櫻が花しにほはゞ

北窓翁一蝶

まぎらはすうき世のわざのいろどりもありとや月にうす墨の空

八百屋半兵衛

はる〴〵と濱松風にもまれきて涙にしづむざゞんざの聲

おちよ

いにしへをすてばや義理も思ふまじくちてもきえぬ名こそをしけれ

このうた青梅つはりざかりといへる淨瑠理のほ

畑野あぜ道

旅づかれやすめてねたりおき巨燵うすきふとんをかけ川の宿

あづまに侍りける比すみだ川のほとりまつざき
といふところにて四方赤良あけらかんこう須原
の迂平などと酒のみて

業寂僧都

ふるさとのみやこ鳥をもうちわすれまつさきにゑふすみだ諸白

荒井

はしもとや濱名納豆今きれてあら井てぞほすつほとこをけと

江尻

さよ風におなかひえてやうばごぜの江じりかよえて浦へこそゆけ

馬食町旅宿　　四方赤良

夢むすぶ淺草まくら柳ごり花のお江戸に旅寐せしかな

いせの國渡會卓彦のもとにて　　へつゝ東作

今ぞしるおこぎが浦のさくら鯛たびかさなれどあかぬ色とは

浦賀にて

西東うら賀は船の關ずまふうみをまはしのしめくゝりよき

旅宿巨燵　　竹杖爲輕森羅萬象

あすはとく旅寐のやどをおきごたつ道の三里もふみのばさばや

のなりけり　浮瓶庵養阿

旅ごろもぼろの出るまで長居してうば口のはにかよりける哉

からさきの松みにまかりける比賤が家に立ちより
て蕎麥たうべければ　秦久呂面

やすらひて松のしたぢもからさきのそらはつめたくひえの山盛

あづまに侍りし比元日に雜煮にむかひて故郷を
思ひやり侍りて　樋口關月

ふるさともけふのふとばしかみならし今やくふらん餅好の妻

東歩八十五首の中に三條　知眞

あさ酒にまだゑひもせず京をいでてふむあし一二三條の橋

庄野

わせおくてみな燒米の年貢をば何としやう野と物あんじ顔

言にかたりつたへたる

母のくまがへのかたへまかりける留主に　　柏　筵

宰領(さいりやう)はさだめて世話をやき豆腐わらひあたりがちやうど晝飯(ひるめし)

廣澤の池にて　　内匠半四郎

廣澤と人はいへども名にもにずさて又みての池のせまさは

高砂の浦にて

相生(あひおひ)の松の夫婦のうみ手がらみよみどり子はきしの姫松

大井川をわたるとて　　拙堂法師

今こえし小夜の中山それよりも大井川こそ命なりけれ

かひの國左右口といふ所のみてらに日數とゞまり侍りしにこのあたりの人朝なく／＼ほろといふものたうべけるがむぎの粉にてゝうじ侍りしも

美濃と遠江の國ざかひなるね物がたりにやどり
て　紀　廼

まづうれし近江表(おもて)にみのぶとんねものがたりのあひやどりして

かしまにまうでし舟の中にてぬす人ありとてひ
とびとさわぎければ　田　阿

舟のうちによしぬす人はあなるとも楫(かぢ)より外にとる物はなし

くまののあま田川といふ所を過ぎて　太田茂弘

なめてみるくま野の口のあまだ川みつの御山のしづくなるらん

安宅の關にて　讀人しらず

山ぶしはかひふいてこそうせにけれたれおひかけてあびらうんけん

これは源よしつね山ぶしすがたにてみちのくに
へくだりけるとき強力(がうりき)のよめるとなんあひの狂

浮島かはらふ路銀もつきはてゝ三國一のふじいうな旅

藤澤にて　　　　　　　　　　　　　　　　　栗　山

旅人をまつにかゝりて藤澤のゆぎやうずるせぬ出女のかほ

十三夜に藤澤につきてあるこいへにていもをく

ひて　　　　　　　　　　　　　　　　　もとのもくあみ

芋をくひ屁をひるならぬよるの旅雲間の月をすかしてぞみる

九月九日ばかりに金澤を過ぐるとて道のべに菊

のさかりなるを折りて駕籠にさすとて

四手駕籠なほさかてませよはひませ千代いき杖の菊の山道

八橋の跡見んと思ひしが駕籠のうちにねぶりて

行きすぎければ　　　　　　　　　　　　樋　口　關　月

八はしを見んと思へど高いびきかきつばたにて跡になり平

萬載狂歌集　巻第八

羇旅歌

百首歌の中に旅　　猶影

行きくれぬ宿かし給へ是非ともになさけをかけて旅の衣手(ころもで)

天龍川にて雨ふりければ　　梅仙法師

天龍やしやぢくの雨のふる時はせんどらまごらともに迷惑(めいわく)

さやの中山にて　　卯雲

としをへて又こゆべしと思ひきや御用なりけりさやの中山

鹽の山にて雨にあひて　　山岡明阿

鹽の山さしたる事もなかりけりからいめをして見るばかりなり

するがのくにはらの宿にて　　東平秩作

難波にかへるべき日も近づきぬるに酔月楼にて

人々うまのはなむけしければ

田中文起 竹本住太夫

牛込のおもき御恩をせなにおひもうおなごりとぬるゝ片袖

りかのかはぶとんもたせつゝ人々見おくるとて

出來り山がこに尻敷しきてとく〳〵とあるに所

がらをかしかりければ　浮瓠菴卷阿

毛蒲團を名殘をしかと思ひしに山中までは送り狼

神無月の比加賀の國にまかりける人をおくるとて　輕少ならん

ふるさとへかへる錦の袖さへもにほふ小春の梅が加賀紋

めしつかふものの名は三ぶ六といへるがしなの

の國へかへりけるときに　ちゑの内子

そろばんの玉々おきしさぶ六がくにへかへるはにくの十八

三井嘉栗みやこにかへりける時　へつゝ東作

富士きよみながめは駕籠の右ひだり長者のたびのはきもいためず

る[illegible]　四方赤良

のぼりては又きく事もかたな鍛冶らい國としを待つぞ久しき

卯月の比へつゝ東作がたびだちける時梅櫻松の
ゑをおくるとて

最明寺(さいみやうじ)ときならぬ雪の鉢の木をやせたるうまのはなむけとみよ

もとのもくあみちゑの内子夫婦づれにて江の島
がまくらの名所見にまかりける時　へつゝ東作

見てかへれ道べたながら筆柿のうみ山かけてうつしゑのしま

旅まくら鎌くらかけて夫婦づれ手をひきが谷鶴がおかさま

三島の宿にとゞまり侍りし比ある人狼の皮ぶと
ん尻敷にとておくりしが歸路の折から曉ちかく
たちいで玉くしげはこねの山をこえゆくに跡よ

萬載狂歌集　巻第七

離別歌

百首歌の中に別　　如竹

朝なタな窓の戸障子おのれさへたがひちがひにたちてわかるゝ

渡邊某にわかれけるときに　　樋口關月

しばらくも別れとなれば片腕をきらるゝやうに思ふわたなべ

三井長年がみやこへかへるうまのはなむけすとて　　あけら菅江

たび衣きさまの店はふるさとにかへるにしきも仕入いくなら

竹本住太夫難波にかへるなごりに新うす雪物語

刀鍛冶の段をかたるを聞きてよみてつかはしけ

願いしちくどく御禮は申さねどことしは安樂こく町の暮

節分　藤のまん丸

鬼は外福は内へといり豆に花さく春をまつ年のくれ

大晦日したしきくすしのもとより屠蘇散をおくりければ　濱虎坊雛子

元三の酒にひたすら屠蘇散をくれるはいしやのそん思邈かな

歌合の中に除夜　布留田造

いつか我借錢こひに身をなして師走のはてにはたりありかん

由緣齋

はらひにもならぬ物からせはしなや大つごもりの入相のかね

ねぎり置きしさしもの質を命にてあはれ今年のきはもすぐめり

佛師歳暮　へつゝ東作

種々さつた佛も年をとり佛師かる地藏顏なすゑんま顏

午の年のくれに　好原眞圖伎

老いらくの里に近づくやせ馬の年のしりべたむちくれにけり

としのくれに百人一首によつて人々歌よみけるとき　唐衣橘洲

このくれはいつの年よりうかりけるふる借錢の山おろしして

五十六になりける年のくれに　平秩東作

七八もこの月ぎりに年くれておくにもたらぬもとゆひの霜

としのくれに石町月三師のもとにかりにゐ侍りし時

行く年のひばり毛月毛おひくらし人間萬事馬子の境界
蛙面房

まつ春の宵一刻の千金をすこしかりたき年のくれかな
婆阿

借錢の山路はよしや鳥の音をまねてもゆかぬ年の關かな
讀人しらず

びんぼふのほうが次第に長くなりふりまはされぬ年のくれ哉
峯松風

弓とりのわれもつばさのあるならばしばし飛びたき年のくれ哉
四方赤良

ねがはくばとほり手形をうちわすれ跡へかへらん年のお關所
不自由物なし

犬百人一首の中に

かりがねときくさへぞつとしはすしまいやよなしても八百のとり

歳暮　讀人しらず

とれば又とるほどそんのゆく年をくれる〳〵と思ふおろかさ

あけら菅江

借金も今はつゝむにつゝまれずやぶれかぶれのふんどしの暮

卯雲

身代ははづかしながらむら薄かりちらしてぞ年のくれぬる

隣海法師

嚢中はおのづからこれ無一物手をひろげたる年の暮かな

から衣橘洲

ゆく年のかげはいかほど鳥がなくあづまからげのあしおもげなり

蓬菴鬼守

の小袖かりて著侍るとて　楚堂

綿入のあつき御恩をきた澤はあたゝかいめに青梅じま哉

餅花香　紀廼

もち花の火に落ち散りて匂へるはよべの鼠のはみあらしかも

川びたり餅　柏筵

紙衣きて川びたりもちしてやるはわが身ながらもぬれ坊主哉

歌合の中に鷹狩　布留田造

これたかのうき世にへをやきれつらんそりて引込むを野の山里

庭中早梅　嚢庵鬼守

我庭の梅のさかりをそのまゝに春までとくな雪のしら封

しはすの末に鴈の鳥をかへとてひとのもて來り

けるをかはでかへすとて　朱樂菅江

ころ〳〵とこかして雪の上みればおもしろだへに道のつきうす

このうた河部川破風屋(はふや)なにがしのいへの屏風にありとなん

目くら佐野氏なる家に一夜とまり侍りしにあくるあした大雪なりければ　　貸本人和流

鉢の木のその時よりも多からめ佐野の庵(いほり)につもるしら雪

雪中白梅　　澤邊帆足

伯母さまが來たと兄きも笑ひ顏御馳走ぶりに雪をはく梅

雪の日友のもとより河豚くひにこよといひこしければ　　から衣橘洲

命こそ鵝毛に似たれなんのそのいざ鰒(ふぐ)くひにゆきのふるまひ

北澤といふ所にてにはかに寒かりければ青梅島(あをめじま)

じやうはりの鏡のやうな氷みちすべると見るめはぢをかくはな

初雪　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　卯雲

のち〳〵は橇でゆきゝをしなのぢもまだ初雪はうす井峠じや

青樓雪　　　　　　　　　　　　　　　　　　あけら菅江

ふる雪もよしや夜みせのすがゝきをひく糸道のあとはうづまじ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　王子詣のきつね

ながめてはかよひくるわの雪の日もよしはら駕籠のよしや世の中

貧家雪　　　　　　　　　　　　　　　　　　鹿津部眞顔

しら雪のふる借錢の年つもりはらはで家も横にねにけり

童の雪まろげするを見侍りて　　　　　　　　から衣きつ洲

さむさにもやはかまくべきわらんべがまろがす雪の力くらべは

雪の上に米つきの臼こかすかたかきたる屛風　讀人しらず

顔見せのよるの太鼓をよそに聞きあくるわびしきかつらきぬ髪　　朱得

寒草

山人は冬ぞひもじさまさりけんあえ物ぐさもかれぬと思へば　　平郡實㭬

歌合の中に千鳥

眞砂地に道ある鳥の足かたはおのが名におふ千字文かや　　布留田造

歌合の中に水鳥

とぎたてゝ持ちたる鶩のつるぎ羽にうちおとさるな鴨の青首　　から衣橘洲

冬鳥

地をはしる翼なりけり寒中の見まひにたれもかもの進物　　如竹

百首歌の中に霰

木々の葉にまれにとまるは是ぞこの嚙みあてし貝の玉霰かな　　一之

冬の朝具したる從者のころび侍りければ

世の中は時雨のやどり宗祇でもめでたい事のふり來れかし

水仙のいけ花を見侍りて　　志月菴素庭

そりかへり又もこの樣にいけらりよか葉もおもしろき床の水仙

反橋落葉　　へつゝ東作

住吉の橋のそつたにかんな月かんなから〳〵ふる木のはかな

谷中落葉　　油杜氏ねり方

はら〳〵といろはの茶屋へちりぬるは風や上野のやまけふこえし

歌合の中に霜　　平郡實柹

きめあらき松の木ばだは霜の後猶ひどにこそあらはれにけれ

さかい町ふきや町二座の顏見せを見侍りて　　卯雲

見わたせば二丁まちかね人に人さかいちやうちんふきやちやうちん

かほみせの夜やまひにふして　　柏筵

萬載狂歌集　巻第六

冬歌

百首歌の中に初冬　雄長老

いつはりのある世なりけり神無月貧乏神は身をもはなれぬ

火桶　卯雲

さびしさにかゝへていとまやりにくし火桶は老の妾同前

短日

冬の日に春の日あしをくらぶればもつたいなくもちんばなりけり

百首歌の中に時雨　讀人しらず

龍田姫せうかちけにやなりぬらんしよつとはしぐれしよつとしぐるゝ

めでた百首歌の中に　四方赤良

時は今さるのしりとや紅葉ばのまつかいあんじてりまさるらん

屁百首歌の中に　もとのもくあみ

くふたびに尻をもみぢのあか屁かけばのこらず色づきにけり

放屁百首歌の中に　四方赤良

おはしたの龍田が尻をもみぢ葉のうすくこくへにさらす赤はぢ

九月盡　山手白人

秋もはやけふ一日にせんじつめ空も澁茶の色に寒けし

蝶と見る花の弟の曾我菊は霜にもまけぬ力づよなり

翫大菊　四方赤良

大菊をめづる狂歌ははな紙の小菊を折りてかくもはづかし

吉原菊　秦玖呂面

すがゝきの中にもつくりかざりたるおいらん菊の花の吉原

化物百首歌の中に　物ごとの明輔

見るうちにふり袖垣をうちこえて七八尺の大かぶろ菊

歌合の中に紅葉　平郡實柿

おく山の紅葉と見てや猿まろが尻をも鹿のふみわけてゆく

高雄山の紅葉を見侍りて　木端

くらべてはまことに雉とたかをやまけおとされたるよその紅葉は

海晏寺にて夕ぐれに紅葉を見侍りて　獲庵鬼守

秋さむき里のきぬたとどちらが先へうちはじむらん

鳴……　山手白人

百八のたまくならす數かくは朝な夕なの鳴のかんきん

鶉あまたかひ置きける人のいかゞしけんみな落ちたると聞て　馬蹄

落ちたるはみなかひやうのふかくさにうづらなくなる道の寂しさ

歌合の中に菊　平郡實柿

菊水をくみし彭祖が長いきもまことにはあらじうその八百

菊を根びきにしてゆくを見て　未得

ほりてゆくこがねぬきの菊の花いづくの家のたかねなるらん

菊のうたの中に　臍穴主

袖垣を横にこえたるしら菊は夜ばひ星とぞあやまたれぬる

かり金もりの字に見えてわたるかなたが證文をかけて來つらん

鴈連山　濱邊黒人

天津空琴柱にたてる初鴈を十三峠に見るはめづらし

初鮭　卯雲

初鮭の一尺きりて二尺なしさしづめこれを君にさゝげん

新酒

痔のごとじなさけ所のいたみよりはしりといへる船のつきしは

新酒早來　濱邊黒人

とぶ鳥の鳥羽を出るよおりひてよく波をはしりて下り諸白

歌合の中に擣衣　布留田造

衣うつ槌おきわすれすりこ木をとる手に思ひ出づる旅人

題しらず　嚢庵鬼守

はだ寒やこのうらがれにほうろくもはやすみ取も月になつかし

おなじく田村を　四方赤良

あれをみよふしぎやなぐひおほ空にひとたびはなつ千々の月影

十三夜醉月樓にて二人の白拍子の三すぢのいと

ひきけるを聞きてよめるそのふたりの名は千代

とせとなんいひける

十日あまりみすぢの糸も長月のけふの月見は千代にやちとせ

秋野遊　地口有武

さあさわげさはけの螢秋たけて月より外にひかりてもなし　大坂道かね女

秋の野のそよ〳〵風にさそはれてはぎもあらはやねみだるゝ露

鴈　樋口關月

十三夜月　栗山

つく〴〵と見ればどこやらみか月のをさな顔ある十三夜かな

藤本由己

月はひとつ影はふたつにみつ亭主客は七つで十三夜かな

四方赤良

十三でばつかりはれし空われに月のさはりの雲もかゝらず

十三夜から衣橘洲のもとにて謠十三番を題にて

月の歌よみける時屋島を　へつゝ東作

十五夜としころひきあふ十三夜月かげきよに雲のみほのや

おなじく三井寺を

青樓にのほりつめたる客ならめ今宵の月にかねつかふとは

おなじく高砂を

疊指見月　もとのもくあみ

かげ見ればあたらしおもて月今宵はりも疊へさす閨の床

月前風　四方赤良

醉ざめの心もつきの緣さきに風のかけたるひとへ物かな

月前眼鏡　出來秋万作

月かげをうつすめがねの玉うさぎひたひの波にかけてこそみれ

月前碁　峯松風

月しろに雲のくろ石うちはれて空一めんの盤のさやけさ

月前三味線

さみせんのねられぬまゝに月見ればほどなく鐘も八つ乳なりけり

月前述懐　四方赤良

世の中はいつも月夜に米の飯さてまたまうしかねのほしさよ

月をめづる夜のつもりてや茶屋のかゝもつひに高田のばゝとなるらん

四方赤良高田の馬場にて十三夜より十七夜まで

五夜の月見しと聞きて　　卯　・雲

團子夜中新月の色五つざしすこしこげたは曇りなりけり

智恵内子

名も高田はら一ぱいの月を見ておうれしいかのあつめ所や

生醉見月　　卯　雲

ひとつ過ぎふたつ過ぎたる生醉は三つばかりにや月も見るらん

山手月　　から衣橘洲

月見酒下戸と上戸の顔みれば青山もあり赤坂もあり

浦月　　四方赤良

芝浦の漁人も網をうちわすれ月にはいとふ鰯くも哉

居合腰でいまや〳〵とこい口のはなれを見たきたちまちの月

十八夜月

今少しいまちと〳〵とまたするは思はせぶりか二九の月かげ

志月菴素庭

とつくりとろくに居侍の月かげは天もく酒やひつかけて見ん

梅人

十九夜月

はながつをふして待つ夜の蕎麥切は桂男にのびくさつたか

燕斜

夜ごとに月のまとゐして

月見むとわがかよひぢの酒もりはよひ〳〵ごとに内もねかさず

志月菴素庭

かくまでもなきことの葉はくらやみのはぢを月夜にさらしなじやまで

高保

高田の馬場に月見侍りて

お月さまいくつと問へば十三にふたつまさりてお名の高さよ

十五夜雨ふりければ　ちゑのないし

名月の雲間にひかる君まさでさえぬ雨夜の物がたり哉

十五夜月蝕しければ　燕斜

あかるまぬ柿とやいはむほん丸の月もしぶはんかゝる今宵は

梅人

しよく臺に手のとゞかねばいかにせんこぐらく見ゆるしん月の色

十六夜月　四方赤良

夕霧のまよひもいまだ晴れやらでいでし藤屋のいざよひの月

十七夜月　あけら菅江

ぬきはなす雲間の影はものゝふの腰にさしたるたち待の月

燕斜

きんこならかこひてみたき十題にひんと出たる月の面影　あけら菅江

八月十三夜月

そめ出來ぬこんやの月をながむれば秋のもなかはたしかあさつて　志月菴素庭

十四夜月

くる〳〵とひんまろめたらよからうにまだちとたらであすを待宵　濱邊黑人

十五夜月

くひたらぬうはさもきかず唐大和たつたひとつのもち月の影　山手白人

桂男は下戸か上戸かさかづきの影とは見えてもち月の空　筑波根岑依

名月の夜を晝にしてあそばゞやとりかへこうと鳥のなくまで　蘭水

萬載狂歌集　卷第五

秋歌下

月　貞德

月ゆゑにいとど此世にゐたきかな土の中では見えじと思へば

めでた百首歌の中に　四方赤良

かくばかりめでたく見ゆる世の中をうらやましくやのぞく月影

三日月　蓑庵鬼守

天の戸もよるのしまりのあればこそぴんと空鎖おろすみか月

橘貞風

空色の羅紗の袋にをさまりし薙刀なりの月ぞさやけき

はづき十一日の夜月をながめて　燕斜

見わたせばかねもおあしもなかりけり米櫃までもあきの夕暮

水ばなに風の吹きしく秋の野はひげにも露の玉ぞちりける

百酒狂歌の中に蟲　　曉月房

さかづきはめぐりてゆくをきり〴〵す誰にさせとか鳴きあかすらん

百首歌の中に　　猪影

垣壁にとりつく蟲のあはれさよいかにしにたうもなく聲のして

四方赤良

秋の夜の長きにはらのさびしさはたゞぐう〳〵と蟲のねぞする

題しらず　　通小紋息人（市川升藏）

夏過ぎて三番さう〳〵翁草さあらば鈴蟲まゐらせんさい

質屋聞鹿　　朝寐晝起

露のおくしち草わけてなく鹿はながす小袖のつまや戀ふらん

貧家三夕の歌の中に　　紀野暮輔

しらず心たれをかうらむ朝がほはたどるりこんのうるほへる露

星野氏かね女

かあいらしまだ夜ふかきに朝顔のあけなば咲かん身づくろひして

相撲　　四方赤良

秋の野の錦のまはしすまひ草所せきわき小むすびの露

すまひ人谷風梶之助によみてつかはしける

かたやぐら巖石おとしさかおとし關は日本一のたに風

荒海といふすまひによみておくる　　芦葉

思ふ國へきたは越後のあら海に波のうらわをてうどあげしほ

露　　未得

見ごとにて手にはとられず白露のきえやすきこそ玉にきずなれ

歌合の中に　　平郡實柹

四方赤良

萩見んとむれつゝ來るに藍さびのかすりの衣著ぬ人ぞなき

穢多村を過ぎ侍りしに萩のさかりなれば　山手白人

露よりも心を置きて通るなりこのひとむらは皮はぎの花

女郎花　四方赤良

をみなへし口もさが野にたつた今僧正さんが落ちなさんした

虱百首歌の中に　もとのもくあみ

吹く風に虱こぼれてをみなへし落ちにきとても人にたかるな

王子のいなりへまで侍りし道にて薄を見て　魚躍

しら露の玉を穂末にむすべるは秋のきつねの尾花とぞみる

唐詩のことばにて朝がほの歌よめと人のいひければ　四方赤良

盆踊待夕　六誹園立路

夕暮をまつ坂こえて遠くからやつとせい〳〵來てをどるなり

中元　坂上竹藪

七夕にかしかんばんのふる物をけふ中元のきかへたるかな

新吉原の燈籠を見て

見物はゑいとうろうの夕ぐれをまち合の辻にけたりふみ月

萩　山手白人

はすはなる軒端の萩の秋風に碁をうつ蟬の耳やかしまし

歌合の中に萩　平郡實柿

餅ならば袖にも入れて萩の花都へはよきみやげのよ原

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて　あけら菅江

よせぎれと見ゆるお寺の錦かなどこもかしこもはぎだらけにて

いつの世にふたつの星となるこ瓜うまきなかごの名にはたちけん　智恵内子

七夕素麵

箱入のおり姫なれど此ゆふべ天の川原へ下りさうめん　栗山

七夕の夜殘暑のつよかりければ

ふんどしも腹もさらせじ例あればこよひはだかでねるも手向ぞ　峯松風

盆前によみ侍りける

ぢり〳〵とこの身につまるひきがへるぬり盆まへのあぶらあせ哉　四方赤良

盂蘭盆

かけ乞のみるめかくはなうるさくて人に忍ぶのうら盆もがな　あけら菅江

文月十三日かけ乞の來りてせちにせめ侍りければ

鹽鯖のからき浮世のせめ太鼓うつやてん〳〵舞の一さし

とめ場でもとめ所なきあつさかな夏と秋とはいかゞ仕切場

七夕　藤本由己

年に一度おあひなされてぬる數はいくつときかまほし合の空　讀人しらず

質屋七夕

盆前にたれかはかねをかさゝぎのはした錢でもほし合の空　智惠内子

七夕琴

しちぐらにむしほしあひのかし小袖天の河原に末はながさん　鹿津部眞顔

七夕酒

立琴をねかしてひざにいだきよせたなばたつめをかけてひこ星　馬蹄

七夕瓜

けん酒にかちては指をおり姫のつもる思ひをうちはらふらし　から衣橘洲

萬載狂歌集　卷第四

秋歌上

立秋　未得

立ちあへずはや吹きそむる秋風はこらへ袋のをやとけぬらん

讀人しらず

山賤(やまがつ)のとぼその草に露きけてけさはゑらふく秋の初風

無錢法師

やう〳〵と今朝しも秋のたつか弓ひきなかへしそもとのあつさに

初秋郭公のなくを聞きて　大根太木

ほとゝぎす八千八聲あまりてやけふ文月(ふみづき)にふみかけて鳴く

芝居殘暑　卯雲

みな月つごもりの日かけこひの來てせめ侍りければ　　　あけら菅江

たくはへもみな月はてゝ一文もけふはなごしのはらへだにせず

納涼　玉雁小縋

われも又涼しさのまゝ事とはんすみだ河原に夏はありやと

兩國橋にてすゞみ船を見て　へつゝ東作

ながれゆく蠟燭の金がほしいなあ一夜三百兩ごくの船

芝浦納涼

竈元のしばの浦邊はすゞしくて火をたくなはのくるしみもなし

狂言師納涼　物部のうとき

山ひとつあなたの峯の木の間よりまかり出でたる月の涼しさ

三又納涼　物部早秋

すゞしさはまたもなか洲の浪の花ひろよりよるや盛りなるらん

佃島御祓　くさやの師鯵

丹誠(たんせい)をぬきん出船(でぶね)にみそぎして夏もつく田の海の中臣(なかとみ)

野夕立　へつゝ東作

男なら出て見よ雷(かみ)にいなびかり横にとぶ火の野邊の夕立

駒込にて夕立を　藤本由己

駒(こま)込(ごめ)や風の手綱の一通りかけを乗りたる夕立の空

鐺をどり畫きたる團扇に

あつさゆゑつかれつかるゝ鐺をどりさつと夕立ふりやれおふりやれ

團扇　雲樂齋

もとねにもならのものとてしぶ〳〵に手をうちは賣りかせぐ商(あきな)ひ

百首歌の中に泉　雄長老

よるごとに式部がそゝやあらふらんむすぶいづみの水のくさゝは

振廻水　蛙面房

出しおく振(ふる)廻(まひ)水(みづ)の心ざしあつき日なれば掬(く)みてこそのめ

放屁百首歌の中に蚊遣火　　四方赤良

しづが屋のかやりをふすべこく時はぶゝとなくかのよりもつかれず

題しらず　　烏山石燕

蚊と蚤にゆうべも肌をせゝられておるどはまだら目はふたがれず

雲鯉

古あはせよろひにせばや夕ぐれのときの聲あげせめてくる蚊に

歌合の中に氷室　　平郡實柿

とりちがへうちやくだかん氷室守おきなさびたる雪のかしらを

四方赤良

去年から氣をはりつめし氷室守今夜は心とけ〴〵とねん

夕立　　子子孫彦

薄墨のゑならぬ雲のあしばやにゆきゝの人もかける夕立

隣水鷄　　隣海法師

たのまるゝ隣の留主の柴の戸をたゝくを聞けば又くひななり

夏月　　山手白人

さかづきを月よりさきにかたぶけてまだ醉ひながらあくる一樽

放屁百首歌の中に瞿麥　　四方赤良

今朝みればいつしかよべをひりおきていとどねぐさき床夏の花

歌合の中に螢　　平郡實柹

螢火も夜うちをするか夏草の青野が原にみだれ入るなり

卯雲

螢火を窓にあつめて物よむは川邊の草のくされ儒者かも

臍穴主

夜軍に屁のかゞり火ふりたてゝおひつまくりつ螢合戰

四方赤良

百敷のみはしのもとにたち花をやしきのうちにけふみつる哉

百首歌の中に五月雨　雄長老

五月雨に黴びてなりともところ〴〵兀のひたひに毛がはえよかし

瘊五月雨　かくれん坊目隱

五月雨に瘊も水のひた〳〵と庭はいけずき空はする墨

尾張の國鎌島木村氏にて五月雨の比に　へつゝ東作

かり初る秋さへみえて鎌しまや苗のはごとにかゝる五月雨

梅干滿筵　紺屋麻手

庭もせに匂ふむしろのすみもちてはこぶそばからこほれ梅干

人のもとより茄子胡瓜をおくられければ　輕少ならん

世にはまだすくなきふりのおくり物かたじけなすのかごのめづらし

鍾馗のぼり　卯雲

木綿より一段ひくき紙のぼりこれや鍾馗のおひけなるらん

柏餅　山手白人

なら坂やこの手にもちし柏もちうらおもてよりさすりてぞくふ

夕つかた人のもとへかしはもちをおくるとて　なる子

夕月夜さすればこれもつれ〴〵のおなぐさみにはなれかしは餅

かたびらを人におくるとて　やのくらのいろくす

一疋をふたつにたちて君がためかたひらをこそまゐらするなれ

何がしの庭に花たちばなのさかりなるを見侍りしにもとは禁庭の右のつかさのたねなるよしをきゝて　好原萬圖伎

木ぶりよくおひたち花の顔みればさすが雲井のおとしだねなり

いづれまけいづれかつほと郭公ともにはつねの高うきこゆる　卯雲

鰹

歌合の中に早苗　平郡實柿

かまくらの頼朝殿にどこかにてかつほもよほど大あたまなり

またぐらやいとゞぬま〳〵ぬまつかんふけだの早苗とれる早乙女

菖蒲　末得

頼政にあらぬもけふは引取りてあやめを軒の妻に見るかな

ある人花しやうぶをおくるとてさらば言葉の花

しやうぶせんときこえければ　面樹似足

一番にさきがけられて花菖蒲わが太刀先もさみだれの比

五月五日祝儀の使者に對して　山手白人

立關へあがりかぶとの使者一騎あやめのねざし長い口上

ほとゝぎす須磨の浦ではなけれどもなれをまつ風村雨の空　平郡實柹

歌合の中に

ほとゝぎずなきつる方をながむればたゞあきれたるつらぞのこれる　馬蹄

郭公さつきはおのが時相場聲をはかりにかけてなくなり

友どちけんをうちける時郭公をきゝて　無錢法師

ふけゆけば月もすむゆの中空にりやんともきかぬはつ郭公

三浦にて時鳥をきゝて　くさやの師鰺

十分にかけたか船のほとゝぎす三浦の風に聲の落ち來る

水無月郭公　腮長馬貫

ほとゝぎすまちし心に汲みかへて井もみな月のしほがれし聲

ほとゝぎす鰹の優劣を人のとひ侍りし時　から衣橘洲

けさははや夏もきつねが藻の花をかぶつて化のかは衣がへ　　牡丹　へつゝ東作

けふこずばあすは色香もふりぬべし花の日數もはつ〱か草　　新樹交竹　子子孫彦

たけのうちの流儀と見ゆる夏こだちはゞかりながらうち合ひてみん　　卯花　山手白人

どろ〱と庭見の客は卯の花の雪おろしかと主や思はん　　虱百首歌の中に　もとのもくあみ

山賤がしらみかきほのうの花はうつろふとてやこほれかゝれる　　郭公　栗梢

ほとゝぎすたづねくたびれ山道ですり火うちうつあひに一聲　　から衣橘洲

萬載狂歌集　巻第三

夏歌

百酒狂歌の中に首夏　　曉月房

春くれしきのふの酒のさめがしらけふはうづきになりにける哉

百首歌の中に更衣　　安井了忠

わび人の質こそたえねだしいれにかろきおもきや衣がへなる

歌合の中に　　平郡實柹 池田正式一名

花の香をしみてけふも著かへぬをあはせもたぬと人やみるらん

山手白人

花染（はなぞめ）の衣のわたをひきぬいて急なしごとを四月朔日（ついたち）

化物百首歌の中に　　物事明輔

よひのはじめよりなくをきゝて　あけら菅江

ほとゝぎす春をかけてか鶯のかひこのうちにかはれてぞなく

紫の帽子のまよりかんざしであたまをきみがかきつばたかな

躑躅　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山手白人

やどかしてくれなる里の岩つゝじ火ともし比の旅ぞ物うき

歌合の中に藤　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　布留田造

松の木のまたにかゝるは紫に染めした帯のさがり藤かな

秋葉寺より三めぐりの山のほとりの藤を見て　　　　　　　栗山

秋葉寺三尺坊のさがり藤ぶらり〳〵とみめぐりの花

放屁百首歌の中の欵冬　　　　　　　　　　　　　　　　　四方赤良

七へ八へへをこき井手の山吹のみのひとつだに出ぬぞきよけれ

籬に菊の苗をうゝるとて　　　　　　　　　　　　　　　　目黒栗餅

心あてにならばやうゑんきくの花秋のこがねの色をたのみて

ある人の籬のうちにかひおけるほとゝぎすのや

百首歌の中に呼子鳥　　布留田造

あちこちの手次もいらぬ傳授をば錢のさせたる呼子鳥かな

別莊にまらうどを迎へけるにさかづきあまたたびめぐりて人々醉ごこちにおもひ〳〵のたはぶれをなして遊びける折しも窓ちかくきゞすのなくをきゝて　　おはりや゙ふい女

みさかなに何よけん〳〵けん酒をのみにきゞすの妻したふ聲

百首歌の中に菫　　如竹

花ざかり過ぐるををしむ少年か岸のひたひにすみれみゆるは

歌合の中に杜若　　布留田造

かゆがりのみかはにあれば八橋のつめでばり〳〵かきつばた哉　　雲樂齋

春の夜のおぼろ月夜と世の中のばくちうたぬにしくものはなし

春宵一刻あたへ千金といふ事を　一之

春の日のくれかぬるこそ道理なれ月しろもののあたへ千金

春雨　臍穴主

商賣もおのが業とてうれしげに朝からかさをはる雨の比

百首歌の中に春駒　如竹

春駒のきんのあたりも泥まみれあさる玉江のぬまつきにけり

やよひのなかば洲崎なる望汰欄にまかりけると
き人々庭より海づらの汐のひがたにおりたちて
貝ひろはんとていざといひけれどはらいたうへ
りければ　あけら菅江

やれ〳〵としほのひるめしいそぐなり青うなばらのへるにまかせて

物とへばおいらは知らぬとつい通るといひければ　　樵　山

よそに見し花の梢もつい通る跡なる鴈の身こそやすけれ　　とゝめ女

燕

つばくらの軒端につちをくはへ来てうち見るたびに出る子寶　　あけら菅江

おのが巣に土をぬる夜のあけぬ間はつばくらやみに羽をやうつばり　　四方赤良

雲雀

舞ひ雲雀籠の鳥屋が手に落ちてかふ直も高くあがりこそすれ　　山手白人

春月

春の夜はあんのごとくにかすみつゝ月の影さへおぼろまんぢう

世の中百首歌の中に　　荒木田守武

盃のうかむ趣向にまかせたる狂歌は何の曲水もなし　軽少ならん

筆をさへ手にとりあへず盃のよりてたゞよふ岸は玉ぎし　あけら菅江

さかづきもさかなも水にながるゝはほろ〳〵ゑひ和九年母のかは

寄花出替　烏　暁

去年まで櫻といひしお花どの花いろ繻子の帯も出來たの　酒上熟寐

手水とるたらひひさくのえにしあらばめぐりあはゞやお花どのにも

歸雁　山手白人

玉章のやはらかみなくかた田から春は歸雁の時を期すなり

春の日わらはべのうたふ歌をきくに跡なる鴈に

木の本の鼾(いびき)に花やちらすらん樽を枕の春の夢介

吉原花　四方赤良

吉原の夜見せをはるの夕ぐれは入相(いりあひ)の鐘に花やさくらん　もとの木あみ

中の町(ちやう)鹽がまざくらうつし植ゑてそばをとほるの大臣もあり

御殿山にて　ちゑの内子

御殿山高麗(かうらい)芝(しば)の青だたみ花のふすまをひく霞かな

惜花　四方赤良

咲く花のかへる根付の琥珀(こはく)にもなりて木かげの塵をすはばや

待桃花　から衣橘洲

まつほどの遠いは花のかざり雛十二ひとへや七重八重桃

曲水宴　四方赤良

花よりも葛團子をや思ふらん吉野の奥にあさる山賤　もとのもくあみ

樺櫻

いく本もさくやうなぎのかばざくら匂ふはなにはたれもこがるゝ　二朱判吉兵衛

春の日江戸見坂にて

八重一重みごとにさいた櫻田はまことに花の江戸見坂かな　長義

奉公人見花

御屋敷の奉公人はいとまあれや飛鳥の花にけふもくらしつ　燕子

奥家老ひらきなほりて花の供幕より外へ女中ちらさず　から衣橘洲

卜者見花

見る花にまづ雨風のけはなしとさすや春日のうら〳〵や算

花のもとに樽を枕にねたる人を見て　坡柳

萬載狂歌集　卷第二

春歌下

花　　　　　　　　から衣橘洲

見た所瓜をふたつにさくら花ようにはの雪峯のしら雲

　　　　　　　　　　漁産

しら雲かなにぞと人のとふならばこたへてわらへ花のくちびる

　　　　　　　　　　未得

嵐こそあいさうなけれちる花の跡にぎやかすみねのしら雲

化物百首歌の中に　　物事明輔

花の雲天狗(てんぐ)櫻(さくら)とあらはれて空からどつと笑ふ山かぜ

百首歌の中に櫻　　貞德

はる風にもはや頭巾もいらぬ比はなのあたりをよきてふくめん

きさらぎのはじめ雪ふりける日豆腐にやまのいもすりかけたるをくひ侍るとて　あけら菅江

山かげにつもる豆腐の淡雪も春のものとて腹にたまらず

初午近

はつ午はむつきのうちにやゝちかしもはや幟(のぼり)のちをつけて見ん

初午のうたよみ得ざりければ　浦邊千網

初午の歌の出來ぬは何のばちたゝく太鼓のおのがどんから

西行忌　鹿津部眞顏

みな月の雪にはあらできさらぎのもちにきえたる富士見西行

三保女

うまうまと世をのがれけりきさらぎのもちにかけたる佐藤憲清(さとうのりきよ)

[illegible]春頭巾　かべの中塗

野遊

田樂（でんがく）の木の芽に腹もはるの野や霞の帶をゆるめてぞくふ　紀のたらんど

吸ひつけるきせるはたれとしらぬ火のつくしがりする春の野遊び　石部金吉

若草

春の野にあそぶよめ菜や小娘の後からはしりつくしたんぽゝ　鬼窟採瘤

のどけしな富士の高根の煙よりすそ野一ぱいもゆる若草　藤本由己

土筆

こまぐヽとかきわけゆけば春の野に夏毛の筆のつくぐヽしみゆ

百首歌の中に早蕨　猶賴

やがてまた人の手にこそなはれなんおのがこぶしを出す早蕨（さわらび）

花がめにいけたる梅椿を　卜養

やり梅をこだちのつばきうけとめて花の命は生きてこそみれ

柳　栗梢

寶引の繩ならなくに春風をすつとこせいといなす青柳

志月菴素庭

黒髪のみだれ柳も春の日は眉をつくりてさてもゆつたり

けづりかけの柳　もとの木あみ

春ながくけづりかけたる青柳をみどりにせんとはらふうなる子

奴紙鳶　星屋光次

奴だこやりもちの木の方よりもきれて落ちたる二合半坂

廿日正月　もとの木あみ

よりあひてこそり〳〵と寶引をひくや鼠の廿日正月

山家梅　　もとの木あみ

わびずみはとりちらかしておく山になげやり梅の枝のをり垣

山手白人のもとへまゐりけるに常陸より移し侍りし梅のよく根つきたるよしを聞きて　　へつゝ東作

常陸より根こじて植ゑし梅なればよくつくば山はやましげ山

返し　　山手白人

梅のうたこのもかのもと思ふまにはやよみ出す當座とう作

ある人のもとに梅の花見にまかりけるがうなぎを手づからやきて酒すゝめければ　　あけら菅江

目の前で手づからさくやこのはなに匂ふうなぎの梅がかばやき

六十四歳の春梅の花を見て　　杵菴

我年も八々六十四方の春さかり久しき梅花心易

春寒きゆきはいやぢやとみな口ににくがる風の花ぞうち散る

この歌ある人のいはく正女がなり

百首歌の中に殘雪　如竹

かた岡や草はもえぎの小紋にて地白にのこる雪のむらぎえ

梅　藤本由己

春雨はお先へふれさやり梅を折りてもちやり匂ひかき鑓

百首歌の中に　猶影

さきがけの花は大きな鑓梅の枝に薬むしやはおくればせなる

歌合の中に　布留田造

紅梅と名によばれぬるおはしたのほゝ先にこそかはしられけれ

隣梅　へつゝ東作

枝ひくき隣の梅は板屏のあなうつくしとのぞきこそすれ

子(ね)の日する野邊に小松の大臣は今も賢者(けんしや)のためしにぞ引く

あけら菅江

けふはまた引手(ひくて)あまたの姫小松たれとねの日の春ののべ紙

鶯　紀定丸

鶯も聲はるの日の長しゆすにほうほけ經をくり返し鳴く

餌すり鉢はらふ鶯ひと聲をわれらが耳へはやくおまはし

百首歌の中に若菜　雄長老

うりに來る程をしとへばわがそのの鶯菜とてねこそ高けれ

七種の日爪をとるとて　松屋てつ女

ぬきすつる袋たびらこ芹なづなけふこそ野邊につめやとらなん

春のはじめ水口の宿を過ぎけるとき風はなのふりければ　讀人しらず

小むすめのはねつくを見て　四方赤良

はごの子のひとこにふたこ見わたせばよめ御にいつかならん娘子

草菴むすびけるとし萬歳のことぶきけるを聞きて　もとのもくあみ

萬歳にほめたてられてはづかしき草のいほりの柱數かな

海邊萬歳　浦邊千網

萬歳がうたふことばも眞砂にてつきぬや君がとくわかの浦

鳥追　石部金吉

さみせんのあいにほういの一聲はいづくの誰を呼子とり追

歌合の中に霞　布留田造（和州郡山 池田正式）

はげ山もかすみそめぬる春の日にきんかあたまは猶ぞかゞやく

子日　四方赤良

へつゝ東作

波の上も子の日の野邊ににたり舟ひかばやともに小松しめなは

小鍋のみそうづ

臣は水君もろともに御座船の湊に風をまつかざりせり

藪中椿

聲々に御代はめでたの松かざりうたふからろの神送り船

鍛冶初夢　　隣鶴

ことしより拍子なほらん天からのめぐみをえたる鍛冶が初夢

扇賣　　奥政

春に今朝あふぎ〲とよびこみて松と竹との枝かはしませ

みづから畫ける羽子のこのうへに　　細井翁

さかさまにうてばのほれどすむ空にたまりもあへず落つるこきの子

年のはじめ百人一首によせて人々歌よみけるなかに　　から衣橘洲

まづひらくいせの太輔がはつ暦けふ九重も花のお江戸も

年のはじめに　　臍穴主

今朝ははやひらく扇の天地金ひかりもきよき年玉の春

ひめはじめ　　讀人しらず

ひめはじめ暦家の說は何なりとすべて女の所作をいふなり

此うた延寶三年のいせごよみに見えたり

芝浦早春　　濱邊黑人

海の景よいとや申す春駒の齒にまたたらぬわが芝の浦

船松飾　　川井物梁

風の追手入來る舟をまつかざりうらしろ〴〵と春の曙

萬載狂歌集　巻第一

春歌上

春たちける日よめる　　貞徳

さほ姫のすそ吹き返しやはらかなけしきをそゝと見する春風

さほ姫のわらひかけつゝ山のはをあらはす方に春や立つらん　　あけら菅江

はるのはじめに　　四方赤良

くれ竹の世の人なみに松たてゝやぶれ障子を春は來にけり

寅のとし春のはじめに　　へつゝ東作

東風吹かば今年も首をふる法師はりこのとらの春を迎へて

何がしつねに、歡樂となく哀情となく、かたちとかげとの如くものせしかば、こゝにもかしこにも見きゝせしうたども、いにしへ今の差別なく、かの宇治大なごんの物がたり書い給ひしにひとしう、筆架にふでをおかざりければ、いつしか歌はじもゝちにぞあまれりける。さはいへ世に落書とかいふたぐひの歌は、ひたすらはぶきてこの集にのせず。げにやつきせぬはまのまさご、そのはま川にすなどりすなる、あみのめでたうさぶらひけるとて、萬載きやうかしふとなづく。これ江戸まへのひらめのほし、いくよの霜をかさねざらめや。天明みつのとしはるの日の、なが〲とえらび終れるになんありける。

朱樂菅江

たはれ歌はちはやぶる神代よりはじまるにもあらず、ひとつとや人の代よりはじまるとしもあらず、ほと〳〵手まりうたにひとしく、ひいふう三河まざいの口つきにかよひて、はらのかはより〳〵に口すさび、かみのつるをり〳〵にいひいだせるなり。そも〳〵このみち、大目にみろく十年よりして、まちやらこのましばしもなくぞひろまりける。しかりしよりこのかた、あまたのすき人、みそひともじのみそ吸物にちよつと獨活(うど)めの口がしこく、これみやぎ野のはぎのはし、あれ三輪山の杉のはし、一本のはしを二本にひきさき、三本四本とかぞへたつれば、かの柱の數よりもしげしといへども、いへ〳〵にのこれる集のみにして、世の中のうたあまねくえらべるたぐひはあらざりけらし。されば八すみのえびすぐうともいはず、いさめのつゞみどんともいはぬ、かしこき御代にあひて、なにかなにはの行風とかいふが、古今夷曲、後撰夷曲の二つの集をえらぶ。こゝに四方のあからなん、行風があとをしたふとにはあらねど、花見に幕をはるのあした、月見に障子はあきのゆふべ、折にふれたる出傍題を、みづからのも人のをも、物のはしにかいつけおけるを、

雨がふれどもかみくちず、風が吹いてもふきちらず、日はてるともほしみせにいでず、むしはくふとも反古にならず。かく舌づつみうちをはりぬれば、これからそろ〳〵まちやらこの、この〳〵するゑにもよみつたへ、かたりつたへ、あそこゝからきゝてがまるるは、かひてがまるるは、まるるは〳〵、まるらざらめやも。さくらあめあきらかなる賓引の、なはもひとふたみつのとし、はるのはじめのうらゝかなる、四方赤良しるす。

とくわかにまんざいしふとは、きみもさかえてます〳〵ごきげん、あいきやうありけるあらたまの、としとるはじめにふでとりて、李少君（りせうくん）がたまの句々をかうべにのせ、あやんがたちをはくやのきしんがかたなの腰折（こしを）れにいたるまで、ゆづりはをくちにあぢはひ、五えふのまつを手にもちろん、よろづのたからたからかに、世にきこえたるくさ〴〵の、言のはかきあつめずといふ事なし。一本のはしらは一花ひらけ、二本のはしらは二月、三月三本の柱はさんぶくのなつ、四本のはしらは新秋の天、五本のはしらは梧桐のつゆ、六本のはしらはむつのはな、七本の柱はなごりををしみ、八本のはしらはやま川をこえ、九本のはしらは九相をかなしみ、十本の柱は十かへりをいはひ、十一本十二本の柱は十一十二のふたつもじ、うしのつのもじごするもじ、十三本十四本の柱は十三なゝつなにごとによらず、十四まろ〳〵とり〴〵のうた、十五本の柱は三五の十八短歌の句々、旋頭をり句廻文の歌、十六本の柱はいさよふ花の月を觀じ、十七本のはしらはたちまち神祇の道となれり。あはせて七百あまりの歌、十七の卷柱、かの三神のまもり神、えいやつとおつたてたれば、

古今夷曲集 終

戀歌のなかに

住吉のまつとはすれどあふ事の遠里をのが身を恨みても

寄露無常

風渡る草葉にやどす露の身の消えずはありとも幾程の世ぞ

維摩經に須彌入芥子中といふ文の心を

露のぼる稻葉の末に色とめて秋は田面の月のゆふ暮

元祿五年壬申正月吉日

高津汚道士
生白庵行風

世に匂ふ日影もしるし天地（あめつち）のさらにひらくる花の春かな

金龍寺にて花のちるをみてよみ侍りし

入相の鐘よりさきもちりぬめり花やあだなる世をいさむらん

瞿麥

かぞいろをとふ人あらば朝夕の露と答へよなでしこの花

八月十五夜

星合（ほしあひ）のつらき別れを更におもふ月の今夜（こよひ）の明け方の空

大和に侍りし頃としの暮に雪の降りければよみ
はべりし

榊葉に雪のしらゆふかく山の神代おほゆる年の暮かな

旅行

朝なゆふな露になれ行く武藏野の秋のはてしや霜の下くさ

のわらはにもよほされて、此度夷曲の品をわかち侍るに、猶和歌をも書集めよとなれど、難波津安積山のふた歌をさへ心ひとつにさだめやらで、人のさかしおろかなるをいかが言はんといひはなつにもやまず、しひて望めれば、心ざしをむなしうせじとて、やつがれが綴りしをこれかれ書きのべ侍り。なか〳〵いはし商人のよききぬ著たるたぐひとも、千鳥の鶴の毛衣かと、我さへかたはらいたき物から、やんごとなきおほんかた、ことには道の長者なりし前内府通村公など、和歌なりと感じ仰せけるにぞまかせ侍る。抑歌のさまいひしれるとにはあらずとのみ。

承應乙未元日

年月をかぞふるに冬の日春にこえ春また冬にたてる事いくそとせなり今日たつ春のみさらぬにすべらぎの世をしろしめしての春も今日ぞ始めなるをおもひてよみはべりし

由己百首三首　太閤記八首　澤庵諸詞題歌二首
竹齋雙紙三首　宗増兩度百首廿三首　同源氏巻題歌十二首
前狂歌集卅四首　仁勢物語十二首　雲居往生要歌十七首
貞徳百首二十首　鷹築波集一首　玄康百首十七首
京童雙紙一首　未得吾吟集六十四首　獨笑雙紙一首
黑谷上人傳一首

已上三十四部
惣歌數千五十餘首
作者數二百四十一人
此外鹿島明神御詠有

春秋の移りかはるは世の常ながら、はからず大内山の花をよそに見なし、ふりぬる高津宮の月にむかひても、昔をしのぶ心もなく、いたづらにいく年々をか送りむかへし。かゝるを里

鹽田氏友知三首　山本氏是急二首

紀州宗朋八首

住所不知入安卅二首

讀人不知八十八首

鹿島御歌一首

右内出所古書目錄

舊事本紀一首　伊勢家集二首　山家集一首

盛衰記一首　山門百首二首　東鑑一首

沙石集一首　法華直談七首　撰擇直談二首

法然五十首敎化歌二首　道元伊呂波歌十九首　夢窓法語歌九首

最明寺百首五首　一休水鑑五首　信長記二首

御指問答一首　雄長老百首廿六首　入安百首卅二首

尼崎住僧 白曲 二首　池田住松井氏 宗舟 一首

參州　井上氏 旨治 一首

相州　小田原岩手氏 宗也 七首

武州 江戸住

芳賀氏 治住 一首　德元 十首　牛井氏 卜養 七首　高嶋氏 玄札 一首

未得 六十三首

下總　椎名氏 安繼 一首

江州 海津庄　小荒路住龍泉住 來爲 八首

播州 姬路住

岡氏 一幸 五首　幸田氏 正舍 一首

防州　正成 七首

長州 萩住

和泉堺

連歌師 宗訊 一首
玉手氏 貞直 一首
正法寺 正成安 三首
同上 宗珀 一首
良忠 一首
岩井氏 正長 三首
千氏 宗易 一首
少隣 一首
大津住高橋氏 爲盛 一首
松井氏 宗吟 一首
岩井氏 教二 六首

攝州大阪幷所々

御菓子所、山城掾貞因 四首
淨久寺 一圃 十首
道仲 一首
澤田氏 玄貞 一首
樹木氏 宣相 三首
白江氏 白云 一首
梶山氏 保友 廿四首
宇野氏 淨治 七首
桑山氏 道僖 一首
掾ヶ庵 言當 三首
平山氏 方救 三首
杉本氏 玄室 一首
二笑 二首
富永氏 燕石 一首
黄檗會下 道明 八首
三宅氏 獨友 一首
赤池氏 三折 六首
松山氏 玖也 一首
加納氏 智元 六首
伊勢村氏 次良 一首
大津 如貞 一首
大善寺 智短 一首
尸齋 休甫 八首
自彰庵 正繼 二首
若林氏 昌長 一首
玖也 道寛 三首
塚口 安明 三首
松江氏 近吉 十一首

福　安一首　長　好一首　松永氏 貞　德五十二首　安原氏 貞　室四首
北村氏 季　吟二首　松江氏 重　頼三首　永　明一首　泉　齋一首
祇園住 春　丸一首　賀茂住僧 南　歌二首　伏見住栗田氏 立　康十七首　淀住佐川田氏 昌　俊一首
八幡山瀧本坊 昭　乘一首　同上實成坊 信　海廿四首　山崎 宗　鑑一首　土山氏 元　行一首

大和

法隆寺 歌　慶二首　箸尾住不動院 頼　智五首　同所地藏院 光　知二首　同所井上氏 勝　可二首
箸尾住中川氏 正　之一首　片岡住松村氏 定　行二首　長樂住伊藤氏 夏　虫二首　田原本住西井氏 行　好一首
下田村住僧 葦　葉一首

河内

壷井住僧 元　安八首　通法寺 長　尊一首　白木住柴田氏 古　生一首　春日住田中氏 弘　重七首
壷井住鹽野氏 義　綱二首　同岸野氏 唯　正二首　柏原住三田氏 淨　久八首　弓削住眞壁氏 三　政二首
弓削住吉村氏 種　好二首　松原住小野氏 宜　齋一首　同所同氏 由　貞一首　同暮松氏 高　壽一首

松島開山法心上人一首　一休和尚十一首　澤菴和尚八首

雲居和尚十七首　雄長老三十二首　永原寺比丘一糸一首

寒山寺瑞南和尚一首

淨土宗

法然上人三首　天性寺白譽上人一首　蓮生法師一首

法藏院願信法師一首　楞嚴寺正愚法師一首　遠里下野弘誓法師一首

本願寺

蓮如上人一首

當法華宗

日蓮上人一首　權大僧都日與一首　敦賀日能上人一首

山城京幷所々

順阿一首　本圀坊算砂一首　藪内氏理西二首　元理一首

蜷川宗祇法師一首　智蘊法師一首　天滿森法橋由己三首

僧天台宗

前大僧正慈圓二首　前大僧正尊應一首　僧正慈惠一首

權大僧都心敬一首　定法寺僧正公助一首　西行上人四首

曉月四首

眞言宗

弘法大師三首　高野山權大僧都賴慶一首　高野山權大僧都光宥二首

同山木食應其上人一首

念佛行者

空也上人一首　遊行曉阿上人一首

佛心宗

天龍開山夢窓國師六首　建長開山隆覺大禪師一首　永平開山道元和尚二十一首

小倉 參議源忠興一首

肥後 侍從從四位源光尚一首

地下

猿丸太夫一首

内藤氏 右衛尉藤原武員一首

小濱氏 民部少輔嘉隆十二首

女房

伊勢二首

宮川尼一首

僧官

細河 二位法印玄旨十五首

法眼紹巴一首

宇和島 少將藤原秀宗一首

姫路 從四位源忠次一首

淡路守宗增三十五首

櫻井氏 中務丞基佐一首

梶原氏 平次左衛門尉景高一首

和泉式部一首

大坂 如風尼一首

德善院 印法玄以一首

朝倉 宗順法師一首

越前 左衛門督藤原義景一首

鎌倉 正五位相摸守平時頼五首

南部氏 遠江守源經行一首

小堀氏 遠江守一政二首

安養尼一首

和州 夏虫妻一首

東山 長嘯子四首

牡丹花二首

山科殿 大納言藤原朝臣言總 一首　庭田殿 正二位權中納言源朝臣重通 一首
京極 權中納言藤原朝臣定家 二首　土佐一條殿 權中納言藤原朝臣兼定 一首
東坊城殿 權中納言菅原朝臣盛長 一首　水無瀨殿 中納言藤原朝臣氏成 一首
六條殿 參議源朝臣有純 一首

非參議

唐橋殿 正二位菅原在通 一首　五辻殿 左兵衛佐正三位源爲仲 一首

雲客

庭田殿 中將源重秀朝臣 二首　同 中將源純朝臣 三首　富小路殿 中務大丞從五位秀直 一首
薄殿 左衛門佐從五位橘諸光 一首　竹内殿 源俊治 一首

武家

太閤秀吉公 一首　安土 内大臣信長公 二首　贈太政大臣尊氏公 一首
安藝 中納言大江輝元 一首　仙臺 中納言藤原政宗 一首　長府 參議大江秀元 一首

作者之目録

六欲のあかを拂へと釋迦無二の五かいはうこそ忝なけれ

三寶

一心に二世を思はゞ三寶の四種を受け得て五欲忘れよ

法界體性智の心を　　　讀人しらず

父母にかりてぞきたる皮衣破れて後はもとの塊

空は貌月日はまなこ風は息山野海川我身なりけり

南無といふそのふた文字に花咲きてあみだ佛とみはなりにけり

布袋畫の讃に　澤庵和尚

この袋あけて見たれば何もなし何もないこそ何もありけれ

常不輕品の心をよめる　雲居和尚

比丘はたゞ萬事はいらず常不輕菩薩の行ぞ殊勝ならまし

題しらず

西方の本來空に往生し無量壽佛とならん目出度き

無我の心をよめる　三哲

我といふそのえせものを捨てゝこそ釋迦と阿彌陀の跡もつぐなれ

題しらず

苦を樂に爲替へよとて釋迦によろり世に出で給ふ事ぞうれしき

持戒　行風

念佛は野にも山にも申しおけ犬も鼠も喰はぬものなり　弘重

聞えてはにんにく慈悲の理に目に橡ほどな涙こぼるゝ　貞因

隨喜功徳品の心を

法華經と鳴く鶯のこゑ迄も耳の功德に聞くぞたふとき　宣相

題しらず

浮世ぞと思ひきつたる尺八を吹きならすこそ生佛なれ　智元

極樂にくふほどあれば他の物をむさぼらぬこそ生佛なれ　法然上人

有がたや障りのおほき女人をば彌陀ひとりこそ助けましませ　蓮如上人

いろはの歌の中に　道元法師

十ぶんにいたりて見れば何もなし佛といひて疵を附けけり

題しらず

得道は有りけるものを隣なる祖父がさげた火打袋に

萬法一心の心を　智元

一乘も二乘も同じのり汁の齋と非時との替りばかりよ

有佛法有世法といふ謠の詞を題にてよめる　澤庵和尚

佛法と世法は人の身と心一つかけてもたゝぬ物なり

借用の地水火風返辨申今月今日といふ前書にて

よめるうた　一休和尚

かりおきし五つの物を四つかへし本來空に今ぞおもむく

成所作智の心を　空也上人

いろは歌の中に　道元和尚

明々と三五夜半の一月をあまねくわかつ千江の水

本來意を問ふとてよみて遣し侍りける　智蘊法師

直なるもゆがめる川も川は川佛も堂も同じ木のきれ

返し　一休和尚

直なるもゆがめる川も川は川佛も下駄も同じ木のきれ

題しらず　讀人しらず

座禪する衾の下のやせ虱くふと思ふも障りなりけり

雲居和尚

物毎に執著せざる心こそ無相無念の無住なりけれ

達磨の畫讃に　藤原光廣卿

西來意我だにしらぬ達磨殿ましして他人に問ふは僻こと

西向(にしむき)にせなかをくふと觀ずれば東しらみに夜は明けにけり　讀人しらず

あら樂(らく)や虛(こ)空(くう)を家と住みなして心にかゝる造(ざう)作(さく)もなし　一休和尙

たそにたそたそたそ〳〵にたそたそたそにたそたそにたそとて何も無き哉　一休和尙

眠れる布袋の畫の讚に

手を伸べてゆるりとぬるか布袋どの袋のうちに何もなければ　比丘一糸

題しらず

今ははや後(ご)世(せ)の勤めもせざりけり阿(あ)吽(うん)の二字のあるに任せて　弘法大師

水鑑の中に

萬法をみる人ごとの喉(のど)かわき思はて水を一口にのむ　一休和尙

なき跡のしるしに石がなるならば五輪の代に茶(ちや)臼(うす)きれかし

題しらず　　讀人しらず

我戀は障子のひきて嶺の松火灯袋にうぐひすの聲

道元和尚

湊にはけさ鉢袋猫の皮花のさかりに大太刀の鞘

達磨の繪に　　一休和尚

悟りぬるきやつめが身とて何かあるへんてつもなき骸骨かな

水鏡の中に

うそをつき地獄に落つるものならばなきこと作る釋迦いかゞせん

おのれさへあつけ拂はぬ不動めが惡魔降伏無用なりけり

題しらず　　讀人しらず

尺八の聲のあるじを尋ぬれば地水火風の四大なりけり

夢窓國師

空海は虚空の定をいさしらで心せまくも穴へいるかな

かゝりければ大師にや有りけん香衣の僧忽然と出できましての返し

空海は虚空の定に入るものを心せまくも穴と見るかな

水鑑の中に毒藥反して藥となれば罪の重きはかへりて佛とやならんと書きてよめる　一休和尚

作り置く罪の須彌程あるなれば閻魔の帳につけ所なし

鎌倉追罰の物を請けて出でたゝれける時餞別に詠みて遣しける　夢窓國師

餞別に何をがなとはおもへども本來空の一物もなし

返し　源尊氏

一物もなきをたまはる心こそ本來くうの法味なりけれ

白骨名號を書きて其讃に　　曉阿上人

人間のをはりを見れば白骨の肉をはなるゝ南無阿彌陀佛

婆子燒庵の意如何といふ句の心を　　夢窓國師

娑婆でこそ男女の差別あれ骨となりては變らざりけり

即心即佛の心を　　道元和尚

一心の門開くれば法界の草木國土ほとけなりけり

利劍にて皆截りつくしみる時は萬象森羅古佛なりけり

自づから求めず捨てずさし置かず自由自在はおのが三昧

本來意をよめる　　夢窓國師

山賤が白木の合子そのまゝにうるし附けねばはげ色もなし

弘法大師入定の年經て後或僧高野に詣でて御廟のわたりにてよめる歌

經といふ其字に五時の糸はへておりいだす布は四教八教

佛心宗の寺にて菓子を出してこれに狂歌とあるとき　智元

出來たるこのみのもとを觀ずればしやうじ離れし柘榴つぶ哉

煩惱卽菩提生死卽涅槃の心を　良恕法親王

煩なうの體も菩提の證據には澁柹を見よあまぼしとなる

有空不二の心を　平時賴朝臣

ありのみとなしといふ名は變れどもくふに二つの味ひはなし

題しらず　讀人しらず

山里の折かけ垣のからす瓜うむとはすれどくふ人もなし

初發心時便成正覺といふ經文の心を　讀人しらず

須彌山に腰打ちかけて一天を笠にきれども耳は隱れず

戀路よりまつすぐに入る涅槃こそ實に煩惱は卽菩提なれ

雲居和尙

儒釋道みつのをしへの別ならず善に善報惡に惡はう

名利是非貧富生死を忘れなば僧俗ともに卽心卽佛

妙にして神あるものは心かな天地にわたり微塵にも入る

變化所執の理を

澤庵和尙

一心に念に起せばさま〴〵に變化のすがたうくるなりけり

題しらず

弘法大師

我胸にふる盜人を持ちながら菩提の種に心ゆるすな

胎藏界の心を

行風

我胸に法の智水をたゝへなば瞋恚の炎もえもあがらじ

經

讀人しらず

生ひては必ず死ぬる習ひとしつても知らぬや富るは色にふけり酒宴遊興にてあたら月日を暮し貧しきは朝夕むざとむさぼるのみならば來世とやらんにてたとひ兵庫のものといふとも彼閻魔王殿が御免あるまじきをおもへと童部の方へ遣し侍りし　行風

後の世も知らでうつかりへうたんとなりさがるべき身を顧みよ

妙觀察智の心をよめる　道元和尚

圓からず又方ならず長短も五色にもなき我こゝろかな

題しらず　理西

極樂の金座敷は尻ひえん只行くべきは地獄釜底　道寛

藥草喩品の心を　淨久

自然降る雨を千百無量なるきゞにうくるやおのが分際

修行門の心を　行風

三毒に醉うてぶくめく病には釋迦の金言妙藥のよし

七世父母　道元和尙

七世すぎ其父母をたづぬればあなたは若く我は老いたり

題しらず　方救

世に人の南無阿彌陀佛の口眞似を似せても似ぬは眞實の心

平時賴朝臣

角あれば物のかゝりてむづかしや心よこゝろまろまろくとせよ

返し　隆覺禪師

おのづから角一つあれ人ごころあまり丸きはころび安きに

笈頭巾かけ出し三十六度まで峯に入るもぞ二世の願行

讀人しらず

後の世の爲とおもはゞ慈悲心になさけをかけて他を利益せよ

雲居和尙

本來は無心無相の眞佛も五欲にひかれ凡夫とぞなる

戒たもち座禪念佛つとめても心あしきは造地獄業

何事も前世の業といふ人の菩提つとめぬ是ぞなほ愚痴

苦も樂も現世のことは一刹那迷へば未來流轉永劫

貴賤智愚僧俗男女別なれば菩提の修行分に應ぜよ

一念の慈悲眞實の種となりて九品の蓮華ひらきこそせめ

夢窓國師

寺を建て堂をたてたる功德よりたゞ常づねの慈悲や增しなん

手をあぐも足をのぶるも自由にて見聞覺知するは是たそ

二と一の中間底に行る物の名字を何とつけて呼ぶべき

肉身をかへず佛になることは只我家の座禪なりけり

十方の佛ぼさつとわけ置くも皆唯識の所用なりけり

不去不來有無善惡にとゞまらぬ人を自在の佛とは言ふ

題しらず　　貞清親王

寒さうななりしんごんの行者かなこぼれる水もあびらうんけん

寛永の頃聖護院道晃法親王入峯の時よめる　　源重秀朝臣

本歌 山中はとても籠にはのられじと宮もわらぢをはきて峯入

入峯をよみはべりし　　行風

峯入や或は野に臥す山臥の難行苦行やせこけの行

源俊治

佛にはまだなまなりの魚の鮨菩薩界までおしかゝりたや

百首歌の中に釋教　　入安

いもが子に限りしもせじ汁のみをしやくしと成りて救ひあげばや

題しらず　　讀人しらず

畫像にも木像にもよく祈る身は病難死苦の遁れやはある

伊呂波歌の中に　　道元和尚

拈花をば八萬人にしめせども迦葉ひとりぞ破顔微笑す

佛祖師經律論をからずして直に覺るを禪僧といふ

はげまして自己の佛を悟らずば六道輪廻たれか遁れむ

努力して今わがぬしを覺らずば奈落の苦をばたれか救はん

えり嫌ふ二心ある人の身のなすことは皆地獄てんどう

虎頭虎尾收むる時の勢ひは金剛力もおよばざりけり

一心の水にかなけのある人はあみだぶだぶとあくたれてとれ
平時頼朝臣

此世にて米のすこしも持ちたきはうゑたる人と修行者のため
讀人しらず

佛法修行を疊によせて
讀人しらず

慈悲おもく道の中籠智惠のへり和歌のうらごも才覺の糸

疊師の後世いかにしてか助かり侍るべきと問ひける返しに
權大僧都光宥

念佛をさしては申しおかずとも功たゝみなば西へ行くべき

紺搔に佛道修しえたるありとき聞きて或人行きて事の理を尋ねければ返事に
讀人しらず

板を鐘へらを撞木にとりなしてかたのごとくにのり敎へまし

釋敎魚といふことを
長好

くうに有りてくうて見られぬ望月のその味ひを誰にとはまし

發心の日より行住座臥西向きてのみありけり或時東へ下るとて道につかれうまにのるにうしろざまにのりながら詠める　　蓮生法師

淨土にも剛の者とや沙汰すらん西にむかひてうしろ見せねば

題しらず　　華藥

西方を目當にずゞのたま〳〵も念佛は樂のたねがしまなり

一圃

あひづかや佛を見るとらうそくのたちまちはるゝ業障の闇

平等性智の心を　　三哲

朝夕のお寺まゐりのはり小袖ののりのちからも有難くなる

智元

佛道にたゞ投げ入れておけ寶彌陀の淨土をかね倉にして　願信法師

名にしおはゞ救はせ給へあみだ佛生死の海にしづむ石龜　道明

たのもしな雜喉妄想をもらさずもすくふあみだの誓ひある世は　未得

押並べて釋迦の鑓の手つかひなばつるぎの山のせめや遁れん

六十三歲にて終りをとる時よめる　休甫

我齡とはゞ七九の鐘木杖かねは持たでも南無阿彌陀佛

薦僧　みとく

祖師の名のふけといふより尺八の竹のよをつぐ今の薦僧

題しらず　勝可

色好む僧は佛の戒法をかへり法界悋氣とや見る

知　度

本歌
寺すてふ我名はぱつと立ちにけり大黒はようかくし置きしが

同じ中に酤酒　行風

酒盛し手がはぢかみとなるならばそれをねぶりて飲まんすきもの

大圓鏡智のこゝろを

むさし鐙さすがにかけて現世から後世をもたのむ馬頭觀音

雪の降る日引導せられし時鍬の先ぬけよるによめる　一休和尚

三界のくはぬけはてゝ今こそは淨土の道にゆきぞかゝれる

題しらず　法然上人

口にある南無阿みだぶの味ひを自力の人は喰ひしらぬなり

あはれなり袈裟衣のみかどやきてまつくらやみの僧の心は

雲居和尚

今人の因果菩提を信ぜぬは破戒の比丘の仕業なりけり

悪比丘の其身のとがはさて置きぬ人の道心やぶるうらめし

焔王の神通天眼しらずして檀那たらせる僧の愚かさ

十悪の歌の中に綺語

行風

輕薄の詞に花を咲かせつゝとれるこがねは何まいすぞや

同じ中に悪口

いきしちにひみゐりいとて理をも非にいひなすや只口のしれもの

五戒の歌の中に殺生

戒は只貝がらになし破りつゝ躬をとりくらふ僧よ僧かは

同じ中に邪婬

にて只漏りにもりければ聴衆のものどもさわぐを見てよめる

権大僧都日與

とくとその昔も今もふる雨のもりやは法のさまたげぞかし

末法になりて衆僧の信うすきをおもひてよめる

澤庵和尚

我法の花のいろはのちりぬるをなげくに袖のぬひもせず京

題しらず

讀人しらず

下手の鞠今の禪宗のなまざとりありとはいへどあたらざり鳧

道元和尚

千佛の出世ありともすくはじや我と妄業このむ人の身

發心して程なく破戒なるを見て

源爲仲卿

髪それど直ならぬ氣はなまなりな道心邪とや人のいふらん

題しらず

僧正公助

蜆子繪によめる　　澤庵和尙

いかばかり蝦をとり喰ふ報あらば終には老の腰やかゞまん

聖德太子胎内より持出で給ふ御舍利を、二歲の春手の内より出させたまふ折しもわざとならず鐘七つつきぬ其音雙調なりとなれば他國のむかしも思ひ合されてよめる　　和泉式部

南無佛の御舍利を出す七つ鐘むかしもさぞな今も雙調

父母の子を思ふに越えて佛は衆生を哀れみたまへど其御教にたがふ人のみなるをおもひてよめる　　讀人しらず

父はうち母はいだきてにげぬるを誠の杖と子やおもふらん

尼ヶ崎にて說法の時俄に雨降出たり荒れたる寺

修行者の許へ佛事にそへて申し遣しける　正之

本歌
君ならでたれかはなめむ法味をばあまいもすいもしる人ぞしる

圓融院の御時慈惠僧正内にまゐり給ひ女に五つの障の經文いとたふとく談じたまふ折から御簾の内より或女房の申出されけるうた

有漏地よりむろぢに通ふ釋迦だにも羅睺羅が母は有りとこそきけ

返し　僧正慈惠

いなやいなむきても見べき毬栗のえめば一度落ちもこそせめ

西をあとざまになして小用せられけるをある人の見て彌陀を念ずる行者の西方をけがせるはいかにぞやといへればよめる　安養尼

此尼が西方けがす科あらばめし捕りたまへ彌陀の御國に

難産の時大般若轉讀によて親子ともに事故なかりければ導師の許へあしにそへて　　讀人しらず

大般若はらみ女の祈禱者に六百くわんの布施をこそやれ

圓通寺といふ僧舊忌に三日つゞけて請じける人のもとにて　　昌長

一昨日もきのふも今日も齋に布施やるは三世のゐんつうじたり

題しらず　　正好

煩惱のあかによごれし花のぼしとぎあらへかしのりの次手に

讀人しらず

恐るべし用心もせでくゆるなよ火事盗人させては後の世

來焉

横に車押すとも人の法をえば逆緣ながらゆかん極らく

江州長命寺にてよめる　近吉

何番の札所と問へば長命寺順禮うたの文字の數とや

題しらず　器音

邪見なる人の心の鬼迄もやはらぎにける歌念佛かな

彼岸團子をよめる　未得

佛にも彼岸櫻の花よりは團子と思ふたむけなるべし

流灌頂をよめる　保友

本歌　行く水に數かく經木はかなきがあとは涙もながれ灌頂

太西坊兩界曼荼羅の開眼たのまれけれど不屑なりとて辭退せしをしひて申されければ供養して遺しける次でに　信海

兩界のまんだら／＼と辭儀するはなにのかひげんなき身なればぞ

實　久

身の塵を吸ひとらせんとだまし手に琥珀の玉の珠數やつまぐる

川渡の布袋の繪の讃に　澤庵和尚

にこ〳〵と笑ふ袋のをがきれて水にうきよはてんばちのかは

題しらず　行　好

皆人のもし成佛をするならば地獄の鬼やかつゑ死なまし

世の中はノ麻の皮と思へと人のいへる返事に　信　海

心にはへちまの皮をたやすなよ浮世のあかをおとさんがため

題しらず　權大僧都頼慶

海に住むたこ入道もとはゞ言はん山のむかでが知つた生死を

淨　久

聖徳の後世を願へとおしやりしを守屋はあべとめをひろげたり

蛸藥師に宿願かけゝるに利生延引にて年久しく
詣てよめる　近　吉

歩みはこび珠數する事の年をへば手足もたこになさんお藥師

京のなだやといふ者發心して大きなる鉦たゝき
大笠きて京田舍ありくをみてよめる　道　仲

笠かねもすてゝほだいを悟れかし生木に灘やきの毒な體

小歌尺八などすきけるものゝ俄に發心しけれど
も念佛も世をぬめりぶしにて殊勝にもなかりけ
れば　正　定

尺八のあなうの世やといとひても申す念佛はなほ小歌ぶし

題しらず　夏　虫

皆人はしやかむにならめ西方のみだれごころで申す念佛

灯をかゝげて夜半にする護摩の油さゝんとつゝをふる寺　入安

久米寺やうばそくいひのねばり有りて今も行ふ法のひとくれ

誓願寺の如來は日に一度づつ西方極樂へ通ひ給ふと世俗の言へば　讀人しらず

西方へ日々に通ふと聞くからに今もあみだの留主人やある

光明寺張籠の御影の前にて念佛申せるをみて　器音

くる珠數の弟子も師匠も念佛にかねをはりこの御影堂かな

題しらず　正好

法問を聞くほど奥のふかければ口からうかぶ念佛申さん

淨土宗日中のせめ念佛を　宗恒

貴賤群集法の場とて市なせる午のときぐせめ念佛かな

本歌
昨日まで袴のこしをはりまがた今日はしかまのかちん十徳

八十にあまりても堅固なる人の挨拶に　　満永

よわみなくかたじないしな禪門はまだ幾年かへんとつをきん

釋迦の木像京より田舍へ移徙の供養ありける座にて　　雅珍

都よりくだらせ給ふ木像をみれば教主の如來なりけり

或寺の内陣に繪かける折から狂歌所望ありければ　　成安

寫し給をみてらの内の莊嚴はこむじやう後生綠青のいろ

題しらず　　末得

祐成の別れをなげきあまになる日本の虎は毛をもをしまず

百首歌の中に　　玄康

佛になればいかほどの長ぞと不思議する人のあれば

せいたかやこがら童子と聞く時は佛のたけはふどう明王

芳野の花供をよめる　定行

散錢をまるらせたればやがて又たばるよし野の餅配りかな

初瀨詣に山たちにあひけるもののよみけるうた

本歌
うかりける人は初瀨の山だちよはがしませとは參らぬものを

石山へまうづる道荒板の藥師堂にやすらひてよめる　貞室

石山へ行くかち人は此堂にあらいたやとて足も休むる

播磨のくにのもの世を厭ひて出づるとて女の許へ申遣しける　讀人しらず

古今夷曲集卷第十

釋教

題しらず　聖德太子御歌

照るの月のなかなる物の大弓はあぞ(づ歟)ちにたちて的(まと)にあたらず

荒鐵(あらかね)の土の始にと言ふ二句此上に有る也

秀吉公の御時信濃國善光寺の如來を東山に移さるべきとて本田氏善光といふもの如來を守護し上りける時に　讀人しらず

つみをきる彌陀の利劍は是なれや粟田口より出づるよしみつ

嵯峨の祇王が庵の尼留守なる時まかりて　貞德

妓王妓女とぢたる柴のあみ戸には佛ばがりぞおはしましたる

市原野小町が石塔をみてよめる　　　信海

本歌

色見えでうつらふ物は石塔の人の名がきの墨にぞ有りける

題しらず　　　未得

彼岸(かのきし)にいたらん時の帆柱や舟岡山にたてる卒都婆木

百首歌の中に無常を　　　入安

たれも皆諸行無常や極上(ごくじやう)をむくる茶湯(ちやたう)のあはれ世の中

月日くれ身はふる桶の底ぬけぬわがあらばこそゆひも直さめ

題しらず　治貞

我死なば酒屋の瓶のしたにおけわれてこぼれて若しかゝるかに

五歳と當歳との子うしなひし人の許によみて遣しける　賴智

本歌
世の中は夢か現かいつゝ子もうみおとす子も有りてなければ

無常の心を　貞德

生るゝも死ぬるも人はおなじこと腹より出て野はらへぞ入る　未得

世の中を思へばゆめぞうつゝらが八萬歳もなのみなりけり

五輪を見てよめる　淡路守宗増

なくなるもまだ執心は少ばかり殘るみるめは五輪こそあれ

大阪に又太夫といふ舞太夫ありしが臨終によみ
侍るうた
來世にて又太夫とやなりぬべき死ぬる時にもめこそまひ〳〵
臨終に碁打なりければ 算砂
碁なりせばこふを立てても生くべきに死ぬる道には手もなかりけり
誹諧師なれば臨終に 宗朋
ほつくりと死なば脇より火を付けて跡はいかいになして給はれ
背に癰瘡の出來て身まかる時よめる 宗鑑
宗鑑はどちへと人のとふならばちとようありてあの世へと言へ
七十二歳にて終るとて 良忠
今日よりは算用いらず人間の八く七十二にて皆濟
桶工身まかるとてよめる 讀人しらず

さいはひは願ふに來り禍は愼む門にいらぬとぞきく

哀傷

昨日身まかりし人を壺に入れて埋みける時　信海

きのふ死んで壺に入れたる亡者こそ今日は實の初昔しなれ

百首歌の中に　雄長老

死ぬるとてでこせぬ事をしだいたはそもたれ人の所行無常ぞ

あひしれる僧の遷化の葬にまかりけれどおそく
てえあはざりければ　行安

本歌
くわら衣きつゝなれにし僧なればはる〴〵きぬるだびをしぞ思ふ

猫のいたみの中に　休甫

舟ならで棹のうたてやはりてひくなぐさみせんの駒のかはゆき

世をうしとひつこみ思案する人はさうふのわるき生れつきかな

孔子　　雄長老

顔淵にへうたんをこそかりつらめ海にうかばんと思ふ孔子は

俊成　　行安

なんばうの沙彌を經てかは和歌の道の尺あみだとは成り給まけん

蟬丸　　久清

琵琶ともにひき籠ります蟬丸は不自由なめにあふ坂の山

紀貫之が雨により田簑の島とよめるを思ひ出て　　藤原兼定卿

本歌
雨により田簑の島の見物に笠をめさいでぬれしふらゆき

庚申　　智元

色相を見てみぬ人は悪心をさる眼(まなこ)とぞいふべかりける

題しらず　　雲居和尚

に利をえたまひ降人あまたありける時によめる　景　高

陸奥の勢は味方に津久毛橋渡してかけむ秦衡が首

軍に利をえたまひ武田四郎勝頼父子の首實檢の時　平　信　長

勝頼と名乗る武田のかひもなし軍にまけてしなのなければ

敦盛熊谷をよめる　宗　也

敦盛とかの直實がふるまひは日本一の谷とこそきけ

屈原　久　清

濁る水であらはぬ足のくつげんにまさるべきらの漁父の智恵哉

貨狄

一葉のあぶなき舟にのりそめし貨狄はさても不敵なりけり

巣父　卜　養

本歌
色も香も同じむかしの茶ならめどたてふる人ぞ改りける

大磯の虎石を見て　　讀人しらず

大磯の虎がかたちを殘すなる石を見るにもおもひ物かな

和田酒盛をよめる　　正成

盃を和田へとさゝば大いそに名をとらごぜの鼻やそがどの

痳耳に水の入るといふ世話を　　正舍

藤川をやがて平家の落武者はね耳に入りし水とりの音

元暦の始め八嶋の軍に沖の舟より扇をたてけるを見て義經奈須與一に仰せて射落させける時に　　讀人しらず

扇をば海の水くづとなすのどの弓の上手はよいちとぞきく

頼朝卿陸奥退治の時津久毛橋といふ所にて戰ひ

物毎にたらぬ〳〵と思ふこそまよふ心のつくり病よ　宗祇法師

百首歌の中に懐舊　人安

力もち荷もち歩もちつよかりしその腰肩になすよしもがな

雀ほどちひさく老の身はなれどういたる人は蹄わすれぬ　雄長老

祖父祖母非うば非祖父こと〴〵く死なずに居ては何をくはせん　蓮生法師

いにしへのよろひに替る紙子さへ風のいる矢は通さざりけり　未得

茶をのめばねられぬ老の初むかし大むかしまで思ふ夜すがら　滿永

題しらず　滿永

本歌
歩みての後くたびるゝ老が身も昔は道を苦にせざりけり　智光

長命をのぞむは恥をまつがねのふしさへともす德は有りけり

氣の毒なる折からかしらを撫でてよめる　信海

百八のぼんのくぼまではげにけりなどすりきりし哀れ珠數の身

題しらず　讀人しらず

明暮の勤にすれど珠數の緒のまだきれがたき煩惱の道　元安

我心牛のふぐりもさだまらず世をいとはうと言うてぶら〱　從四位源忠次

著る物はとても角てもよごれぬるこゝろのあかの洗濯もがな

本歌 わびぬれば身にかり米の根をたえてこふ人あらばいなんとぞ思ふ

ある人の取次にて烏目かりけるをやがてもたせ
遣はしかへしたべといひやりければおそくても
くるしからずとてとりつぎの人うちすてゝおか
れければよみて遣しける　　行安

おあしをば返してたべと申しやるかひもなにはのうらみ存ずる

述懐　　宗恒

本歌 今こそはげ我もむかしは男よくさかやき際もありこしものを

寄弓述懐　　淡路守宗増

武官とてせなかにしこを老の身の腰に梓（あづさ）のゆみを張りけり

夢想國師

老いぬれば腰にあづさの弓をはりしばのいる矢にしゝぞ失せける

題しらず　　玄室

ほめ謗る人事きかじと手をあてゝ耳をふたげば結句かしまし

中折や奉書椙原賣りきれど貧乏がみはかふ人ぞなき　　玄康

世にうき事のみ重りける折から同じ心なる人の

許へ申遣しける　　正定

そちとなら油煙とも身をなし果てむ思ひすゞりのすみあいた世に

題しらず　　頼智

塵ほこり積るはうたて煩惱の病にとしをふる疊かな

清生といふ人に米をかしけるをこひにやるとて　讀人しらず

本歌
貸米のくべき體なりせいしやうのお氣のふるまひ兼てしるしも

返し

地などそへおかれけるにとかく我まゝのみたび重りければ所をたちのき給へとこずきける時によめる

暁月

費長鶴張博浮木達磨芦暁月坊はこずきにぞのる

述懐

未得

物毎にあらばありのみなしとても求めはせじな世はなり次第

休甫

世にくへぬ氣は鈍栗のくり〳〵とくりめき渡るこのみなりけり

行風

何もいらぬ身なりながらに今日の世をへちまの皮の團袋かな

入安

世間は拍子ちがひになり果てゝ舌鼓のみうつゝなの身や

父母が引木のごとくゆがみなば茶臼となりて子よまはれかし

友知

借錢の淵ほどあるをたいらかになせるは金の砂子なりけり

堂上と地下の人と相論の事ありしに織田氏右馬助といふもの堂上の人によしありけるにや非分なるをよくとりなしいひける事たび〳〵なりければよめる

平信長

錢轡(ぜにぐつわ)はめられたるか右馬助人畜生(にんちくしやう)と是をいふらん

女院御所の御庭狹きとて曉月の屋敷をとりて御前の庭ひろげ給ふ時に

・曉月

女院の御前のひろくなる事は曉月坊が私地のいるゆゑ

曉月を近江國蒲生氏なる人いたはりて寺地に田

ずかれがわざよこれがわざよと味方のうちみだれあひにけるをみて　信海

壁土のすさわら出す百姓のとがをたがひに塗合ぞする

増上寺萬部の場にて所化どもいさかひし出て沙汰に及ぶべきなど取りさた有りける時よめる　読人しらず

公事にせば若もかたうが詞ろん喧嘩の門か僧のたゝくは

ざれたる咄にて人の機嫌なほりければ　みとく

そらさずに人の機嫌をとりけるぞ是逸物のたかばなしかな

宇多院よりおはれてひとかたきになりける人のもとに　伊勢

のけざまに君におはれし我なれやせなか合せに人のなるらん

題しらず　読人しらず

疎からぬ人のいさゝかの事に遠ざかりけるによみて遣しける　頼智

挨拶のかはらでともにかたれかしたとひ腹たつ事はありとも

雙六ずきなる人のさはる事ありて久しくまからぬなど消息しける返事　信海

雙六のさい〳〵ござれでつくりとゐすわる床ををりはしつゝもかたらふ事あればあすとひたまへと申遣しける

人のまかるべしといひて後のあしたとみにさはる事はべりてえまからずと消息しける返事に　行風

本歌
いかにねて起る朝のへんがへぞ昨日はこふと今日はこまひと

出雲國すさの里の百姓ら訴の事ありて京へのぼり評定所にては是非ともに事の理りたゞしから

ある人の子を養子に遣しけるにいつしか下部につかひなづみ水くませなどしければ本の親のよめる

本歌　などてかく扮かたげとなしぬらん水もたせんとは契らぬものを

題しらず　方　救

美目のよきあしきはいかに母親のおなじはらから生れたれども

常に作病をせし人を見て　久　清

本歌　かたなりと名にこそたゝめ作病を年經ておこす人の身の上

題しらず　重　宣

燒亡よふどしといへば女房のまたぐらのひも御用心あれ

雄　長　老

剃りおとしかしら虱はなきとても臍より下はいかにお比丘尼

わるさいふ子をよめる　　久　清

本歌 夜もあけば強く抓らんわるさ子のまだきに起きてせなにおはるゝ　　頼　智

本歌 ぬぎちらし著物ふみわけなく孫の聲きく時ぞ婆々はかなしき

親の慈悲に前後なしといふことを　　未　得

負ふよりだく子に乳をば呑すれど親の慈悲には前うしろなし

いとほしき子に旅させよといふ事を　　正　長

本歌 庭訓の往來よりも道遠き旅ならはせよいとほしき子に

貧しき人の子おほくもたるをみて　　讀人しらず

子どもをば餡にする程持ちたれどいひがなければひ干にぞする

題しらず　　行　安

小姫子の隱れごにさへまじらぬはもはや桂のはもじなるべし

大工　みとく

やすらかに軒をつたうて家つくる大工をいはば蛛のいとなみ

夫妻石の繪を見て　信海

妻ならばかうこそ有らめかた〳〵と契りも朽ちぬめをと石かな

醫師の灸點違へし事よと恨み言ける人の許にて　保友

本歌
そでないとえやは伊吹のさしも草さしもの醫者も違ふ灸穴

題しらず　一幸

本歌
きくとこそ醫者は伊吹のさしも草さしも知らじなあつい思ひを

宗恒

本歌
わびぬれば今肌ぬぎて難波なる身をつくしつゝかせぐ職人

ていとく

名人のながれをくめど末の代は萬の道が下手のかはかな

桶工　正愚法師

本歌
手をきかせ云へばそさうな桶がはのわれてもそこにあはんとぞ思ふ

鞠師

本歌
色見えでうつらふ物はうりすそのふるき糀（かうじ）の花にぞありける

塗師　光廣卿

色にうく人の心の花うるし跡はげやすき物とこそしれ

珠數曳

珠數（じゆず）曳（ひき）の弟子がぶせうをする時はだつま程にやめをみだすらん

徳元

水晶の玉さへみがく珠數曳が心のうちやなどよくいにん

表具師

表具師がしやうふの糊は紙よりもおのが命をつぐ爲ぞかし

米問屋　　初知

本歌 我宿の米の立直やよかるらん思ひの外に客が來ませる

商人　　菅原在通卿

賣買の利欲にまぎれ禮儀まで破れ袴の町人の體

正成

獸のみかはをはいで見せ棚の爰やかしこに岡崎の町

紺搔　　常胤法親王

紋のみかあつらへやうの色いろに染めなす絹のいと利こんかき

光廣卿

ゑやうしてひらりと散らすたびら雪是や地白のかつぎ帷子

題しらず　　前大僧正慈圓

それもいざ爪に藍しむ張物のしいし取り置く手綴姿よ

鷺足にのりはづしたる面目は灰にまぶせる田樂の曲

座當の茶ひくとて强言のみいふを聞きて　雅　珍

座當めがむづかしさうにお茶臼を引きのこくのと强まはるかな

座當の袴を著杖つきてありくかたかける繪を見て　如　貞

座當の坊あたまは丸の杖つき乃たすき叱なりの袴腰かな

番太郎をよめる　みとく

居ねぶるも奉公顔にあづさ弓いびきの音のする夜番かな

博奕師　滿　永

本歌 まけぬればくれぬ物とは知りながら猶うか〳〵とうつばくち哉

市　獨　友

本歌 杉たてる門をしるしに上戸どもよりたかりのむ三輪の市酒

囃子をばうかべ顔にてするけがは木から落ちたる猿樂のげい

正　定

ほど拍子あふむ小町のうたひやうこれも師匠の口まねぞかし

定　行

小歌の上手なるを聞きて

本歌
一聲に自由をこめし節なればきくともあかじ君が小歌は

藤原光廣卿

巫

弦音にとふ口うらをこたへけり梓の弓のはずはあはねど

路　春

陰陽師

本歌
心あてにいはばやいはん失物をおきまどひつゝ白波の算

源重保卿

木火土金するりやうゆかぬ考へにたび〳〵おのが首もなげさん

春日祭に用樂法師しそこなへるをみて

牡丹花

刀を品玉にとりけるがいかゞしたりけん取落しければ囃子たる太鼓も拍子をうしなひ見る人どと笑ふが中によめる　一幸

ふり上ぐるたちつてとんと落すにぞ耻かきくけこ太鼓うちまで

四條河原にてよめる　宗恒

よせ太鼓日はてれつくと打ちいづる波の音まで河原ものかな

女のまねして狂言舞しける源左衛門といふものを見てよめる　卜養

又たぐひあるものでない過去未來源ざゑもんが舞のなりふり

孔雀といふ太夫が勸進能をよめる　保友

よせ太鼓音もたうからから唐からやわたる孔雀が能の鼠戸　未得

世ともに打忘れたる氣色なればいさめむとてよみて遣し侍りける　可　正

足抜がならぬそうにぞ見えらるゝ淺香の沼にはまりたまひて

非人　智　短

本歌 わけあればくるゝ物とは知りながら猶うらめしをもらふ身の果

伊勢會山にて美目形きよらなる非人等三味線ひきをるを見て　近　吉

三味線のかはゆらしげな非人らにあひの山程錢とらせたや

放下師　滿　永

本歌 あるはなくなきは數そふ品玉をとれる手本は上手なりけり

八桴うつを見て　二　笑

橋ならぬ蛛手の曲の八ばちや太鼓うつゝに世を渡るかな

何はにつきあしき心もたる人をいさめけるに露

そのかたもなかりければよめる　邦房親王

いさめても犬よりおとる人ならば見ざるきかざる言はざるがよい

傀儡（くぐつ）　源雅純朝臣

つら白くけはへる茶屋の出女（でをんな）はいなり狐の子とやいはまし　保友

大井川ながれをたてゝ住む宿の島田綰（わげ）にし髪も遊君

[illegible]み[illegible]　とく

うかれめの人をたらすはおほ磯の虎の威をかる狐なりけり　三哲

うかれめのきるやちぎるや新しく小袖もつまもかはるぐに

宗貳といふもの淺香といふ遊女に思ひ入りて二

老人の身にありしなまずてふ病のいえけるを見て

路　春

老いぬれば水もかれぬる身のかはにありしなまずはいづちいぬらん

足の灸のあと遠ひたるをたがおろしたると問ふに有馬山にてと答へければ

貞　德

頬當にあらぬ物から有馬にておろすやいとの三里さがつた

題しらず

正　長

本歌
日の前を通るちんばや難波潟みじかき足と是や申さん

宗　恒

本歌
津の國の難波わたりの腰引は足がなへかもえこそ見わかね

久　淸

うろくづの生れがはりか海老腰やかます顔にて鰐足の人

本歌
世の中の人は何ともいはしづけ淸酢にごりずかけてくふらん

或方より米三石賜ひたる返事に　　讀人しらず

日本さへ及びなき身に三ごくをまゝにせよとの御意ぞうれしき

親しくかたる人の好みて眞瓜をのみくひければ
兼ねていさめけれども聞きもいれずたゞくひに
くひぬある時瓜たゝりて赤き腹煩ひければ申し
つかはしける　　卜養

謠本語
腹中は赤地のにしきひたゝれにくだしたまふは瓜のさねもり

腹のいたみに溫石（をんじやく）もておさへけるを見て　　政之

本歌
海原のそれにはあらでひえ腹におきの石とや是を申さん

題しらず　　一幸

本歌
やみぬれば今ばた〳〵となにはなる醫を盡してもあはんとぞ思ふ

たてゝ猶宇治茶の色も青によしなら諸白にいかでおとらん

栂尾の僧より手作なりとて茶を賜ひける返事に　讀人しらず

賜はりて栂尾の茶はすぐれたり是や宇治よりそだちなるらん

たのみける人茶をたてゝたまひ是を題にてはや

はや狂歌をとあれば　旨治

ちやつ〳〵とたてつけられて我心そゝりし故か歌にうぢつく

淺草海苔に歌そへてえさせたる返事に　信海

武藏なる淺草海苔は名のみなりお心ざしのふか川のもの

唐納豆送りこされし人の許へ返事に　貞德

手も足もまげ物にしてひざまづき是からなつとうお禮申さう

石川氏なにがしのもとへいはしづけをおくるに

そへて　卜養

上もなき大佛餅の本來をさとれば米の菩薩なりけり

大佛まうでせし人の留守にをりて　近　吉

後世のみかまゐりし人の土産には大佛餅もねがひものなり

良恕法親王の御所にて蕨餅出しけるに重のふたあけざるさきに狂歌よめと仰せ下されければかく申しあげ侍し　行　風

本歌
飢のやむは何でもかでも同じこと宮もわらびの餅まゐれたゞ

家貧しくて朝夕にみそうづをたくによめる　理　西

手とり鍋おのれは口がさしでたぞみそうづたくと人にかたるな

蕎麥搔餅出しける座にてよめる　法　印　玄　旨

薄墨につくれる眉のそばがほをよく〳〵見ればみかどなりけり

茶と酒との論有りける座にて　み　と　く

りければよめる　　法印玄旨

本歌 こぬ人を松非がもとの振舞にやく鹽鯛のみもこがしつゝ

つかれたる折しも人のほしなめし食ひけるを見

て　　宗鋪

本歌 こゝにしも何匂ふらんほしなめし人の物くひこゝろにくきに

狸汁　　貞徳

腹までもまだ入りたらずうましとて舌鼓うつたきぬ汁かな

七條前大僧正宣如より折に餅みづから煎櫃を入

れて「折からにめでたい事をもちるけり自らきも

を煎櫃にしてとよみて」給ひける返り事に　　貞徳

自らがえ持ちませねばたべたいと存ずるをりにおきもいりがや

大佛餅　　未得

題しらず　　　　　　　　　　　　　滿永

本歌
世のなかにたえて酒もりなかりせば下戸の心は嬉しからまし

正定

本歌
我こひ湯鹽けも見えぬおき〳〵は人こそしらね酒の醉ひざめ

大峯の圖司のわたりにて人々誹諧連歌せしにいとせばき家なりければゆふけもる器物こしらへる音席に聞えければよめる

季吟

大峯の圖司のあたりの近さにやなりわたるらんごきもぜんきも

返し

貞室

五鬼前鬼なりわたれるを咎むるは山伏山の町衆なるらん

季吟の住處山伏山の町なれば成べし

松井氏のぬしあるじまうけしけるに相客の遲か

題しらず

本歌
道すがらしどろもじずり足もとは亂れ初にしわれなら酒に

酒宴半に召仕ふ者の樽なる酒を有りやなしやと
ふりて見ければ咄と笑ふが中に客にてよめる　安　繼

本歌
樽のはらふる酒きけばかすがなるみかさものまばやがてつきかも

或酒家より一瓶をえて返事に　貞　直

涌出づる庭の泉の壺本は人のなさけを請ひてこそしれ

奈良のわたり木津といふ所に知る人ありて立寄
りけるにもとより酒好むをしれりければ盃もて
出でながら折ふし美酒侍らず水くさき酒なりと
いへればはやうけもちてよめる　宗　丹

木津川の水くさ酒と人はいへど宇治栂尾の茶にはましたり

本歌
なら酒やその手作りを時宜せしはとにも角にもねち上戸かな

本歌
汲みかはすさゝのおなかに滿ちぬれば身をじゆくしとぞ我は醉ひたる

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　行　　　安

親しき方にて酒すゝめられけるに是は味なし彼はよしなどいひければとかくいひて盃の數重なる事よと笑はれけるによめる

わたくしも難波にすめばすゝの酒よしやあしとてたべませいではこれは〱大酒のまるゝ事よと亭主の笑へりければ

讀　人　し　ら　ず

あがり子の椀をおりべに擬（なぞら）へて八たびのまばや醉ふ時のあらん

返　し

本歌
あがり子の椀をおりべになせりともてうしのこりて酒や殘らん

後陽成院の御時めさるゝ事ありて内へ参りける
に殿上なる人々只今上に御小刀細工遊(あそ)ばさるれ
ば暫く待(まち)ねと申されければ其程によみ待りける　法印立旨

墨壺のいともかしこき粅作はこれぞ千秋萬乗の君

題しらず　平時頼朝臣

から傘のさしたる咎はなけれども人にはられて雨にうたるゝ

鞠　久清

本歌
昨日すぎ今日暮れよくて飛鳥井のながしの曲もはじまりの場(には)

蓮花寺にて中酌の酒の出でけるに詠める　信海

濁酒(にごりざけ)の濁(にごり)にしまぬお心は中汲みてこそしるき蓮花寺(れんげじ)

奈良の酒家にて酒すゝめけるに兎角時宜しけれ
ど後には大酒盛になりたりと人の語るを聞きて　源有純卿

題しらず　　　　　　淨　久

茄子なりの茶入の蓋の細工をばへたにするこそ上手なりけれ

秀吉公御祕藏の井戸茶碗をめしつかはるゝ者のとり落してわりければ御氣色あしかりしを御前なる人のよめる歌

本歌
筒井つゝ五つゝにわれし井戸茶碗とがをば我におひにけらしな

土佐燒の茶碗えさせける人の返事に　　　　　　貞　室

國の名のとさんの茶碗手にふれて朝鮮よりも我は寵せん

題しらず　　　　　　雄　長　老

吳竹のふしみにもなくはるぐ\と京まできりにのぼり竿かな

同　　　　　　み　と　く

手のきかぬ女子の親の折檻は針を棒にや取りなほすらん

狂歌には自慢天滿大自在天神ひげをしてもよけれど
八幡山寶藏坊より表具細工たぐひなき上手なり
と狂歌もて褒美せられける返事に　　泉　齋

表具師はぢく軸しくぞ嬉しがるのりの道しる人のお歌を

返　し　　信　海

御返歌の字くばりは天下一文字上下萬民感じこそせめ
あるやんごとなき御方にて御遊のあまりに狂歌
よめと仰せければよめる　　可　悦

御意なれば三十一もじ二もじにあまり申せばおそれなりけり
歌書きてえさせよと度々申しける人の許へ遣し
ける　　遠江宗一政

本歌
えぬ歌をまつほのうらみいふ人にかくやもじさへ筆ふるひつゝ

はすとて消息の奥に　　　　信海

なにぬねの馳走せぬ間にたちつてと咄も申しさしすせそかな

返し

慇懃に望の額をかきくけここおん生々世々忘れめや

題しらず　　　　ひさきよ

礫文字うちつけ書にする時は薄き屏風の紙や破らん

讃歌の題所にし集るは鍋とり公家に限るべきかな

湯島天神別當喜見院が許へまかりけるに兼ねて
狂歌の頓作聞及び侍り所望といへれば　　　　信海

我歌に作意の自由しまするをさらば申してきけんるんかな

かく詠ければ狂歌とても自慢はいかにぞやちと
卑下ありてもよかるべしと傍なる人のいへば又

手習　雄長老

奈良油煙初瀬出さまにおとしつゝ小野ずみにてや手習の君

夢浮橋　貞徳

道照がいだせるよりもあたらしやうぢ十帖のゆめのうき橋

いづれの御時にか有けん公方の御前にて連歌の
ありしに天神の名號を風の吹き落しければとり
てかけよと仰せられしに取上げかくるとて詠ろ　順阿

梶原と今それがしが二度のかけそれは高名これは名號

いづれの御時にかありけん床に烏丸殿の手跡か
けたる所にて　讀人しらず

飛びかける文字の黒く見えけるは烏丸殿の御手かは〳〵

鈴木氏の人額所望しに來りける翌日書きてつか

若菜

年はつむと白がも皺もなかれとていはふわかなの上下萬民

横笛

寐てゐての夢につたふる告(つげ)あらば名をよこ笛といふは尤(もつと)も

竹川

たはぶれに爭ふかけの碁(ご)なれども互(たがひ)にからむこゝろ竹かは

宇治のうち總角

かうばしき薫(かをり)を内へ入れんとてねやの戸口のみすをあげまき

寄生

姫君はあかしのお子であらずとやさてはいづれの腹にやどりき

浮舟

人がらもかをるに似せて匂ふにぞうからかされて心うきふね

末摘花

たはぶれに人のかほにし紅(べに)をぬり末摘花のさきを見よとや

紅葉賀

今日の賀の酒は五十も呑みつべしもみぢの花に顔もなるほど

花宴

南殿の花の宴にしさしうけて呑みぬる酒のかんだちめなり

あふひ

なやみぬる葵の上のもののけはさぐりてもしる人の生靈(しやうりやう)

繪合

繪合(ゑあはせ)の中にもあかく色どるは朱雀院より出でしなるべし

篝火

一本ちかやかに
ちるやうにおそばへよるも爪琴をならはせたまふ篝火(かゞりび)のもと

或人よき笙をもちたるを年月所望しければえさせける時せうそこの奥に　方救

調子よき所望なればとくれ竹のあな〳〵嬉し祕藏せうよの

尺八稽古する人のもとへよみてつかはしける　行風

尺八の音色は習ふ初手よりもいきごみぞたゞ安だいじなる

少隣といふものの方へ鼓筒目利してよといひ遣しける消息の奥に　徳元

ちくとちとちと見てたもれ此鼓ねはいかほどかせうりんの坊

返し

とたん〳〵たんとで無用此鼓ちよつちとならかうてとくげん

源氏外題の歌の中に桐壺巻　淡路守増

若宮をまうけの君のもてなしによき茶たてんと口を桐壺

鼠色頭巾かつげるを　　道明

しやつきりとけ糊(のり)の有を被(かぶ)れるはほんのねずみの頭巾なるべし

或僧に足袋を賜はるとて　　前關白左大臣

本歌 此たびは我もとりあへず人くれつはかうはかじはそちのまに〳〵

御かへし

本歌 たび〳〵でかたじけなしと頂(いたゞ)けば頭上まん〳〵脚下まん〳〵

子を手習にのぼせておきし人の革足袋えさせてほどなく又五足を贈りこされし返事に　　昭乘

たび〳〵に送りくださる忝けな是も御息のござるゆゑかは

京の人大阪に足皮誂へおき便りにのぼせてよといぬめり出來たりし時足皮師にかはりて　　行安

本歌 便宜あらばいかで都へ告げやらん今日しら皮のたびが出來ぬと・

雄長老

虱ほど世をへつらはぬものはなしむさき人にはことに近づく

燈　正信

本語 戸ほぞより落ちねど是は常住のともしかゝぐる油つきかな

久清

火袋も匂ひぶくろのたぐひかや丁子がしらの中に見ゆれば

蠟燭ともしけるにいたうながれけるを見て　宗恒

本歌 ながるれば又會津もや忍ばれん牛と見し夜の今の蠟そく

筏士　重故

芳野川瀧とびくちをあまたもて手わうざわうにくだす筏士

海賊　久清

白波や海賊どものゝる舟は人のたからを奪うて取楫

よく化けて嫁入をする女ぎつねよ夜の殿子にさられればしすな

道　明

母にいつおくれはしけん小鼠のあけくれちょとなく聲のする

前關白信尋公へ淀鯉奉るにそへて　昌　俊

折よくは申させたまへふたつ文字牛の角もじたてまつるなり

返し

魚の名のそれにはあらずひまの折ちと二文字牛のつのもじ

鯉をえさせける人の書札に扁を誤りて犭扁に書

きこしける返事に　宗　吟

山の芋うなぎに化する證據もて鯉をたぬきになす扁もあり

題しらず　数　二

本歌
朝夕に吸へばこそしれ住吉の蛤汁のしほのあんばい

四々ならば十六つれて行べきをくゝにもるゝか一つはしるは
牛を盗まれて里のおのこども尋ね出でける野を
通りあひにければ此僧の盗(ぬす)みにがしけるにやと
あやしみけるをさるものにはあらず西行といふ
修行者(すぎやうしや)なりといへばさらば十二支をいれて牛ぬ
すまぬよしの歌よみたまへゆるしなんはや／＼
とせつかれてよめる

午未さるとりいぬよそちもいねうしとらぬさへうきなたつみに　　未得

腹鼓うてる狸(たぬき)のおのづから身にたしなみてもつや胴皮(どうがは)

孫よりもゑの子かへとはむば玉のよる／＼思ふ用心のため　　道寛

柴柱縄なともちとくれ竹のふしんにことをかきもこそすれ

俵十もらひに遣すとて

御無心は百足の手ほど申せども又此たびは俵とをたべ

名所松　宗朋

いつの代にたが彩色で住の江の松をあをきが原にしないた

題しらず　太閤秀吉公

筥崎の松は奉行にさも似たり直なとみれどゆがまぬはなし

縮輪　宗珀

落葉かく親子のもののいさかひはちょりなりとぞ住吉の松

主の仰せにて木の枝おろしにのぼるとて　讀人しらず

本歌

あぶなく登りはすべし枝もなく高き木のそらくるしかりけり

獣

とゞめよかしとなれど心留らざりけるを是非とてわらぶきのせばき菴をえさせけるに何の役もなくしばらくあるとてよめる　　道明

わらぶきの室(むろ)にあけ暮寐させつゝあるじは我を麹(かうじ)にやする

駿河御普請の時八木高直のとり沙汰をきゝて　　參議源忠興

富士よりも米大豆のねの高ければ普請まかなひ何とするがや

法印玄旨公方の御普請の料に國本よりおほくの米をとりのぼせられければ御普請終りても猶米のこりけりよしありし人なれば米百石えさすべしとりにこし侍れと申されける返事に　　宮川尼

御普請の用にもたゝぬ此尼が百の石をばいかで引くべき

普請する時親しき人の許へ申遣しける　　讀人しらず

壁一重となりにだにもとはれねば貧ほどふかき隱れがはなし

井につき際目の論有りける扱ひ濟しける座にて　雅珍

中汲みて扱ひぬればこの井戸の際目の論も水も澄みけり

赤土をもとめ壁の上塗せし時よめる　重賴

本歌
昨日まで餘所に思ひし赤土を今日我宿のかべと見るかな

錢湯の風呂に楊梅瘡わづらへる者のさなきふり

にてまぎれ入る事たび〳〵なればよめる　重故

本歌
あかなくに又來て風呂に隱るゝかかさかきのけて入れずも有なん

兼て見ぐるしかりし宿に新しき疊もとめて敷ける

折に　光知

本歌
疊こそ今はしくなれ是ならばたが御座るとも苦しかるまじ

紀伊國にまかりけるにあひしれる僧の是に足も

うつぶさにさのみに人の寐られねば月をみのぶとおきかへるかな

或貧しき僧のもたる寺を金銀をもてもらふべきとしれもののいへれどうけこはざりきと語る人にかはりてよめる　　伊貞

師匠より讓られにける一寺をば千金とてもいかでかゆべき

百首歌の中に閑居　　入安

世間をひつきり竹のかくれ家に心ゆるりの茶の湯をぞする　　立康

錢かねもあるほど人にくれ竹の世を遁れては樂なおきふし　　雄長老

世を遁れかゝる淋しきめにあふをやまいつたとや人のいふらん

題しらず　　中務丞基佐

入口に一枚にてやたらざらんちひさき板を脇にはぎの戸

江口のわたりさらしの里にてよめる　宗也

此里は江口の君のめされたるきやふのあまりのさらしなるらん

木搖磯梅澤里をよめる　徳元

はらみぬる女の腹が子ゆるぎのいそぎひもときうめ澤の里

石畠といふ所にてよめる　近吉

作り物ぬすまれじとて番をする行儀もかたき石ばたけ哉

伊勢のあめ名物なりと人々の買ひけるを見て　弘重

をしなべてあまてる神のまるり衆つをばひきぬる伊勢飴のあぢ

瀬戸にて　光廣卿

つく〴〵と見ても食はれぬ物なれや口なし色のせとの染飯

身延のわたりうつぶさといふ所にて　日蓮上人

浦　　久清

鹽竈の茶釜なりせば風爐先の屛風がうらと見るべかりけり

題しらず　　利清

姫松は神樂神子にて住の江の岸うつ波は宜禰がつゞみか

或人姪濱より脇指をおこせて目利してよ銘なども能く侍らば主になるべきと消息ありし返事に　　法印玄旨

脇指のしろをし問へば安吉のなかごたゞしきめひの濱かな

或修行者つかれて醒井の邊に休らひ鼻紙より麥の粉を取りいで水にうけて呑むとしけるが山風に吹きちらされけるによめる　　讀人しらず

頼みつる麥粉は風にさそはれて興さめが井の水をこそのめ

禁中　　むねます

讃州小豆島をよめる　宗也

四國にはあはばかりぞと誰かいふ小豆も島に有りける物を

播磨國に鍋の島酌子といふ所あればそこにてよめる　法印玄旨

鹽ははやよき程なれやなべの嶋酌子を中へいれてみつれば

明石の人丸の舊跡はいつの代にか城をとりたてらるゝとて二の丸の外へ移され今あるは昔の所にはあらずと人のいへればよめる　讀人しらず

あかしなる人丸は今二の丸の石がきの本となりにけるかな

いかなる事にかありけん高砂の鐘樓より落ちければよめる　宗也

本歌
高砂の尾上のかねをおとすなりたれをとらへてしる人にせん

御懇書にばかされ出でてきつね川さいはひ〳〵やあうて語るは

吉野川の水高かりしを渡るとて人のころびながれけるを見て　永　明

つまづきてうきぬ沈みぬよしの川よしやよしなき水心だて

相摸國酒句にてよめる　德　元

氷をもつきぬくばかり流れ來る鐺のさかはの水の一筋

河　滿　永

どう〳〵となるも響くも打ちよする波の鼓はかはのはりあひ

海邊眺望　むねます

渺々と限りもみなの海づらを打ちあふのいて遠見ぞする

題しらず　雄長老

橋立の松のふぐりも入海の波もてぬらす文殊支利かな

ことわるを今日は幾たり通せりと書きつけておくもじの關守

玄　康

さりともと引きとゞめつゝ一筆を所望せられてかくもじの關

橋　むねます

眞中(まんなか)は皆朽ちはてゝあともなし昔ながらの雨の橋ぐひ

瀧　白言

寄る浪のねがはにせじと津の國の鼓(つゞみ)の瀧をしたゝむとうつ

ひさきよ

諷ひまふ袖はかへさもしら波のうてる鼓の瀧(たき)呑(のみ)の酒

小濱氏嘉隆伏見へまかるとて狐川のわたりに舟とゞめ消息こされけるにやがて出あひてかく申侍りける

信海

足からに灸をするがの富士ならばひねるもぐさやたごに一ぱい

石見の國銀山へこえて見るにやまぶきといふ城の在所の上にあるを見て　　法印玄旨

城の名も理りなれやまぶよりもほる銀を山ぶきにして

正成

味はひも色もそれかと三芳野の葛につさかのわらび餅かな

不破關にて是かれ友どち曉がたまで酒宴する折しも玉子の肴出しければよめる　　久清

鳥と共にうとふ酒宴の肴にと料る玉子のふは／＼の關

關　　雄長老

ぬいめづけに雲井の雁を染めたるはたが肩衣のもじのせきもり

淡路守宗増

雲の帶かのこの小袖ゆき長にだてをするがのふじの山かな
法橋由己

富士の根を自然枕にせん人の足をのばさばむさし野の原
行風

臺の物に山をするがの富士ならばむさし野をこそ盃にせめ
卜養

尾も白し頭も白しにはとりのひよこかふじは時しらぬ雪
みとく

のびあがる足高山もふじのねの腰だけにさへ及ばざりけり
久濟

酒のみてふじの高根の雪みれば心もうきに浮島がはら
弘誓法師

同じ處に團子うるものの酌子もてかならず十づゝすくひあぐるを見てよめる　藤原雅章卿

すくひやう其名たがはぬ十團子酌子定木もかたは有けり　中納言藤原政宗

本歌
とをだんご十づつ十は喰ひぬともをさなき口にあかん物かは

富士山を見て　讀人しらず

月と日を地に落さじと半天のつよぱりにかふ富士の大だけ　澤庵和尚

風はこぶ半の雲をひき繩にふじの高根の墨ぞしらるゝ　道明

本歌
風になびく富士のけぶりは西行の口より出しいきかあやしき　讀人しらず

風　　久清

味ひをたがなめしりてから風や又あま風と名づけそめけん

大和國尼が嶽といふを見てよめる　　正信

尼が嶽のかしらにおほふ白雲は綿ばうしとぞいふべかりける

有馬山にてよめる　　正直

有馬山ゆに入相のかねの音は諸病無病ときくぞたふとき

讀人しらず

有馬山高きは湯女のこゑのみか二階住居におさかなの代

茶臼山をよめる　　やすとも

天王寺石の鳥居を切りたてしあまりのありて茶臼山かな

駿河國宇都山にて　　讀人しらず

鐵炮にうつの山邊の十團子ひだるき時の口藥かな

雜下付哀傷

天　　　　　　　　　　　　　　　行　景

空色がそらのあるじの幕ならば月やうら紋日やおもてもん

　　　　　　　　　　　　　　　　來　焉

萬物のそだてらるれば月と日をあまのはらなる乳房とや見ん

寛文癸卯年春三月より夏さつきまで入日のまつ

かいなることと有りけるによめる　　瑞　南　和　尙

空腹をたつるかそれは何ごとぞかほをあかめていらぬ夕陽

月　　　　　　　　　　　　　　　　滿　永

空のうみに月の御舟の名をつけば三界丸と申すべきなり

今日言ひてあすがいかうと御意あるはあまりはずみて曲がござらぬ

廻文

題しらず　　　　　　　　　　　　　　み　と　く

ねぶりつるかゞりたき捨てなみ暗く皆出すぎたりかゞるつりふね

無常　　　　　　　　　　　　　　　　釋　淨　治

又とびぬめとをと哀れぬししらじ死ぬれば跡をとめぬひと魂

しらるなりいま清水の名ばかりか花のつみよきまいりなるらし

一方(かた)に申しけりさよとありながら猶あんじたまへれば庭田雅純の名をかくして　　行風

此方(こなた)にはだまさずみつゝよしと言へどなにはかはとの歌のうたがひ

かへし　　雅純朝臣

修行よくいつしき島の言の葉にかゞう風體を得たる人ぞも

美濃國にありし衣下僧國守にそむきて所をのくとて　　讀人しらず

天が下ひろくはるかのえげ笠をさしてみのには執心もなし

いづれの時にか有りけん町童の飛鳥井殿をせうじたく侍ればかねて申上げ侍る也十日廿日のう、ち御心に任させたまへと申しければ幸ひいとまありあすまかるべしとおほせける時によめる　　讀人しらず

返事にらいちの名を　　　行風

此いらいちゐんなれゝば足引のやまと歌もて申し通ぜん

歌舞妓若衆小金といふもの小歌の音頭上手なりしを　　　以春

音頭の歌にて人をよぶこ鳥古今一部の大事とぞきく

町童鶴や清兵衛といふ者歌會に出座せんと約して其日になりてとみの事ありとて來らざりければよみてつかはしける　　　長嘯子

はり弓にかくるつるやの精兵(せいひやう)も筈(はず)をちがへて星にあたらず

雅純朝臣のもとにまかりけるに折からの和歌二首よみたまひいづれぞさだめよとあるをいかでさることはと辭し申しけれどしひて仰せければ

伯耆國かゝと云ふ所にて釣人の家にとまりてよめる　　法印玄旨

哀れにもいまだ乳をのむ蜑の子のかゝのあたりや離れざるらん

長門國たらひと云ふ所にてかれ飯くひ侍らんとかり宿りにあるとき下部どもの足にまめといふものの出來てあらふにいたきなどいふを聞きてよみ侍りける

さしいれてあらへる足のまめ多く馬だらひとや人の見るらん

雨の降る日馬三疋の毛色よめといふによめる　　讀人しらず

雨ふれば道はあしげに見ゆれども日かげのさくは驄てかはらげ

大和國不動院賴智狂歌草こしける次手に此後々も歌の道ひきたのむなどこま〴〵と申されける

つけてこしければ返事に休太郎といふ名をよみて遣し侍りし　　行風

愛らしきうたらうたしな是やこの親の名までもあげまきよなう

返し　　季吟

情ふかう風體もよきことの葉は懐中させて祕藏させてん

ひらかた　　久清

所から天の川なる水いろにひらかたびらを染めんとぞ思ふ

ある人のもとへ柿と梨と送る消息に　　白山

何事もなしと申さんとばかりを只一ふでにかきおくるなり

神尾氏若狭守冬更けて八幡へ登山有りて只今の有樣を狂歌によめと有りければよめる　　信海

頃の寒をいたまずわか山にのぼりたまふはわかさなりけり

定家(さだいへ)がちからの程をみせんとて石をふたつに割りてこそやれ

物名

保友のぬしいにし年の暮より音信たえて睦月望日(もちのひ)もとはで過ぎにければそれが名をかくしてよみて遣しける　　　行風

春の禮にござりやすとも待つ程にまつの内さへ打ち過ぎて候

かへし　　　保友

松の内にまつかひなしや曲なしと述懷中のもつとものうた

行風が字懷中といへばなるべし

北村氏季吟が息休太郎といへる十一歳なるがいにし歳旦の歌よめりと睦月末に季吟方より書き

あぶりくふ顔もゐろりの田樂(でんがく)にくし〳〵おもふ事ぞわするゝ

北野邊しはす通れば借錢(しやくせん)をおい松もありこうばいもあり

春　丸

節分の鬼よりこはき借錢を打ちはらふべき大豆板(まめいた)もがな

瑞南和尚へ炭三俵送りけるに　言　當

ゐろりにはおきたらじとぞ思はるゝ四すみの物にみすみ送れば

鱈を得し返事に　長　嘯　子

さいまつといひてくれける雪の魚くひたら味のきえ〴〵とせん

貧しくて春まうくべき糧なかりけるによしありければ定家卿の許へ申遣し侍りける

曉月がしはすのはての盧印地(きらいんち)年うちこさん石ひとつたべ

返　し

たびけるを御禮に遲くまかりければ壺はいかに
とおほせけるによめる
御禮をちやくと申さん壺なれどつまりにけりな口をはられて
和歌學ぶ人の許より俗にひともしといふ蒜を送
れりける返事に
牡丹花
一もじに三十文字はなど添へざるぞさすが其身も歌をよむとて
師走になれば町屋に燒亡强盜の守りに自身番と
いふ事ひとりのみならず二人三人より居てする
をよめる
保友
あひ番の宿をならべて門の前非僞によるの火ようじはよき
題しらず
貞德
冬の夜はなめしをいつもたび給へ足のかはまであたゝまりけり

ば主のかたへ弓にそへて申しつかはしける　　讀人しらず

此弓はかへりたがればかへすなりしばしこなたに射るを給はれ

僧の還俗せしに魚くはせ大小などえさせければ

よめる

本歌 今日や此僧の衣をぬぎすてゝ君が大小さしたてまつる

碁　　ていとく

印地するわらべの智恵とごかくなり石のうへにて勝負をいふ

雙六　　行風

川舟をのぼすに似たり雙六はさいつひいつに手のひまがない

題しらず　　讀人しらず

本歌 堅い砥をこなた彼方にとぎかけてあはずは何を剃刀にせん

あるやんごとなき方より名ある壺に茶を詰めて

題しらず　ていとく

連歌師はをんな子なりと覺えたりさしあひもあり妊み句もあり

硯箱の蓋に漁父舟の蒔繪書きたるに狂歌よめと

いひければよめる　信海

れうし舟硯の海にこぎだすは魚のまきゑをするにこそあれ

筆　宗訊

鹿の毛は筆に成りてもやすからずとかく料紙のうへで果つれば

德元

むかしくよみ置く歌の今の世にのこるも筆のながき命毛

紙　未得

鳥の子に小鷹おほたかひきあはせつかひあかぬは料紙なりけり

人の弓をかりけるに射る毎にかへりのみしけれ

り其歌なべての人の口がらにはこえて覺えければ草の奥に作者の名は筆結の二藏とやそれが結し筆をとりて物の理を書き述べし三藏をもはづまじき作意ならし殊更歌の數十七首は定林のわたり近くすめるとなれば彼憲章を思へるにやとてかく申遣し七首をぞとめ侍りける　行　風

憲法にあふ歌數の十七の七首よきこそ七不思議なれ

誹諧連歌の判をこふとて貞德が許へ申遣しける　唯　正

はいかいのまきのあら駒口こはくはめるくつはのゆがむ體かな

いづれの御時にや五首の勅題下されけるをかしこまりて先づよみて奉りし歌　讀人しらず

ちよくとして歌のおだいを下さるゝ辱しや殊にごしゆまで

たけのあるこのはいかいを書附けてやぶれずのことといふは盗人

同じ點取の奥に　玄札

本語はいかいの功なり名とげ給ひなば我にもてんの道を教へよ

返し　ていとく

あつぱれやかほど功ある誹諧のてんの道には身退くなり

謠外題を百韻の誹諧連歌にし點を望みける草の

奥に書附けける

喃是は如何なる仕手ぞつれはたそわきにあるまひ謠はいかい

同じ誹諧の點望みける發句に東北をしてければ　卜養

てんたうにかなふ詠吟すくなくて東卜養を恨みたまふな

此集編み侍る半に河内國定林寺の邊にある僧狂

歌草の上づつみに筆結の二藏と書附けてこし侍

此集編まんこと兼ねて重頼に聞えけるに狂歌よみてこすべきとありしがおそなはりければかく申しつかはし侍りし　　行風

本歌　名にしおはゞいざこれとはん都衆わが撰ぶ狂歌ありやなしやと

狂歌點取の奥に書附けて貞徳が許へ遣はしける　　爲盛

はひまはる腰折れ歌を筆にのせて書いておくるははゞかりて候

あるものの歌をよみて點をこひけるにその歌やあしかりけん批判はなくて奥に　　曉月

てんまでは及びもなきぞみぞいたち和歌の道にはまかげさすとも

誹諧連歌百韻點取の奥に　　日能法師

書附くる此はいかいはやれずのこたけのなければつゞられもせず

返し　　貞徳

本歌
つきやあらぬ色や自慢の色ならん布子(ぬのこ)ひとつをむくのみにして

題しらず　久清

本歌
きく度にめづらしければきる物にいつも初音の香(かう)をとめけり

入江殿より青き綿帽子を送りたまひける返事に　法印玄旨

えてかづくばうしの色の青のりは入江のあまのしわざなりけり

ある人のくろき帽子をえさせける返事に　行風

かづけ給ふ帽子をみればまくろなり色もきにあふ冬の音信(おとづれ)

勝尾寺に義空とて狂歌の上手あり彼にには及ばしと人のいへりければ　信海

我歌になどてあなたがかち尾寺のどぎくぎくうさせてみせませよ

鷹筑波集の奥に　貞徳

犬よりも物しらぬ身のあつむればるたかつくばと人ぞいふべき

法眼紹巴に途中にて行きあひいづこへと問ふに茶湯にまかるといへりければよめる　法印玄旨

花香ある人は御茶にも呼ぶなれどこちやまた跡に残る壺底

返し　法眼紹巴

残るこそ猶も別儀に花があれうぢある人はちや〳〵と呼れず

青器　晋

庭の苔すき屋のたゝみそりたてのあたまも青き茶の湯なりけり

身の貧しく老いけるにある人のきよらなる小袖たまひし返事に　福安

本歌
年たけて又きやうともおもひきや命なりけりさやのお小袖

貧しきに親しく語る人のふるき布子を染直しきていとたのしといへりければうち笑ひて　南哥

山猿もともに梢をおち椎(しひ)の車に似たるかたわとぞなる

吉田二位卿よりあるかたへ松茸送りたまふせう
そこにうへ〳〵へもいまだ奉らず隱密あるべし
とある返しに　　讀人しらず

松茸のおゆるをかくす吉田どのわたくしものと人のいはまし

題しらず　　一圓

本歌
只たのめしめじひとつの取りざかな座しきに酒のあらん限りは

江戸にてはしとあしと赤き雁を送られける人の
許へ返事に　　光廣卿

本語アリ
是もまた都鳥とぞ申すべきはしとあしとの赤く見ゆれば

近江國に小堀氏なる人の許へ茶湯にまかりて　　信海

感じいるさいの數々みな口にあふみかぶらの名ある御(お)茶(ちゃ)の湯

山雀の籠へ入れかへ飼ひにけりへうたんがらや出でしこま鳥

題しらず　　　　自出

本歌

夕されば門の破れ戸をおとづれてあたゝまるねにあき風ぞひく

八朔に誹諧連歌の百韻を書きてえさせよと望める人に書きて遣しける奥に　　器音

八朔のさくいもあらぬはいかいをもゝ書きあつめまゐらするなり

仲秋廿日の頃友なふ人の宵の程語りて歸らるゝに路次もぞくらき提灯をと言ふにいなや月の出でたりと申されければさればとてよめる　　藤原定家卿

客人の歸るさ送るちやうちんは申しつけねど出でし月影

春日山にていかにかしたりけん梢より猿の落ちけるを見てよめる　　器音

雨ふるは不思議か笛はおひやおひてれ〱〱とならす太鼓に

合羽　常林

白雨のふりかゝるとも早速にうけながすべき袖合羽かな

よべばんの鳥えさせける人のもとへ朝に申しつ

かはしける　藤原光廣卿

やう〱と今朝こそ申せ遲なはる昨日のばんの御禮なれども

ある僧のもとへ竹子を送るとて　保友

新發意とおぼしめされて齋非時におつかひあれや竹の子どもを

京の町屋に鶉のなくを聞きて代をとはせけるに

高直にいひければ　法印玄旨

立寄りてきけば鶉のねぞ高き人もよくにはふけるものかな

山雀の籠へこま鳥を入れかへたるを見て　ていとく

夏蟲におとる心のはいかいをあつきひけんに入るゝをかしき　貞室

返し

殊勝にもよくしあんごの誹諧にかくるをたうりてんぞとも見よ　保友

誹諧連歌の批判の奥に

空蟬のうつゝをぬかすはいかいの作意の程は生きてはたらく　久清

川逍遙にまかりてよめる

賀茂川の魚の料理はところがらたゞすであへて鱠にやする　保友

河豚汁に茄子を入るれば毒をなさぬと人のいひければよめる

死ぬといへど食うてもしなず年寄るはふぐと汁にはなすび故なり　道明

雨請成就しけるとて踊もよほせし所にて囃子物によせてよめる

狂歌點取の奥に書きつけて貞徳が許へつかはし
ける　　　　唯　正

はじかみのくひもあはせぬ歌の口たゞから〱とわらひ草かな

はやりかさ多く出でければよめる　　讀人しらず

我がかさのみかはに多く出ぬれば蛛手(くもで)ひまなくかきつばたかな

惡しき酒をつよくしひければ打笑ひて

この酒は夏のかりねの床(とこ)なれやかはうるさくてのみ憎きなり

前關白信尋公へ鰆鮨を奉るにそへて申上げける　　言　當

本歌
魚扁に春くはゝれる鮨だにもすきなお口にあかれやはする

人のもとより鰆の鮨をえて返事に　　右衛門尉藤原武員

近江(あふみ)鮒(ぶな)宇治丸鮎の鮨もあれどおされぬ味(あぢ)は鰆なりけり

一夏の中誹諧發句して判をこふ奥に　　貞　因

前大僧正尊應

本歌
山寺の春の夕食はやければ入相(いりあひ)の鐘に腹ぞへりける

親しき人のもとへまかりけるに精進の麁相なる
料理にてやみぬと人の語るを聞きてよめる　讀人しらず

本歌
袖ぬれてあまのかりほす青海苔(あをのり)やみるをさいにて止(やま)んとやする

海士　久清

手まめにし和布(め)をも刈らぬは浦(うら)の名(な)のかだものなりとみゆる海士人(あまびと)

卯月朔日魚の棚通りけるに魚どもあまたあらふ
を見て　貞徳

衣更(ころもがへ)の今日(けふ)しもわたをぬかるゝは魚の腹もやう月なるらん

茗荷(みやうが)の子を西坂より賣りに出たるを見て

本歌
あのくたら三百三文やもうくらん我(わが)立(たつ)杣(そま)でみやうがうりつゝ

返し

此程はうち絶えにけるたむぼゝをたまはりて食ふ舌つゞみかな　満永

鼓草賣るを見て

拍子あひよくいひながしねも高くちゝとうりぬる鼓ぐさかな　正繼

緣といふ菓子の出しける座にてよめる

本歌
常磐なる松のみどりも春くへば今一しほの菓子の味はひ　信海

杜若を坂東にて筆花といふを聞きて

筆花といふことわりをきくからに一首はかうぞかきつばた哉　淡路守宗增

三月三日に相坂邊にて鷄合けるを見てよめる

にはとりも相撲に似たり相坂の關のかち聲あぐる勢ひ　昌治

題しらず

花よりも團子を歌の題ならば食はずと腹にあぢはひつべし

観音のちかひかこれも枯れてたつみを木に波の花咲きぬなり
八丈棚にて紫の絹盗まんとせしを見つけて取りかへしつと人の語るを聞きてよめる　正信
盗まんと人めをまぎらかすが野の若むらさきのすり小袖かな
題しらず　一閑
本歌
花見虱うつりにけりないたづらに我身よにない古き小袖に
或所にて酒宴なかばにくわゐとしひたけを肴に出し今ひとつとすゝめけるをいなびければ亭主のよめる
肴には是をくわゐとたてまつり今一つとぞ酒をしひたけ
人のもとへ鼓草にそへて　読人しらず
たむほゝをとたん／＼とはやりもせでちょつひとこそ送るなりけれ

題しらず　貞徳

物くはで地主の櫻をみる人の目ぼしの花はちるか散らぬか

大原野長嘯子の歌會の日とみの眼病にて席につらならず兼題歌書きてまゐらするついでに

お花見にめをわづらひて參らねば大はらたちや口をしほ山

藏王堂の前にて小者の花を折りければ主なるものの神木なるをとてうちたゝきけるを見て　淨治

三芳野の花をゝりはのでつちめを主ぞうちぬる丈六の堂

久しくまからざりける人のもとにて鯛の骨ひれなど肴にて酒たうべつと人の語りければよめる　一圃

本歌
あらなりと名にこそたてれ櫻鯛年に稀なる人の振舞

難波江のみをつくしに波のよせかくるを見て　侍從源光尙

人間の八九七十二の年も心はもとのてうちぜゝがこ

　戌年道の邊の捨子を見て　夏虫

む月乍らあぢきしき無く捨てられし子はそも何のむく犬の年

　題しらず　入安

薄泥に霞をさつと引きまはす屛風に松をかけるすみの江

　綉に初蕨を汁の料理にせしがもとにて　浄治

汁にして魚の名にあふさわらびのこは山海の珍物ぞかし

　短冊とてや花の枝にえしれぬ事ども書きてかけな
　らべたるをみて　長嘯子

人毎に腰折れ歌をよみ置きてあたら櫻を杖にこそつけ

　清水にて　保友

花見にやきよ水坂の燒餅のかたはらいたき歌をよむらん

古今夷曲集　巻第八

雑上付物名廻文歌

人のもとより鯛と飯餉を得て返事に　　遠江守一

あら玉の年のはじめにめでたいといひだこ送りたぶぞ嬉しき

節振舞のうた　　保友

本歌
浅みどり糸より小鯛やきもの丶串にもぬける春の振舞

　　宗恒

本歌
けふのみとはなを思へる節小袖たつも苦にせず花染の衣

鰤の料理を見て　　貞徳

料理者の毬打腕できる魚の名も正月のぶり〳〵ぞかし

題しらず　　権大僧都光宥

めかけにはめがくれ心くれ竹の節々になる夫婦いさかひ

題しらず　　未得

堂宮にのろひごととしてうつ釘はかなづち論の夫婦いさかひ

かたわなる女をむかへてさるとて女のとかくいひければよめる　　讀人しらず

本歌

よびし上は科なき時やさらざらん鼻さへそげめ目さへたゞれめ

題しらず　　久清

浮石に似たりし妹が顔ばせはうしとて縁を切革屋かな

未得

たがなほす中とはなしに夫婦するいさかひ果てゝよるのちぎりき

男のよめる

本歌 つら赤みくさげに見ゆる我くさを人の笑はんことをしぞ思ふ

返し

本歌 恥かしやなとあてことの言の葉ぞ面目なくも思ひけるかな

題しらず　未得

忍びつゝ初めさゝやく睦言(むつごと)ははらみて後のどよみとぞなる

世の中の男女(をとこをんな)のわざはひもしもから起るものにぞ有りける

入安

はは落ちておどろの髪もまつ白に霜ふる姥にあきやはつらん

夫婦いさかひを見てよめる　成安

竹笛のなかの節くりいさかひはりやらひやらを聞きぞ兼ねぬる

女の悋氣して夫妻いさかへるを見て　正景

さやしには似合ひたりとや鮫肌な人をきもいる媒ぞ憂き

題しらず　忠精

敷銀のおほきにわろき女房をもつや非欲の契りなるらん

職人歌合の中に佛師戀　民部少輔嘉隆

戀をして片手に造る御ほとけををがむ衆生や皆まよひなん

題しらず　三哲

まだうひの左官がよめの化粧には唐の土をや壁塗にぬる

百首歌の中に　入安

廿三夜の月にむかへば六四九四のゐくぼにみゆるいもが俤

題しらず　直之

夫妻のみ入りぬる風呂はあかなくのせなにむかひて猶もいもふき

女の顔にくさかさの出來て見ぐるしかりければ

江尻にいたりし時本なれし若衆そこにつて戀し
かれど人めをはゞかりえあはでやみぬとかたる
人にかはりて　　　　　　　　　　　　信　　海

餘所にのみ見ほの松原はらたちや戀にするがるの江尻なれども

屛風に夜ひと夜物思ひたる女のつらづゑつきた
る所を　　　　　　　　　　　　　　　伊　　勢

本歌 夜もすがら。ものの思ふ時のつら杖はかひなだるさぞ知れざりける

題しらず　　　　　　　　　　　　　　行　　安

ふらい〳〵ふる妻いとし我かたへほとりによせてきそん十七
　　　　　　　　　　　　　　　　　　安　　明

本歌 笠さきへもたせる人のよめりとて白きを見ればねりぞかづける

職人歌合の中に鞘師の戀を　　　　　　久

題しらず　貞徳

居所をまくりあげても何かせん穴のはたのみのぞく身なれば

職人歌合の中に作花師の戀　よしたか

本歌
一枝も御意にいれかし君ならで誰にかみせんわが造りばな

同じ中に珠數曳の戀

戀や是百八煩惱そくいべらのりのをしへを背く珠數引

寄若僧戀　入安

うつくしき地藏のごとき若僧に死ぬるからだは千ばかりなり

寄鼬戀　みとく

情しらぬ人をたぐへばみぞいたち只みめよしといふばかりなり

寄龜戀　夏虫妻

萬年もはなれはせじな石龜のかうとやくそくかたき契りは

思ひわびうちぬるうでのだるきまで戀の重荷におこる痃癖

依戀恨貧　　菅原盛長卿

忍ぶ夜の松風のみか颯々とやぶれ紙子のうらめしの身や

題しらず　　休甫

きぬ〴〵の東じらみにかく恥は我ふる夜著のうらみなりけり

隔戀　　未得

ねやのうちにひきてなくして只獨ふすま障子ぞうき隔なる

彦七といふ田夫が留守をうかゞひて女のもとへ
忍び行きけるに其人しはぶきければ女のよめる

本歌
彦七が顔をするとも咳氣故かくれぬせきを今はやめてよ

障戀　　路守宗増

更くる夜に忍びてかよふ部屋の戸は咳氣のせきも障りとぞなる

君とわが中をあかさば挑灯に鐘になふおもひなりけり

弘重

何の因果めぐり車のわがかゝるかたおもひめをするは物うし

變戀　玄康

手のうらをかへすごとくな約束は爪糞ほどもたのむかひなき

みとく

契り置くこと薬質をやながすらんあふうけごひの日切のばすは

題しらず

思ひしみて思切るにもきられぬは身より出せるさびがたなかも

百首歌の中に恨戀　入安

たのめ置く他力にだにも叶はずば南むあみたぶりと身をや投げなん

題しらず　義綱

あふ中も今ははなれて蛤のむきみより猶うき身なりけり

積戀　安明

本歌
つくばねの空より落つる數よりも戀ぞつもりておもふ小姫子　行風

今は只心もほれつ身もなえつ中風に似たり戀のやまひは　重頼

本歌
今は只おもゆもたべぬとばかりをお目にかよりていふよしもがな　よしたか

職人歌合の中に矢師戀

かりそめに思ひそめばの矢の竹のよよにし君をためつすがめつ　久清

同じ歌合に秤師戀

我よりもうはめな君にそふことの慮外はさてもはかりがたしな　休甫

片思

寄文戀　満永

世の中はかくこそよけれ痴話文をよみえぬ人もしんきなりけり

久清

墨色のうすきなさけは曲なしと讀む度ごとに腹をたて文かきおくり君をなびけし玉章も緣をむすぶのかみでこそあれ

職人歌合の中に鍛冶の戀のこゝろを　よしたか

おゆかしとさつと一筆我職のふいごの風のたよりもとめて

題しらず　正定

難面しとかきくどきたる腰張のうらみこと葉の花もじが部屋

正

君が方へゆかん門出にのむたばこ煙よりなほたつはそゞがみ

寄貝戀　みとく

本歌
合せものはなれ物とはしりながら猶うらいやな今朝のきぬ〴〵
片みにとあはせをときて一重にしあちらこちらにとり別れぬる

顯戀

つゝむかひ涙にくれて目がくさり薬で終にあらはれぞする　來　焉
おもひ内にあれば色にや出なんとふて心より忍ぶともせず　未　得
つゝめども外にもるゝは饅頭のあんに相違の我がちぎりかな　伊　貞

懇切戀

下女と下部味噌をする〳〵する痴話をいはゞれん木の語らひならん　玄　康

寄草紙戀

おもひきや日向の人におひなれて伊勢物語いねてせんとは

おそれてはじり〱汗ぞ流れける逢ふ夜はひえのお兒なれども

逢戀　正信

思ふ人をうるしの名にしあふ時は滿足せしめふたりぬるなり　行安

稀逢戀

あうた夜に烏よないたら元興寺の鬼にかませよなれもひよこも　正信

たまさかの君の御出をうれしがり先いねころびさし枕かな　久淸

烏帽子折の戀を

折々にきてあふ君がおなさけは一しほおんにきんの烏帽子や　宗朋

題しらず

終夜ないつ笑うつかたるをぞうかれ烏と人のいふべき　弘重

別戀

來ぬ人を待つ夜にともす蠟そくのおもひこがるゝしんの苦しき

寄松待戀を

住吉のきしませぶりにねばふしてやにこき人はまつに氣の毒

難波わたりに尻無川といふによせて不來戀を　保友

本歌 尻なしの川とぞつひにながれ出る若衆こぬ夜の人のなみだは

來て不逢戀　みとく

鐵砲のたま〳〵きてもはなさぬは結句おもひのたねが島かな

逢不解戀　よしたか

みす越におめにかゝるはゆがけしてかゆき所をかく心地かな

百首歌の中に初戀　雄長老

暫くはむなさわぎしてじは〳〵とふるひ聲なる新まくら哉

入　安

心にはおもひますれど馬士の身で君をちよとは得申さず候

椀によせて戀の歌　　よしたか

つれもなくさこそ思はんと思召しめしよせらるゝ夕ぐれもがな

博奕によせて行末を頼む戀を　　ひさきよ

さいともにふりぬる君が靡きなばかるた結びの帶ときてねん

若衆によせて戀の歌　　みとく

若衆にかひなをひくもあづさ弓はずちがへじの約束のため

題しらず　　淨久

かたべにのこいと仰の文あればぞく〱してぞ嬉しかりける

待夜蠟燭　　空存

蠟燭のしんきり〱と來ぬ人のあひづ待間に夜は更けにけり

未得

わが戀はまだ初心なる下手連歌さしあひ有りてもどろのみかな

題しらず　　　貞因

夢になりと見るか〳〵と思ひねの目さへましくしあはぬ戀かな

橘諸兄

たらしつゝといひ角いひ云ひなびけ君にちとのま逢ふよしもがな

職人歌合の中に　　　民部少輔嘉隆

わが戀はひとつもあはぬ足拍子木履かた〳〵草履かた〳〵

雙六によせて不逢戀　　　未得

よきめをとこひねがへども雙六のさいはひなくてあはぬ獨りね

職人戀歌合に桶工によせて　　　よしたか

君が顔うつしてほしや水桶のわがおもふその心いつぱい

馬士戀をよめる　　　久清

戀の歌合の中に立名戀　　久濟

鋸のめよりも名をばたてちらるゝ櫛のはもじな戀や君ゆゑ

同じ中に船頭の戀

君とわれ情をかけつ帆をかけつ波も名さかもたつ舟の上

大阪に助三といふもの虎助といへる少女を戀ひ煩へをる見て　　保友

祐成も助三も虎を思ふ人それは大磯これは大阪

戀病をいやしてよとて藥師に祈る人を見て

本歌

こぬ人を松原通いなば堂やくし參りに身もこがれつゝ

百首歌の中に不逢戀　　雄長老

我戀は拍子もきかぬ下手鼓あふことなしに味のわるさよ

不逢還戀　　宗朋

若衆の面影にたつ空見ればば折あはれなるすばり星かな

戀の歌合の中に馬士の戀　民部少輔嘉隆

我思ふ君をのらせて東路の果しなきまでおうて行かばや

尾張國笠寺によき兒ありと聞きてすきもの見むと

て行きけるにかくれてげればよめる　讀人しらず

兒みむとさしてきたれば笠寺の眠藏の隅にひつすゑて置く

題しらず

本歌
思ひより身うちの皺のいやましに君に年をもよらせけるかな

三年戀ひても難面かりければ　宗朋

桃栗のみにやならへる戀の道三年してもならぬつらさよ

立名戀　見とく

布ならぬ我名を白くいひさらすあくたれものの口のさがなき

音にきく耳の比丘尼にえあはぬは熊野に祈る甲斐やなぎの薬

見戀　元安

菩薩よりたふとき君の姿(すがた)見る目には佛(ほとけ)もなかりけるかな

百首歌の中に戀歌　入安

古への貴妃かあらぬか我目にはそよや霓裳(げいしやう)羽衣(うい)の小姫子

玄康

海で水あぶる若衆の鹽尻を見るに思ひはふじの山ほど

不見戀　貞德

若衆もたゞ我しりの如くにて見んとすれども見られざりけり

見不逢戀　元安

見る度(たび)にいとゞしんきの花むしろしく〴〵なきて獨ねぞうき

百首歌の中に戀歌　入安

古今夷曲集　巻第七

戀歌

題しらず　　民部少輔嘉隆

思ふ人の心つよきは重籐（しげどう）の弓や八幡ひくにひかれず

百首歌の中に初戀　　貞德

戀に人腎虚（じんきよ）するこそ道理なれ見そめしにだに腰がぬくれば

職人歌合の中に鞘師によせて忍戀を　　民部少輔嘉隆

忍ぶ夜の太刀や刀のつかの間（ま）はさやの中にも身をかくしてん

百首歌の中に聞戀　　入安

垣ごしにしらする音のきこゆるは滿（まん）十六になる人やらん

立康

いにしへは爰にいもじの跡とめて今も踏みるたゝらはまかな

題しらず　貞徳

思ふ子に旅をさせよといふことは我がしてしらぬ親のことばか

舟中にて雨にあひて　　　　　　　　宗　也

あいさめの刀の小尻ぬらさんと苫をくゞりて舟よばひする

西國にまかり下りけるによこ波しきりにて人々

舟にゑへりしによめる

皆人の舟にゑひたといふ事はさかしほ風のふけばなりけり

室の湊につきてよめる　　　　　　宗　因

一々におしならべたる友舟の十艘室(むろ)のとまりにぞつく

但馬と因幡との境るぐみといふ所に雨どまりし

けりいと狹き家なりければよめる

主從者たびにしあれば里の名の居ぐみにしたるかりの宿(やど)かな

香椎の浦よりかへるさに舟を遙なる干潟のさき

をまはさせて多々良濱をあゆみ行くとてよめる

百首の歌の中に　雄長老
草枕飯をばもたで椎の葉をすくひ物にぞしたる春かな
世のことわざにより思はずひなに年をへけるに　行安
故郷を思ひ出でて
赤子もぞ今はかぶりをふるさとにあはれあはゝや手打するらん
百首歌の中に　入安
今はたゞ腿もすぶらもはりまがたしかまのかちの旅の苦勞さ
西國へ罷り立つ日難波堀江をこぎ出づるよりまほにて
とも船のならび行く折によみ侍りし　行風
帆をかけてひいふうみつの浦風に走りごくらや足はやき舟
海路旅のこゝろを　淡路守宗増
雲霧もはれもののなればうみわたる時分をみてぞおし出す船

しんこ馬に附けたる荷さへ名におふやねぢたる藤のつゞら町とは

へそ村といふ所にて

賤の女がつむげる糸によりて問へば所の名さへへそ村といふ

久保田といふ所にて雨のふるによめる

雨ふりの夜道をゆかば旅人のふみかぶるべきくぼたまり水

沓掛にて

茂りたる庭の柳もかゝりよしと立ちとまりける沓懸の茶屋

伊勢桑名の邊ほし川あさけ日ながといふ三ヶ村

をよめる　　西行上人

桑名よりくはで來たればほし川の朝げはすぎて日ながにぞ思ふ

旅の歌　　宣相

足引の山こえかぬるひるとばにしんこ馬こそ床しかりけれ

熊谷宿にて破旅籠くふとてよめる　讀人しらず

たきたつるはたごの飯のあつ盛を手にかけてくふ熊谷の宿

片瀬こしごえ懐島といふ處を通るとてよめる

かたせより腰越とほる旅虱ふところ島やとまりなるらん

或座頭關東より上りに上戸が原といふ所にとまりしをいたはれる大名より酒にそへ給へる歌

本歌
行き暮れて上戸が原を宿とせば酒やこよひのあるじなるらん

木曾路はつは坂といふ所にて客僧にあひ暫くかたりて年はいくつと尋ねけるに六十四といへりければ　宗也

客僧の年はと問へば六十四はつば坂とは九々にあひたり

伊勢路つゞら町といふ所にて　ちかよし

題しらず　　　　　　讀人しらず

あなきたな江尻を出でて行く人の足からくだりかゝるはこねぢ

親しらず子しらずといふ所にてよめる　　　　宗易

親しらず子知らずなれどこゝにても留守する妹が事をのみこそ

由井蒲原にてよめる　　　　正成

のる駒ののがみをゆひて行く〳〵もなつきてぞよきかん原の道

山中にてよめる　　　　徳元

本歌
どちこちのたつ木もしらぬ山中に覺束なくも呼ぶ茶屋がかゝ

かたびらの宿にて雨の降る日よめる　　　　讀人しらず

しるき道ゆきゝの人のすそみればみなどろぞめの肩衡の宿

江戸に著てよめる　　　　とくげん

京と江戸兩道かくる武藏あぶみさすが駄賃はのるもうるさし

宇津の山にて　　未得

乗りかけのつゞらをりして疲れたる馬には沓をうつの山越え

飛鳥井殿鞠子の宿通りたまひける跡よりゆく折しも馬の沓もとむるにねの高きなど下部どものいふを聞きて　　法印玄旨

鞠子川くつ音たかく聞ゆるにあすかひたまへ先にありく

同じ河に大水出しを越ゆるとてよめる　　歌慶

大水に渡るかゝりはのべあしやえもんながしの鞠子河かな

みとく

馬のあし四本かゝりによるなみの沓音たかく越す鞠子河

百首歌の中に　　玄康

暮れかゝり鞠子のやどのありければ早く留りてくつろぎやせん

出女が紅まへだれの赤坂のあかぬ姿にとまる旅人

故郷の者文使に通るに途中にて行きあひてよめる　　正成

東より文箱もちて通る身に逢うて嬉しきふた河の宿

荒井舞坂にて

波のあらい船路なんなくこす上は只何ごとも思ふまひざか

袋井の宿にて大雨降りければ　　信海

とゆ合羽ひつぱるさめの籠なれば番袋店のこゝちこそすれ

保友

行く末も遠江路の旅がたなす袋井をやかけ用の宿

佐夜の中山にて　　讀人しらず

旅衣たちよる寺に茶はなうてのみてすぎ行けさゆの中山

家もなき山路もてこしやき飯にきるゝ命をむすびとめずや

東のかたへ出立つ馬上にてよめる　近吉

本歌
相坂の關の清水で茶屋のかゝ今やかすらん餅につく米

松本にてよめる　德元

旅人の足手かげをしまつもとの茶屋も千年とちぎる餅かな

石邊にてよめる　友以

里の名の石べをひるはくさつなる姥がもちゐの過ぎし人かも

熱田にて　正成

舟の上ゐはぬほどしものむ酒のかんもあつたの浦に著きぬる

尾張のさかゐばしにて　藤原光廣卿

打ち渡す尾張の國のさかゐ橋是やにかはのつぎめなるらん

赤坂にて　保友

出雲と讃岐へ使僧つかはす門出に　信海

機嫌よく旅にいづもの門出にさすがに祝ふ酒のさんしう

芳野の者今年ゐ方なればとて安藝の宮島へ賣買にまかりける餞別　恒貞

出たらばさぞな仕合よしのより今年は方もあきの宮じま

羇旅

題しらず　西行上人

七瀬川やせたる馬に水かへばくせになるとてとほせとぞ言ふ

未得

本歌
山城の木幡の里に馬はあれど駄賃なき身はかちにてぞゆく

題しらず　行重

古今夷曲集　巻第六

離別付羇旅

本げこなりし者今は宮の御方につかへ侍るが御所の御供して江戸へまるかといふうまのはなむけに　　信海

さる間下らせたまふお江戸にて仕合もよくのほれ助四郎

小濱氏なにがし江戸へまかられけるに足袋五足おくるにそへて　　晋當

東路へくだらせらるゝ此たびはごそくさいにてやがて御上り

うとからぬ人の他國にまかるに詠める　　休甫

鐵炮の玉きはるまで悲しきははなしゝ人をはなしやる旅

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　徳元

千早振神につかへてあらよねのこぼれを拾ふつゝをねぎ哉

心あきらかならん事を神に祈りて詠める　　　　　　　　正定

正直の神のちかひのかの字にし濁をさいた身をいのるなり

氏神の祭りの日みきいたゞくとてよめる　　　　　　　　滿永

信あれば德利にいるゝこのみきをいたゞく度に手もあらひよね

題しらず

なまぐさき戀をもいのる神なれば御前でとるもみくじらぞかし

百首歌の中に　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　平時頼朝臣

神まゐりするとも心あくならば利生はなくて罰やあたらん

丹波杵の宮にて　　元理

つく事を守らせたまへきねの宮米はもたずと連歌なりとも

びちう吉備津宮にてよめる　　法印玄旨

神はきねがならはしなれば先搗きて團子にしたききびつ宮哉

題しらず　　器音

本歌
あふみなるつくま祭の夜宮には物うりさへやかづく鍋錢

筑紫安樂寺にてよめる　　友知

おぼしめす所へひよつと飛梅はまことに自由自在天神

題しらず　　路春

善光寺それにはあらずめぐる日の牛にひかれてまゐる天神

百首歌の中に　　入安

烏帽子きて神の御前にひだりをり右をりしつゝ見ゆるはふりこ

なりこの御歌は明神此頃の御神託なりといひす
てさり侍りぬ

霜柱氷のはりの雪のさす雨のたる木の露の草ぶき

夢想の發句をひらくべき心侍りける折柄によめ
る　　　　　　　　　　　　　宗　　恒

本歌
願くば花のもとにて連歌せん其二月の天神の日に

神子の化粧して神樂にたちまふを見て　　　久　　淸

山崎やせんげんたりし兩鬢を油にひたす八幡の神子

月次の會にて　　　　　　　　　　來　　焉

祈るなり若衆にはあらず和歌の道に冥加のあらせ玉津島姫

題しらず　　　　　　　　　　　　一　　圃

めでたいに酒くむ人のにこ〳〵と笑ふ家には利をえびす講

君が代に上下萬民もてはやす大豆や千年の數に節分

祝歌

來　鶴

須彌ほどに積みおく芥子を君が代の千代に一つの數取にせん

器　音

本歌アリ
君が代はいく千代鶴の羽はゝきてなづともつきぬ茶臼なるらん

雲居和尚

道にいる末繁昌のかゞみには藤氏源氏の家を見てしれ

神祇

此集あみ侍るなかばにいづくよりともしらず白衣のをのこのきて此歌も集にくはへたまひねといふいづかたよりと問ひ侍るに我は鹿嶋のもの

古今夷曲集 巻第五

賀付神祇

元日祝　　　行　風

二本づつ日本の門のまつたけは千年を千代の證據にやたつ

應其上人

書初をすゞりの水に鳰のうみはつかひほすとも君が代の春

正月三日祝の心をよめる　　　貞　徳

三日月の影ますやうに明日よりは猶よからうといはふ春かな

祝ひのうた　　　利　清

幾秋もかさね土器手にとりて汲むともつきじ菊の酒壺

節分によめる　　　道　僖

鬼は外福は内へとうつ大豆の當りてひるかやらくさやふん

百首歌の中に除夜　雄長老

鬼は内へ福をば外へいだすとも年のひとつもよらせずもがな

歳暮　　恒貞

臆病と人はいふとも求めたしおいくる年に迯げん脇道

讀人しらず

酒のまず餅をもつかぬ身どもには年の一つも御免あれかし

長嘯子

いにざまに置きみやげとて眉の霜かしらの雪をくるゝ年かな

尊朝法親王

年の矢のかぶらもたけて春はたゞ障子一重のへだてなりけり

南歌

今日毎に嘉例はづさで一つ宛老をもてきてくるゝ年かな

坂東の俗除夜にいり大豆こしらへる時やらくさ
やふんといへる言葉をもてよめる

ト養

あたるまの久しき程に炭の火もぜうとなりてや足のひゆらん　光知

冬梅　みとく

雪の中にまづぬけ出てて咲く花は梅のこだちや鞘ばしるらん

西京八宮御所にて年のうちに春立て又の日大雪降りければ當座の和歌詠みて奉りしに四方を詞に雪の狂歌をもと仰せければかく申上侍りし　行風

東より春はきたのに西の京奥ある今日のゆきぞみなみよ　元行

東より春きたのちも西の京狂歌に今日の雪の色そふ

百首歌の中に歳暮　入安

借ちらす木葉にあらぬ錢米の未進も今日はくるゝ年かな

天神の御自愛なれば松にふる雪のしら太夫と是も言ふべし

題しらず　來爲

三密の月くらきよは十丈もつもれ九識の窓の白雪

百首の中に炭竈　入安

小野の奥雪ふみわけてかまもとのすみをねぎれば結句これたか

百姓の身におはざるおごりをなし公納米不足してけるを見てよめる　中納言大江輝元

秋の田のかり米をなし奢りなし年貢にわらや出す百姓

圍爐裏ぬりを見てよめる　貞德

田樂をあぶらん爲のいろりとて先なまかべを附けにけるかな

火桶　未得

抱いて寐て寒さを防ぐ火桶こそかさねぬ夜著の妻とぞふらめ

雪になる雲を帽子(はうし)に打ちかぶりかしらもさぞな大びえの山
尊純法親王

北山のかしらにかぶる雪綿や寒(かん)もて寒をふせぐなるべし
藤原親綱卿

草木も成佛(じやうぶつ)せんとふすまゆきかぶる座禪の床の山かな
奈良にて雪の降りける日よめる
行風

舎利(しやり)ならぬ雪佛もぞはくしきにひからかすがの御作なるべし
法印玄以

春日野の帷子雪はところからならざりしとも言ふべかりけり
松雪を見て
智仁親王

松がえのかたびら雪のましろさは十八こうのさらしなりけり
百首歌の中に
玄康

ちり／＼やちり／＼にもや飛んで行くはんま衢の友をよぶ聲

鷹狩　雄長老

攝家まで供奉する君が御狩場にすゑて出でたる鷹司殿　一頼

鷹の鈴からりともいふ音きかば鷺のみの毛もよだつなるらん　みとく

名のみして膳にはすゑぬ箸鷹のとりえぬるよりはや摑みぐひ

或館にて鷹の鳥の料理給びけるによある　正信

鷹にとられ殿の御汁になる時はたうべる人の身もぬくめ鳥

百首歌の中に夜霰　入安

さら／＼にあられん物か霰ふるさゝのひとよもさゝを飲まずば

山雪　淡路守宗増

寒き夜はいかなる歌もよみつべしあまりかゞめば人丸になる

氷　忠昌

今朝最早とづ坂本のあつごほり山のひえたる夜風ゆゑかも

河氷　久清

わすれては白き氷を砂糖かと思ひて口になめり川かな

百首歌の中に　入安

水うみの上こと〴〵く張りにけり是や近江の二十四こほり

千鳥　ていとく

風次第あなたこなたに立ちさわぎ波の音さへちどりがけかな

雄長老

餌さしめがちやくとさすべき棹河の不用心にも鳴く衛かな

むねます

霰釜しかくる爐にはおのづから置きぬる炭も冬のいろかな　可

題しらず

名において數寄する人は無地ならぬかたつきの茶の小袖きにけり　勝

亥の子餅に砂糖かけたるを見て詠める

ゐのこにし鹿子まだらのあかの餅白きをみれば砂糖なりけり　治

冬柳　浄

朽葉さへちつとも見えぬ姥柳楊枝にせずと杖にきれかし　得

寒蘆　未

人ならば脚氣といはん霜枯におれふすあしの節もかなへず　安

題しらず　入

みをつくし浪花の事もはたらけば足もとさむくひゞにあれ行く　也

寒夜によめる　宗

古今夷曲集　巻第四

冬歌

百首歌の中に初冬　　淡路守宗增

昨日今日あら寒むやとて重ね著る小袖ぞ冬の始めなりける　　貞徳

題しらず　　雄長老

冬籠る垣ゆいつけん高塀の蛛手かくなは十月になる

貧乏の神も出雲へ行くならば十月ごとに我は福人　　常林

本歌
村雨も時雨もいたくもるやねはしたや残らず水つきにけり

口切の茶の湯をよめる　　久清

けあげたる鞠の如くにぶらめきて庭の梢にありやありのみ

梢の柹人のとり喰ふを見て　　元　安

ほの〴〵とあかみのついた筆柹をもつ人丸でかぶりこそすれ

九月盡　　未　得

長月もつまり〳〵て一寸の光陰をしき今日の晦日

百首歌中に潤九月盡　　淡路守宗増

花をみて他念なければ積善の餘慶の秋もつくる菊月

めのさやも大豆の莢をもはづしつゝ見くふぞ月を賞翫のかげ

同じ夜雲りければ　玄貞

揃大豆のさやけき月のかげをとて人の口べにかゝるむら雲

紅葉　三政

立田山横すぢかへもおしなべて只一しきにもみぢしてけり

東福寺にて　保友

通天のもみぢの色を兆殿司書き移しぬる繪の具とやみん

みとく

本歌
やよ時雨猶うはぬりをたのむぞやまだ色薄きうるしもみぢに

百首歌の中に　雄長老

朱をまぜて漆ぬるでの紅葉ばも先あき風にまけて散るらん

葉　未得

壁に耳岩の物いふ事あれば何をかきくの花もはづかし　入安

翁草花咲くころは露はらひたえずとうたり常にとうたり　元安

菊を愛する人のもとにて

家主のよはひの程はちとせとの菊の籬をゆいて見まらせよ　種好

九月九日に

君が代にすんでとくりの菊の酒くめば珍重陽てうれしき　正定

本歌

いにしへのならのみやけの菊の酒けふ九日のいはひにぞのむ　二笑

十三夜

開かざる菊のこゝろも節供ぞといはんしたばのつぼみ口かな　白譽上人

本歌
秋の田をかるこにてもつ稲を重み我きるものは汗にぬれつゝ　　久清

苅稲を菩薩といへばそれを負ふ牛も大日如来なるべし　　一幸

本歌
百姓の稲こなすとてする臼の音聞く時ぞ秋はかしまし　　入安

百首歌の中に擣衣

露木の葉きぬたの音もはら〳〵と誰秋風におびえうつらん　　貞德

槌の柄をしとゝ握りてふるさとにうつは男をこひごろもかな　　玄康

寺のうちにきぬたの音の聞ゆるは彼の大黒のうつ槌やらん

百首歌の中に菊　　淡路守宗增

月見よといもが子供のねいりたを起しにきたは何かくるしき

河内國壺井といふ處にて月を詠めをりてよめる　元　安

唐臼（からうす）や壺井の中へかきいれてたれ水とりの望月の影

八月十七夜八宮御所にて當座に月の和歌よまさせ給ひみきたまふ折から今宵の月を題にえびす歌をとおほせければよみて奉り侍りし　行　風

望月の鼠がわれとかぶるやらよべからちょとはたのへり行く

廿日月　未　得

詠（なが）むれば廿日鼠のおのづから今宵の月のなりぞちひいさき

百首歌の中に霧　雄　長　老

朝霧のきりの籬（まがき）のかきのもとを通（とほ）り行く人まるぬれにして

秋田　利　忠

参議大江秀元

本歌
相坂の關の清水をかいすぎば風をやひかむ望月の駒

題しらず　貞因

そひあきし妹といかはり見る度にものくさからぬこもち月かな

淨久

望月を汝が箸にかけんとやほつかり口をあきの夜の空

八月十五夜　元安

村雲のたちまちきれてさやかなる秋の中ごのめいよなる月

行安

詠めやる三五の月の光りには二千里欲も忘れ果てたり

名月の夜畑なる芋ぬすめるをとらへければ盗人
のよめる

紅葉狩の山邊にて人々醉へりと云ふを聞きて　春　房

まつかいに醉ひぬる顔は紅葉見に林間をして酒すごすゆゑ

但馬にてある人の庭にあひともに繼木せしが今年なり侍ればとて得させける返事に　澤庵和尚

あひうゑて梢になりしかきくけこ御音信こそ通じたりけれ

題しらず　宗朋

あまたある中で取分しぶかきをむくいめきゝに下手の皮かな

言總卿のもとにて櫟の菓三方にもりて出しけるに狂歌とおほせければよみ侍りし　行風

百敷のお座にいちゐの菓こそ公卿のうへのくらひものかな

駒迎　未得

信濃より木曾踊して引く駒のまきぬる髪も茶筅やこのさ

片脇へつとそびけろうみたくないに邪魔入り申す月のむら雲

名所芋　貞清親王

本歌
山城の美豆野の里の芋をほりていくたび淀に賣りありくらん

あまたともなひて或寺にまかりけるに手作なりとて山芋料理せられけるによめる　宗順法師

本歌
くてのみや人にかたらん山のいも手毎にほりて家土産にせん

題しらず　讀人しらず

引きかづくかたびらごしに月見れば雲井を走るやせ虱かな

八月十五夜月のもとの酒宴に盃の數も重なりければ九獻とこそいへさまではいかにと人のいふによめる　源重通卿

月を今宵賞翫なれば汲む酒のさん五の十五ほさんとぞ思ふ

大空を夜ありきしつゝあかせるは月のかつらの男ざかりか　未得

まばらなる軒の穴より詠むれば月の鼠も桁はしるなり　長尊

三味線の音をおもへとや風の手にくもはちりてれてれる月影　三政

月のもとの酒宴

世捨人かいや夜は捨てず月の本の酒にこゝろがうき藏司なり

對月明莫往事思といふ詩のこゝろをよめる　藤原氏成卿

ながむれば顔のゐくほぞ皺となる月の鼠がしほを引くかよ

月の夜日醫師のもとにてよめる　元安

ねぶたげも遉にさめてよしみねや只目ぐすりはあきのよの月

月を奴子詞にてよめる　よみ人しらず

本歌
墓原に人まつ蟲のこゑすなり我かと行きてとふこともいや
ていとく

たぎらする茶の湯の爐路の下草にりん〳〵と鳴く松むしの聲
淨治

草むらにむざとな鳴きそくつわ蟲野飼の馬のはむこともあり
やすとも

鷹犬の鈴蟲馬のくつわむし鳴く野や殿の狩場なるらん

[illegible]月[illegible]
行風

月にあそべ五尺にあまる身なりとも一寸先はやみのうき世ぞ
よみ人しらず

腰もとへ似たり金鍔さし出して山のはすはに見ゆる月かな
友知

花の露も日影うつれば蛭に鹽ひるはしほ〳〵となれる朝貌

玄　　　　康

朝酒をおほく呑みなばくるゝまでたゞこれ槿花一日の醉

色鳥　　　　　　　　　　　　　　　　少將藤原秀宗

渡り來る數も限らず一つれに二十三十四十からかな

題しらず　　　　　　　　　　　　　　保　　　　友

よりあひて山から日から四十からから〳〵と笑ふみゝづく

夜更けて鶉の鳴けを聞きてよめる　　　　權大僧都心敬

秋の夜のくわいと更けつゝふけりしは夢かうつゝかうつらにて候

鳴　　　　　　　　　　　　　　　　　　未　　　　得

羽がきの數を所作にやむば鳴の看經をするあかつきの聲

百首歌の中に松蟲　　　　　　　　　　法橋由己

色をみなへしてとはねど飯にむす粟つぶほども替らざりけり

百首歌のなかに薄　雄長老

招きよせて化さんとてや秋の野にふれる狐の尾花なるらん

ていとく

落武者のおづるも道理薄の穂いり日を招く鉾に似たれば

薄を吃詞にてよめる　よみ人しらず

秋の野にかゝ風ふけるたゝたびにたゝたれまねくはゝ初尾花

百首歌の中に蘭　貞徳

くさきほど匂へば是や巾すらんしまにんにくの蘭とも

雄長老

藤袴もゝだち活ととりもせで裾野をくだり露にぬれつゝ

槿

める　　　　　　　　　　　　ていとく

わる口を悪しきをどりにいふことは先笛吹におひやひつこめ

津國福嶋といふ所にて踊にをのこも女も群集す
るを見て　　　　　　　　　　　　行安

秋風のふく島人のをどるとてすゞめ鮨ほどあつまりにけり

相撲　　　　　　　　　　　　　　器音

本歌
笑種ことばにかゝるまけ相撲たま〳〵出ては手をもえ取らず

相撲にまけぬる方いなびけるを見てよめる　　みつなか

かつにのり手とるに足を取られつゝ負けぬる方ややすまふといふ

百首歌の中に女郎花　　　　　　　入安

秋の野に露おもくさの女郎花色はにきびか粟のむせるか
　　　　　　　　　　　　　　　　休甫

猫脚のぼんたてにする功徳茶の哀れになぐるくび玉まつり

踊　　久清

雨の手をふりつゝ拍子打つ時はあふぎを腰にさしをどり哉

行風

出たちはどれもあさ衣あさ〳〵と淺黄にそめてきそ踊りかな

源雅純朝臣

見るに聞くに程拍子よや振のよやうたも上手や小町をどりの

未得

かけられてあうむ返しに來るこそ小町をどりの歌のさまなれ

近吉

はやしぬる踊の庭に燈籠をともして持つもこきり子ぞかし

をどりの拍子揃はずして見る人わろ口いふによ

古今夷曲集 巻第三

秋歌

百首歌の中に秋たつ心を　　貞徳

涼しさを巻籠めて來る文づきは一葉の風のちらし書なり　　入安

本歌
秋きぬとめには見えねどひく風のしはぶく聲に驚かれぬる

七夕　　雄長老

盆またで聖靈まつるたなばたにむくる時宗の尼の川水

初秋月　　行風

御簾ごしにながめまるらせ候は只文月の透うつしなり

猫のため盂蘭盆會まうけける人を見てよめる　　休甫

來る秋と夏は過ぎ行くさかひめのまん中臣(なかとみ)のはらひするなり

賣りためて錢口おほく結ぶべし是ほど酒がいづみなりせば

題しらず　　淡路守宗増

座頭衆すゞみとなれば酒盛のてうしを請うて平家かたれり

百首の歌の中に　　前大僧正慈圓

しづの女も大路井筒に夕涼みふるかたびらの汗洗ひして

蓮　　むねます

花瓶にもさすてふ花と聞きしよりはちすを見ればうそぞふかるゝ

種好

雨がへる蓮華にひよつと乘たれば生佛とや是もいはまし

荒和祓　　未得

貧乏の神もなごむや借錢は今日みな月の晦日ばらへに

淡路守宗増

數おほう江鮒のうろこふくしまの人は仕馴れてよいすゞめ鮨

宗　鋪

青たでもそへてはなさん羽なくて飛ぶほどうまき雀ずしとは

未　得

祇園會

精舍には諸行無常となるかねのしやぎりしきりに替る祇園會

行　風

ひいてくると見れば過行く山鉾よ是や祇園の會者定離なる

是　急

炎天

寒よりも百倍あつき炎天は身にきるもののわたくしでなし

泉

みとく

夏の日の暑氣をはらふいづみこそ手にむすぶてふ水の印なれ

貞　德

蚤　道明

身の皮もほりぬくやうに痛むるは是や大苦ののみの蟲なる

題しらず　宗恒

本歌
蚤よりも蚊こそうたてく思ほゆれたれか破りし此紙帳ぞも

蚊　宗朋

罪あるもあらぬ人をもいきながら鬼はかほどによもや食ふべき

題しらず　一根

本歌
我きても久しく破れぬ帷子は蝨がよみをやおほくいれけん

久清

本歌
こい捨う我帷子の水いろはひとしほとこそ思ひそめしに

津國福島に雀鮨といふ其處の名物なりけるをよめる　親之

ねぢつけていざやちぎらん己れとはまだおちさうもなき小姫瓜

題しらず　宗鋪

あさ瓜をはやしてくへば喉笛もひやり〳〵となりにける哉

茄子　みとく

おのづから茄子の色を紫のふくさにつゝむ茶入とぞ見る

読人しらず

本歌
などて角はや年よりになりにけん水なすびぞとむしりしものを

玖也

長らへて何をなすびの畑に生ふる若きをこそは人もちぎらめ

津國今宮わたりに干瓢といへるものを老若わか

たずこしらへけるを見て　利忠

本歌
春植ゑて夏むきけらし白妙のかんぺう干なり尼もかゝらも

本歌アリ
名にめでて折らぬばかりぞ鬼あざみ我おちにきと人にかたるな

行風

野にたてり夜風ひきてや撫子のはなたれたりと見ゆる朝露

正信

枯れさうな富士なでし子を育てんと水汲みかくるたごのうらが身

下野國奈須野にてよめる

知度

風の手もさへなおそろし處がらあだをなすのの石の竹にや

題しらず

西行上人

撫子のませにぞはへるあこだふり同じつらなる名をしたひつゝ

瓜作れる人の挨拶に

高壽

名をしたひこんせつぶりの雨露が梵天瓜ぞようそだつなる

姫瓜

末得

蟬　春房

帆柱にこれも見よとや船岡の山の梢にせみが取りつく

鮎鱠　蒲永

つくりしも河の瀬ごしの鮎なれば生酢をもまたあさらにぞもる

鮎料理の座にてかゝる鮨もがなといふ人のある
を聞きて　是急

本歌アリ
鮎くての後の心にくらぶればむかしは鮨もおもはざりけり

題しらず　数二

苅る人もはこびし人もつく人もふどしのみなるはだか麥かな

夏草花

結句そちに人くさいとや嗅ぎぬらん香をかぎよりし鬼百合の花

淨治

照射　　　　　　　　　　　　　貞徳

的よりもともしの影にとんで行く鹿子の星やゐにくかるらん

百首の歌の中に螢　　　　　　　玄康

猿の尻はまつかいなれば螢火も昔よりかう有りぞしつらん

入安

若衆を思ひのたまかほたる火のむねはこがれで尻ぞこがるゝ

宗増

白露の玉藻の前が亡魂か螢も身よりひかりはなてり

法橋山己

やどをかといはぬばかりぞ飛ぶ螢よるにしなれば是も火尻は

高野にてよめる　　　　　　　　成安

火で候かいや火にあらず高野山谷三つこえて螢とぶなり

早苗　　宗圻

早乙女の骨を折りつゝうへ〳〵の地頭へ米はとるさなへかな

五月五日珍客來れるに粽を出して挨拶に　　行安

今日ことに聞食れよ御壽命の數もやちたびもゝちまきをば

久清

印地にし深入りしつゝ深手をば負ふはふかくな深草の者

五月五日雨降ければ　　左衛門督藤原義景

風の手の礫のやうにうち散らす雨こそ今日のそら印地なれ

笋をよめる　　久清

竹の子や疱瘡するとかろからん絶えず雀の羽風あつれば

五月雨　　滿永

五月雨に降りこめられて氣がくさりかしらいたやの煩ひとなる

やるまいぞやるまいものを時鳥きいたか〳〵今のひと聲

淨　　治

郭鳥筥根うつぎになく聲を聞いてわすれぬ地獄耳かな

愛宕の坂にて馬の沓を見れば福なるよし人の語る折しも時鳥の鳴きければ

一　　幸

耳のぴくよきはあたごのひと聲を聞きぬる馬の沓手鳥かな

梢に蟬の鳴く折しも時鳥を聞きて

滿　　永

蜀魂空に本尊をかけたれば蟬の經をもなほたかうよめ

百首歌の中に盧橘

雄長老

禁庭の花さへ木さへ見えねども風薰り來るたちばなの圖司

貞　　德

陳皮にはならぬさきより立花のにほひをきくぞ氣の藥なる

ふかぐ〵と葵の上に置く露や御息所のなみだなるらん

待郭公

こなたより御本尊かけて申すべしうそにはまたぬやよ時鳥　淡路守宗増

明暮やあらおそしとてまつの戸にほとゝぎすにてすねてこぬかも　保友

郭公えきかでやあら卯の花のしらりと夜をぞ待ちあかしぬる　休和

時鳥口なしはらの名におひて鳴かぬやじやうのこはた山邊

聞子規　淨久

ひとり居によつほととぎす音信の聲聞くときぞ氣は散じける　宗鋪

古今夷曲集　巻第二

夏歌

百首歌の中に更衣　　入安

ぬぎて今日かへす〴〵も恥かしや花みるほどの借衣のそで

雄長老

めをと中に只二つもつころもをばかへあひて今日の筈やあはせん

卯花　　貞徳

月出づるその方角も卯の花の東しらみに夜は明けにけり

卯の花はどこからふれる白雪と空に不審の雲や立つらん

葵

春の日は長鐺ながらさゝの葉の一よばかりになれる石榮（いしつゝ）
淡路守宗増
くどくゝとするまに春はつき弓の矢をいるやうに日は立ちにけり

まとひつゝ藤にしたゝか締られて難儀さうなる松ふぐりか

貞徳

紫のふどしに似たりふぢのはな松のふぐりを咲きてつゝめば

淨久

見るに日は西へねぢれど藤の花じきになるやらひだるさもなし

池邊の藤を月出づるまでながめをりて　友以

池水にひかめく月はしら藤の棚から落ちてぬれ鼠かな

暮春　重故

春は猶ゆるりくわんすの煎じ茶のにへ花をのみあそび暮らせり

百首歌の中に三月盡　玄康

三春の約束よとて來りしもけふつきてこそ歸るなりけれ

雄長老

本歌
やかずとも草の餅をば春日野の春なぐさみにもたせたらなん　行榮

三月三日

臼に粉も蓬も入れて杵をとりつく音も先がたひしの餅　行風

御祝ひによりき家の子あつまりてつくやくふなりどさくさの餅　一圃

酌人のこぼるゝばかりもるにこそはや置きたまへもゝ桃の酒　宗恒

題しらず

本歌
鮎の子のわきてながるゝ泉川いづみ酢にての料理床しき　入安

百首歌の中に藤花

大臣のゆかりの色かむらさきの藤浪ながき花のふさゝき　雄長老

水にすむ蛙がうたをよくきけばとかく卑下なり愚意々々といふ　　未得

くちなはの追手からめて取りまけばかはづ軍のにげ道もなし　　遠江守源經行

苗代をおとせる水に落ちゆくは軍に下手のかはづなるべし

百首歌の中に杜若　　雄長老

水でとくにかはのあやめ杜若にたりや似たりとにためきにけり

躑躅　　未得

咲く花の顔は上戸の色ながら名は下戸のすくもちつゝじ哉

欵冬　　藤原秀直朝臣

咲出し八重山吹のまつ黄なる色も甲州一歩なりけり

題しらず　　重安

本歌 丹波山いが栗にじる秋はあれど住吉うらの春のはまぐり　明

帰雁　宗

たはけとも中々いはじ明くる夜の花を見捨てゝ帰るがんかり　行安

名残をしく思ひまゐらせ候可くをかなに書きても帰るかりがね　教二

帰るまに古郷の花のちりたらばあちらこちらですつかりぞせん

百首歌の中に春駒　立康

乗りとめてすそもしてまし春駒のへうたんからや井手の玉川

苗代　貞徳

みな口をよく〳〵まつれ秋くれば人の命をつなぐ苗代

蛙　満永

さかな舞の扇子の風もいやで候今をさかりの花見酒には

落花をよめる　忠精

櫻ばな散りしく庭をはきありく雪踏の皮に波ぞかゝれる

題しらず　よみ人しらず

櫃川のはたに生ひたるかば櫻ちるもぞ花のとぢめなりける

岡部氏内膳正館にて鯛の料理ありけるに　重頼

本歌 雁の汁きく・の酒のむ秋はあれど春の海邊に濱やきの鯛

櫻鯛　藤原言總卿

上下にもてはやしつゝあぢはふや花も實もあるさくら鯛とて

近江鮒　正繼

さゝ波やしがからし酢でくふ時はたれが口にもあふみ鮒かな

題しらず　淨久

楊貴妃の名ある櫻を見て　　貞清親王

楊貴妃の花のかほよしさぞな〳〵天のなしたるさくら色なり

滿永

一面に咲きつゞきしは春の日の長屋づくりの家ざくらなり

せわしくも小枝かさなる軒口はめとはなつきな家ざくら哉

花下の酒宴によめる　　三哲

鹽竈の花見の酒のさかなには櫻鯛をや滷やきにせん

ちいさき花の木の枝を折れるを見てよめる　　古生

兒櫻のよろひはあれど頬當をもたでやはなのさきを切らるゝ

依花恨風　　行風

ともすれば花の顔さへ打ち散らす風の手くせをなほしてしがな

題しらず　　宗恒

こつきよし色は猶よし匂ひよし已上みよし野の花の勘定　行風

葛城や天狗のはなのそれならでによつと高間の嶺に見えたり　道明

いつとてもよう來たとだに仰ぬはをしほのはなで人やあしらふ　行安

糸櫻

わけもなく只わく〳〵と結ぼれし氣も打ちとくるいとざくら哉　一圓

姥櫻

見ほれてはたちもえさらず花故に腰ぬけとなる姥ざくらかな　貞德

白壁をつけたる宿の庭にさく花は豆腐のうば櫻かな

題しらず　　教二

立寄らば大木のかげの花見せん咲きちる程に餘計ありやと

見花　　春清

見櫻や立ちて見居てみねて見ても猶愛らしき花のかほばせ

一圃

をだ巻のくるり〱とくりかへしみめぐりめぐる花車かな

本願寺二所の庭の花を見てよめる　　宗恒

六條の染物ならぬさくらにもおもてうらある花のいろ〱

芳野の花見に出立つ道にてよめる　　教二

晝食はくはずとゆかんみ吉野の花のしたにてうゑ死ぬるとも

名所花　　保友

櫻ばな見るめについてはなれぬは芳野漆のあればなりけり

足にあかゞりといふ物ありて春もいえざりければよめる

あかがりも春は越路にかへれかし冬こそ足のうらにありとも

或人のいはく猿丸太夫が歌なり

春草　行順

たむぽゝの花のちょつと咲く頃の野山はやしはおもしろいなのう

小米花　未得

それは杵是は木の根にこぼれけり小米の花の風にくだけて

沉丁花

竹垣を霞のきぬのふせごにて匂ひをとむる沉丁花かな

花見の袖のつどふを見て　保友

本歌
見渡せば柳櫻にみやこ衆だてこきまぜて行く東やま

題しらず　久清

春の日に蔓る木々の枝ごとにめはなはあれど耳なしの山

百首歌の中に早蕨　淡路守宗増

山際に左義長をせし跡とめてわらびそろ〳〵もえ出でにけり

春月　一圃

朧なは猶もあぢよきもち月とおもひつかするうす霞かな

久清

照る影も朧ほろ〳〵ふるあめに笠をめしぬる春の月かな

百首歌の中に春雨　入安

なになりとこのめ春雨つれ〴〵と振舞はたゞとにもかくにも

雄長老

春雨の風にしたがふかいだうのじるくなれども早かはきけり

梅花をよみ侍りし　　　　行風

色に出て見ゆる女の智慧のみか梅も諸木のはなのさきなり

百首歌の中に梅をよめる　　　　雄長老

しう殿の祕藏の梅をかいだらばすばえの先ではなやつくべき

宗恒

祕藏せし花を一枝こうばいの色にあか手の皮もするなり

柳のもとに梅の咲けるを見て　　　　行風

春の日のたきものらしう梅が香を柳の髪にとむる風の手

百首歌の中に柳　　　　雄長老

本歌
櫻にはあらぬはるべをこきまぜて枝をたれたるはこ柳かな

満永

俄にもあち東風と吹く風の手にひきとつらるゝ柳髪かな

萬歳をよめる　不白

萬歳の祝ひとならば錢の數八百八十四文やれかし

百首歌の中に殘雪　貞德

年男あうて日數もたゝざるにはやくもとける雪女かな　宣相

いたどきに尾にまた雪のむら消は駮毛のやうな生駒山かな　來爲

ちよこ〳〵と澤邊に殘る雪はたゞまつしら鷺がすくんだと見る　滿永

本歌
春日野はけふもなやきそ嫁がはぎまだ雪しるの妻にこもれる。

題しらず　忠精

春の日にかしらの雪げ落ちはてゝ只はげ山となるうたてさよ

貞　　德

錢(ぜに)かねでねをさすならば鶯のほう法華經も一ぶ八くわん

行　　安

ほそ〳〵と鳴く鶯の初音には朝とうまるも及ばざりけり

宗　　俊

梅がえはそなたのえてん樂(らく)さうに口笛なるかやよやうぐひす

若菜のうた　　來　　爲

籠(かご)を手に提げつかゝへつ名にめでて鶯菜をやつみて入るらん

百首歌の中に　　入　　安

よもすがら叩くは唐土(から)の鳥ならで日本の人のくひななりけり

懸想(けさう)文(ぶみ)をよめる　　貞　　德

いふ事をきけば腹いたむく〳〵と臍の下までけさう文かな

元日の霞をよめる　如風尼

九重もはるの霞のあみの日に風たまりてやけふ長閑なり

酉年の元日によめる　行景

水は本へ返辨申し酒の字の作りをとりの年ぞきにける

百首歌の中に子日　玄康

女松をば子日の友にひかれなば陰嚢なしとて笑はれやせん

霞　貞徳

膩さうで奇麗なものは歌人の口にかゝれる山のは霞

題しらず　法心上人

足なくて雲のはしるもあやしきに何をふまへてかすみ立つらん

百首歌の中に鶯　玄康

法華經ぞ小鳥の中でうぐひすは最第一のはつ音なりけり

由　　　　　　　　貞

去年までの貧乏がみこぬぎ捨てゝ春きにけりなふくの上下

宜　　　　　　　　齋

目出たいといへばめでたいと言ふこそ口眞似こまね正月の禮

次　　　　　　　　良

臟太に雜煮をくらふ人はたゞ腹のはるにや春をしるらん

燕　　　　　　　　石

もろ人もけふ赤子にやなりぬらんむつきをしきの始と祝へば

保　　　　　　　　友

本歌
年こえて花のかゞみとなる餠は黴かゝるをや曇るといふらん

頼　　　　　　　　智

本歌
誰をかも仕手脇にせん高砂の松囃子する友あまたなり

春のはじめの歌

哥　慶

本歌
春たつといふばかりにや大ぶくの水氣も霞みて今朝は見ゆらん

満　永

ちはやふる茶筅もけさはあらたまりたつ大ぶくの神のはるかな

入　安

春くれば色も花香も別儀にて宿の大ぶくたつかすみかな

春　房

釣棹のたけ高からん一節をこゝろにねがふ和歌夷振り

一休和尚

餅つかずしめかざりせず松たてずかゝる家にも正月はきつ

行　安

きのふまで以ての外にさぶ六の十八公の門のはるけさ

古今夷曲集　巻第一

春歌

ふる年に春たちける日よめる　源重秀朝臣

本歌アリ
年の内の春の小袖は一しほの淺黄とやせんこ染とやせん

春たちける日よみ侍りし　行風

山眉にかすみをひきて腰すそも優なる春の立ちすがたかな

義綱

立ちそむる霞の衣のはつれ雪春のきにける紋所かも

正長

たばこのむ内より春は來にけらし烟もかすむはなのさきかな

酢たまり、苦参の咄には顔をしかむるなれば、十王の口澄だ貌、天狗のはなだかう慢ずるものも、此歌を聞きもしよみもせば、阿々とこそあらずとも、屈々とは云ふべし。現在の果にてきしかたゆくすゑを知るといへば、此わざを忘れず、今より終の夕までも、腹たてずの正直坊、笑ふのみならば、情の角菱の病ひひしく〳〵と癒え、眞丸になりなん後、人仁といふこゝろを持藥に用ひば、彼の笑ひ佛とやらんにならざらめかも。

和の元興寺に、隱期などやうの事をもてつらね書いちらすを、見る人聞く人刮ぐるよりも可笑がり、咄と笑ふに罪をうしなへば、自から情の丸うなるべきよすがなるべし。莊周がいへる菓三つ四つの、跡先を諍ひ、狼のおそろしき頰をなし、羊のあゆみの近づくをも知らぬたぐひの人は、己が迷ひに情を奪はれ、求むとも笑ふによしなかるべし。あめにます大黑の能をきくに、一に俵をふまへ、二ににつこと笑ひ、三に三界の福珠を袋いつぱいに入れ、お顏の色のくろうなるまでもて步き、笑ふ家には必ず來りて福をあたへ給ふ。これにも三郞惠美須殿、お前の海の鹽のめをし、常にめでたいを抱いて、信ある者には給んとなり。是を見彼を聞くに、機嫌よう笑ふが卽ち福德なり、菩提なる事を知れと、寬文五年十月一日にしるし終りぬる。行風が身のおろかなるをも忘れ、後の嘲を顧みずといへども、これを好まんものの爲には、いさゝかのたづきともなるべければ、なにはのよしあしのふしぶし、眞薦草のかりにも翫び、猶形にそへる影法師の如く、身をはなたずなれ行かば、をかしき色の情にそみつゝ、夷歌ときくに笑ふなかだちともなれとなり。梅といへば口に

むる中に、一際いひかなへたらん歌に、輕き病はゆるす方もぞ有りける。又昔今に落書といふには勝れたる作もあれど、かれは世を諷し人を謗り、あるまじき物なれば、是に載する事なし。古く聞き今みる歌にも、事の情齊り、笑種ならんを選びあつむとはすれど、末巻にいたりては、尺八竹の一よのみならず、三世の佛の理もあれば、巫のすゞろごとならねど、詞こはく、和歌にはいかにぞ聞ゆるをまじふる事になりぬ。是おとなびたる人の爲にはあらず、童べの殿のお尻からぎよの口遊を、狂歌にいひかふるたよりにもとて、千歌十巻なづけて古今夷曲集といふ物、みな其本に還るわざなれば、むかしをたてる名なりけらし。かくてよい春や若うならせられたと、詞に花を飾りいふより、本尊かけたかの鳥の聲をまち、紅葉を折りて簪にもし酒の燗をもし、雪女ふらい〳〵ふる妻いとしなど戯れ、春夏秋冬にいらぬ草木のえもえ知らぬたはこといひてあそぶも、かしこき君の御恵、八島の外までの家々の諺、或は頤臍の下にさがり、肩は頂の上にのほりたるやうの、唐の大和の異樣なる詞、おさあいをあひや手打川水の阿罵、いな舟の棹頭々々〳〵、土佐の手手甲、大

んには、水の月を望める獣にことならざるべし。さらば鉋をもてやまはさん、小刀にてや削りなさであらず形なき心なれば、さは徒なるべし。ゐなかにも狂歌をもてあそびね。此歌久堅の天にしては下照姫に始れりしを、荒鐵の地にしてすさのをの尊、三十文字あまり一もじによみたまひてぞ和歌となれりける。しかはあれども、人の代となりても、聖徳太子此樣を捨て給はざりけらし。いはく釋氏に西方の敎をのべ、聖の道に不屑のいさめあるが如くなるべし。それより後は文字の數和歌をうつす物から、猶しれたることのみもてつづくるとはいへど、折にふれ事に臨みて、まれ〳〵詠めりしを、きぶき數寄者ら出來て、近き代よりぞ百首二百首數百首に及びては詠みける。それが中其外こゝらの人のよめるにも、あまたの病を除かず、上下かけあはざる多かり。狂歌とて詞こそまけくもいはめ、心は正しう身を修め國を治め、妥を得彼所をしる業なれば、いかで妄がはしきをよしとせん。思ふに心正しからぬは、他を損ひ身を亡なふ佞人にひとしく、病あり上下かけあはざるは、盲聾腰曲み足たたずなどやうの片輪者に同じかるべければと、和歌の例をもて四病八病を禁

なり、末の松山さゝら波は越すともと誓ひ戯るゝあまりに、あの御のさへ、女がゆく〳〵、お目もとの入はしやうや、それをそちが報うて何せうぞなど、左禮が實になり、おは緒も今は片糸の、此方彼方に引別るゝを、妹背山の中に芳野の川のよしやといへど、印南野のいなといふ諫むるに、猶口舌たら〳〵なりければ、そちも斷りこちも然なりと、蠟虎の皮のやうにもてなすを、諸共にそとほゝゑめば、さればこそ思ふ中の小鬪諍、詞の花をちらすのみ、根葉はあらじ、先盃をさすが石木にあられ酒、心よわくもの跡をばえ申すまい、しやんとさゝせられよと、女かたへ戻させ、これより五百八十年と祝ふを、丸うなつたといひ、一國一家のわれて齊ふるも又々かくいふべし。まいて佛の道には、丸の中に心といふ文字を書きて、身の一大事を觀じ知るとなれど、こちやしらぬ生死山の鯰が知つた生死、抑も心を丸うするには、和歌にしくはなしと聞けど、その樣優ならんとすれば心たらず、艶なるは獺のたはれをのたはれ過ぎ、つよきは片田舍の者の物いふに似てなつかしげなく、鑽れば石より堅く、頭をふりあふぎ見れば、須彌の山より高しとなれば、くだれる我等の學ば

古今夷曲集序

四角柱やかどらしや、角のないこそそひよけれ。むかし〳〵いふにいへぬ物の中より、丸きものの一つおひて、二つになり三つになりし時より、夷曲歌は始まれりけり。（今狂歌といふなるべし）歌は人の心を種として、言の葉しげりそふものなれば、只情の丸いがよいとなり。まづ天照太神の御宮居は、丸木をもて造れり。諸〳〵の御社にも鏡をかけらるゝは、丸うて空しうて、よろづ直に寫るを見せしめたまふなるべし。我國は國津神の御國なれば、春の神をむかふるにも、鏡餅とて、第一丸きをぞ用ふなる。草のもち、粽などいふは、有爲の色相を顯はすならん。任他花の香に馴れし衣を返し、單も袷のうら盆になれば、男童は山寺の御兒綰、折から攝待の茶筅髪にゆひなし、ともどち來よとて小手招く。しかも明衣の廣袖を著、未通女等は鬢の髪の經ぬの嶋田わげ、夕風の吹返しにゆひて、いざをどろといふより、手拍子とり足どりする。十五夜の月の輪の如くにこそはをどれ。小夜風に行きかふ袖の移り香は、浮きたる戀のしるべにて、しのの小篠のしのび〳〵にいひより、いつしか昵じき中と

德和歌後萬載集

目録

古今夷曲集

萬載狂歌集

奇警なる場當りと、巧妙なる古歌の滑稽化とを以て能とし、二三大作家を外にしては、多く創作的價値と文學的色彩との認むべきものなく、川柳に見るが如き、單刀直ちに人の肺腑に入る底の諷刺も亦これあるを見ず。但その遊戯文學としての妙味に至りては滾々として盡くる所を知らず、之を鎖閑の慰藉者として、又これを當時の世相の側面觀察として、讀書子の必ず逸すべからざるもの也。

大正四年六月　　　校訂者　塚本哲三

緒言

古今夷曲集は浪花の人行風號は生白堂寛文五年の編に係り、名の如く古へより其當時に至る迄の狂歌を萃めたるものにして、後陽成院第八の皇子智恩院御門跡良純法親王によりて、後西院天皇の叡覽に供したる事、後撰夷曲集の跋文に見ゆ。狂歌の沿革を窺ふべき絕好書なり。今、内容のよく整理せられたる元祿本を以て底本とせり。

萬載狂歌集と德和歌後萬載集とは何れも四方赤良卽ち蜀山人の撰する所にして、前者は天明三年、後者は天明五年、共に所謂天明調の代表的詠作を萃めたるもの、江戶狂歌の粹は擧げてこの內にありと稱するも不可なからん。

狂歌は古への歌集中に散見せる俳諧歌又は戰記文學等に出でたる落首の類に淵源し、德川幕府の始めは專ら京阪地方に流行せしが、天明時代、江戶に四方赤良、唐衣橘洲其他幾多の狂歌師の出づるに及び、最も高調に達して、一時翕然として天下を風靡するの槪を示せり。

蓋し爛熟せる江戶文明の餘澤にして、寔に擊壤鼓腹の太平樂と稱すべく、輕妙なる洒落と、

古今夷曲集 全

萬載狂歌集 全

徳和歌後萬載集 全

